

510

38

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



570-38



關儀一郎編纂

老子國字解全書

大正
12.4.19
内文



目次

老子經國字解

三卷

金蘭齋著

自一三四頁

老子國字解

六卷

海保青陵著

自二五九頁

老子摘解

二卷

廣瀨淡窓著

自五六頁

附錄

老子辨

老子辯

老子攷異

非老子

齊藤拙堂

明宋景濂

清汪中

清吳鼐

目次

一

例言

老子經國字解 刊本三卷 金蘭齋著

寶曆十一年の刻本による。但し本文及注に讀點を附し、假名遣の誤、及び明白なる誤字を訂正せり。又本文の送假名は、刻本の舊によりたれども、多少補訂せり。

老子國字解 寫本六卷 海保青陵著

本書は桂湖村先生の所藏本による。六卷の中初二卷は著者の自筆本なり而して讀點を施し、假名遣の誤を訂正せり。此の書傳本甚だ少なく、爲に異本を得て校正するを得ざりしを遺憾とす。

老子摘解 刊本二卷 廣瀬淡窓著

嘉永二年の刻本による。而して本文に送假名を附し、假名遣の誤を正せり。

本全書の編纂に就いては、湖村先生は珍藏本を貸與せられ、且種々の注意を賜ひ又足利衍述氏は有力なる助言を與へられたり。謹んで感謝の意を表す。

解題

老子經國字解 三卷

金蘭齋著

金蘭齋は、名は忠佑、一名德鄰。蘭齋は其の號なり。後又臥雲叟と號す。秋田の人なり。伊藤仁齋に學び、徙りて京都に住す。老莊を好み、奇行多し。家に儋石の儲なくして晏如たり。専ら老莊を講じて衣食の資に充つ。而して名一時に高く、生徒群を爲せりと云ふ。享保十六年十二月二十四日歿す、年七十九。著す所、老子國字解の外に、退隱草十八卷、異學篇若干卷あり。(近世畸人傳、秋田前賢史談、秋田縣史、老子經國字解序)

蘭齋の老子國字解は、本文は林希逸の口義本により、解釋は王弼林希逸二家を折衷し、往々自説を出せり。即ち道の異名たる谷神を人心上に將ら來りて修養の標的とし、修養の方法は畜の受用にあることを力説し、又所々に佛教の説を引いて參考に資せる等、其の特色なり。又其の文辭は、當時の口語體にして、一種脱俗的の風趣を有し、興味津津たる者あり。伴蒿蹊の近世畸人傳に「此人著しける老子國字解近き頃刻につけり。假名をもて書きしかど、一家の見識あり。他の俚諺抄の類にあらずと、ある人は評しき」といへるは、宜なりと謂ふべし。

老子國字解 六卷

海保青陵著

海保青陵は、名は阜鶴、字は萬和、青陵は其の號、通稱を儀平と云ふ。青山大膳（尼ヶ崎城主、後に丹後宮津に移る）の家老角田市左衛門の子なり。宇佐美瀧水の門に入り、徂徠派の學を修め、専ら文章を以て名あり。青山侯の儒官たること七年、出で、東海南海近畿中國及北陸地方を歴遊し、到る所に經濟談及文章論等を講説す。而して角田の家は、弟某をして繼かしめ、己れは祖父の本姓海保に復し、専ら學問を事とし、諸方に流寓して、悠悠その生を送る、後尾州侯に召され、細井平洲に代りて儒官となりしが、江戸の風土、身體に適せざるを以て、在職三年にして職を辭し、又去つて加越地方に遊び、後また京都に入り、帷を下して講説をつとめしが、文化十四年五月二十九日、病んで歿す。年六十三。青陵は生涯獨居せしを以て、嗣なし。墓は洛東黒谷に在り。其の詳傳は、其の著稽古談の末に附記せる自傳に就いて知るべし。（青陵先生墓誌、稽古談、日本經濟叢書青陵經濟談解題）

青陵の著書は、日本經濟叢書に收めたる善中談、養心談、稽古談、洪範談等九種の外に、墓誌に、文法披雲、老子古傳、（老子國字解と同異未詳）莊子解、詩集、文集を記し、慶長以來諸家著述目錄に、讀書日課法一卷、詩學闡蒙二卷、青陵山人集六卷を列記せり。然れども經濟叢書に收めたる者、及び文法披雲（刊本）老子國字解（寫本）の外は、其の存否を詳かにせず。

青陵の學系は、徂徠派に屬し、其父青溪とともに宇佐美氏の門人たりしも、（青溪は、初め春臺の門人大鹽氏に學び、後宇佐美氏の門に入る。）其の稽古談に載せたる自傳中に、「鶴は十ばかりの時より、宇佐美先生の門人にて、鶴が二十三のとき、先生卒せり。鶴は唯文章すきにて、何派の學問など、いふこと、

大きにさらひなり、わかき時から何派の學問でもなし。即ち鶴が一家の學なり。」と云へるを見れば、學派的の偏見はなかりしが如し。然れども其の所謂る道學者を斥け、専ら經濟實用の學を本領とし、且つ申韓刑名家の風を帯びたる等は、叢園の影響を受けたるや疑ふべからず。而して其の經濟殊に商業學に非凡なる識見を有せるは、其の經濟談を讀みて知るを得べし。

青陵の老子解は、その獨得の見地より解釋を下せる者にして、以爲へらく、老子は孔子以後の人也。而して孔子の仁義道德の世に行はれざるを見て、之を裏面より説明して、世人に行はしめんとせし者にして、其の主意精神は、孔子と全く一致せり。故に老子は論語を以て解釋すべき者也。かくて老子の所謂る道を「サナケレバナラヌ筋ノコト」と説き、此の道を體得せんには、無爲虚靜の必要なるを説き、又得意の經濟眼より處世上の要義を論述せり。而して叙述巧妙にして警拔、條理整然として徹底せるは、其の頭腦の明敏にして、才識の卓越せるを見るに足れり。又曾に講説の巧なるのみならず、老子の本文に錯簡誤脱等あるを考究し、文字訓詁の上にも注意を怠らざりしは、用意周到なりと謂ふべし。

海保青陵先生墓誌

諱阜鶴。字萬和。姓海保。號青陵。江戸人。後開塾於京師。講學不倦。老莊自娛。著有文法披雲。洪範談。行于世。老子古傳。莊子解。詩集。文集。未刊。文化十四年五月二十九日病歿。壽六十三。先生無嗣。今井氏女某。謀不朽。建石墓。在洛東黒谷紫雲石側。

老子摘解 二卷

廣瀨淡窓 著

廣瀨淡窓は豊後日田の人なり。名は建、字は子基、求馬と稱す。幼にして神童の稱あり。而して温恭篤敬言語苟くもせず。龜井元鳳に従つて學ぶ。其塾を開き業を授くるに及び、前後籍に上る者四千餘人。淡窓其の規約を嚴にし、其の課程を密にし、又其の業級を設け、鼓するに月旦評を以てす。乃ち人材彬々、知名の士多く其門より出づ。大村府内の二侯、皆禮を厚うして之を延き、待つに賓師を以てす。安政二年に歿す、年七十四。中城村新兆に葬る。門人私に諡して文玄先生と曰ふ。淡窓の學は、大觀を主とし、人と同異を争はず。儒學を主とし、旁ら佛老を喜ぶ。又其の詩は清高澹雅を以て稱せらる。著す所、遠思樓詩鈔、義府、析言、迂言、老子摘解、醒齋語錄、夜雨寮筆記、經說數種等あり。(事實文編)

老子摘解は、老子の中の二十一章を選びて解釋せる者にして、其の解平易簡明を主とせるも、卓越せる識見を以て大處高處より著眼して、老子の眞意を闡明せんと務めたるは、本書の特色なり。本書の老子末章の解に云はく「老子の道は、無爲を貴ぶ。然れども爲して争はざれば、如何程なしても害なし、無爲の無爲たるは、無爲にあらざして、争はざるにあり。此譯を得れば、終日なして、未嘗てなさすと云ふ主意に當るなり。全篇一利一害相並ぶことを論じ、卷末に至りて、利あつて害あらずと云ひ、一部無爲を主として、卷末に至りて爲而不争と云ふ。是老子第一の秘訣なり云云」と以て其の一斑を知るべき也。又淡窓は摘解を著したる後、析玄を著して老子の奥旨を發揮せり。故に宜しく摘解と并看すべき也。

大正十一年四月

編者 識

老子傳

老子は楚の苦縣の厲郷曲仁里の人也。姓は李氏、名は耳、字は伯陽、諡して聃と曰ふ。周の守藏室の史なり。孔子周に適き、將に禮を老子に問はんごす。老子曰はく。子の言ふ所の者は、其の人と骨と皆己に朽ちたり、獨り其の言在るのみ。且つ君子其の時を得れば則ち駕し、其の時を得ざれば、則ち蓬累して行る。吾れ之を聞く、良賈は深く藏して虚しきが如く、君子盛徳ありて、容貌愚なるが若しご。子の驕氣と多欲と態色と淫志とを去てよ。是れ皆子の身に益なし。吾が子に告ぐる所以は、是の若きのみと。孔子去つて、弟子に謂つて曰はく、鳥は吾れ其の能く飛ぶを知り、魚は吾れ其の能く遊ぶを知り、獸は吾れ其の能く走るを知る。走る者は以て罔を爲すべく、遊ぶ者は以て綸を爲すべく、飛ぶ者は以て矰を爲すべし。龍に至つては、吾れ知ること能はず、其れ風雲に乗じて天に上る。吾れ今日老子を見るに、其れ猶龍の如きかと。老子道徳を修む、其の學自ら隠れて名無きを以て務と爲す。周に居ること久し。周の衰ふる

を見て、廻ち遂に去り關に至る。關の令、尹喜曰はく、子將に隠れんとす、彊ひて我が爲に書を著せよ。是に於て老子廻ち書上下篇を著し、道德の意五千餘言を言つて去る。其の終る所を知ること莫し。或人曰はく、老萊子も亦楚人なり。書十五篇を著し、道家の用を言ふ。孔子ご時を同じうすと云ふ。蓋し老子は百有六十餘歳なり。或は言ふ二百餘歳と。其の道を修めて壽を養へるを以てなり。孔子死してより後、百二十九年にして、史に記す、周の太史儋秦の獻公に見えて曰はく、始め秦ご周ご合して離る、離れて五百歳にして復た合す、合して七十歳にして、霸王たる者出でんと。或人曰はく、儋は即ち老子なりと。或人曰はく、非なりと。世其の然否を知るること莫し。老子は隱君子なり。老子の子名は宗。宗は魏の將ご爲り、段干に封ぜらる。宗の子は注。注の子は宮。宮の玄孫は假。假は漢の孝文帝に仕ふ。而して假の子解、膠西王卬の太傅ご爲る。因つて齊に家す。世の老子を學ぶ者は、則ち儒學を細け、儒學も亦老子を細く。道同じからざれば相爲に謀らずとは、豈是を謂ふか。李耳は無爲にして自ら化じ、清靜にして自ら正し。

太史公曰はく、老子の貴ぶ所の道は、虚無因應にして、無爲に變化す。故に著書辭稱、微妙にして識り難し。莊子は道德を散じて放論す。要は亦之を自然に歸す。申子は卑々として之を名實に施す。韓子は繩墨を引き、事情に切に、是非を明かにす。其れ極めて慘礪にして恩少なし。皆道德の意に原く、而も老子は深遠なり。(史記)

老子經國字解序

周德式微。其藏室柱下之史。曰老聃。迺宣聖所問禮者是也。同時騎青牛。過函關。述五千言。授尹喜者。又曰老聃。馬遷合爲一人。鄭氏分爲二人。未知孰是也。夫精禮法者。何嘗廢仁義。談虛無者。豈能知綱常乎哉。繇此觀之。則鄭說可從矣。歷世悠遠。祖家所謂。兩個泥牛鬪入海。至今無消息。已而已而。莫復道焉。然則嚮之云云者何也。頃浪華書商。遞老子國字解一本。懇序閱之。數十章。細字稠密。老眼摩挲。不終篇而罷。故不及評其得失。大抵倭釋之通套。竄初學之梯航。要不可棄矣。然偶有感於述者之姓名。予也少壯。遊于皇都七八霜。時膺文明。閭巷之間。費舍數十處。有金先生蘭齋。其爲人也。倜儻不羈。不拘禮法。家無儻石。環堵蕭然。顯講老莊。以充粥資。因此鳴于一時。生徒成群。或蚤來叩扉。則先生眠尙濃。不得已起迎之。未及洮頤。直對欵案。其懶可槩焉。予往者無媒。班荆。漸而南歸。屈指既之餘六十年。爾來亡聞其浪跡。及窺窳。在孰歲也。嗚呼。隣人之笛。斜谷之鈴。泫然懷舊。自非予之略知先生之爲人。與其卓識。而序之。則世更屬誰也哉。

寶曆辛巳秋八月之吉

茅溟 高志 養浩 欽題

老子經國字解 敍

玄玄之旨。超然難道也。世之說其道者。情欲放于貨利。內外混淆。沉浮交錯。庶類蔽塞胸臆。茫若望洋。盪若捕影。一玄未窺。矧又玄哉。若夫真遊其玄者。吾今喪我。窈々冥々。參天地之化。善利萬物。恬澹寡欲。潛心以和其天倪。至如子雲之所謂默識安世者。或庶幾乎。元祿正德之際。平安有金蘭齋者。棲心乎湛然之域。遊神乎無何之鄉。遂熟此經。發其奇趣。而極爲不死衛生之要訣。苟非根柢大道。亭々物外。則安得其然矣。而九原不可起。厥人邈隔。今閱其所解。轉傳訛繆。醍醐變將水。是以不佞。不敢顧固陋。私訂魯魚及重複之誤。差加之豨苓。讀者冀可以意逆解也。然則講道之士。知此是筌蹄。而遂放之。形神寂寞。而登春臺。玄奧深探。而保護天年者。豈不復可期焉哉。

寶曆辛巳夏六月

浪華 後藤維德拜題

老子經國字解卷一

金蘭齋述

道可道章第一

道可道非常道。名可名非常名。無名天地之始。有名萬物之母。故常無欲以觀其妙。常有欲以觀其微。此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄。衆妙之門。

○道可一とは。此二句。今迄の人が留め來た所の道は。眞の道でなしと云ふことをひらいたもの也。總じて我道を示さんとするときは。先づ其迷を拂うておかねば示されぬ。故に今人の執着を一等に切斷したと知るべし。○道は谷神の字也。谷神は虚中の神なれば。希夷微にして留めることのならぬもの也。然るを世人留めて道ぢやと云ふは眞の道で無し。それ道は希夷微にして名づけられぬもの也。然るを世人名づけて仁義など云ふは。道の眞の名でないぞ。○常は。千古不易の意也。道の道たる所也。○無名一とは。此より道を示したるもの也。無名とは谷神のことなり。道は虚中の神なれば。名くべきやアのなきもの也。故に谷神を無名と云ふ也。此谷神は天地の因つて出づる處の根源なれば也。それゆゑ天地

も此の谷神より生れたもの也。即ち軽くして清めるものは。上つて陽となり。日月星辰の象をたる。是を名けて天と云ふ。重くして濁れるものは。下つて山川草木となる。是を名けて地と云ふ。此天地は何から生れたなれば。目にこそ見えね。谷神と云ふもの有つて。それから生じたもの也。しかれば名のなき處からみれば。虚無の體也。○有名とは。上の無名に對して別に名目を立て。有名と云ふ也。天地已に有つてより。森羅萬象是より生ず。故に母と云ふ。さて谷神は譬へば天地の魂也。天地は谷神の體也。しかれば天地は谷神と云ふ魂あるものなれば。天地は活物也。故に萬物を生ず。已に天地の名有つてより。萬物あり。天地は萬物をうみだした處の母と云ふなり。人心の上で云へば。一念不動のときは無名にあたる也。已に物に交つて一念動くときは。此よりして善惡邪正のさまぐのことあり。此有名の場にあたる也。○常無とは。天地開闢以前なんにもないときを云ふなり。其無のときにして。此あらゆる有の妙は。何から生れたことぞ。開闢已前は無にして。何にも生ずる物はないがと。無のときに推察して。従つて後に有の妙あることを觀じてみよと也。そこでは手にこそとらね。此の妙を生んだものが一物あり。此をせんさくして。有より見れば。谷神が生んだこと也。○欲とは。かうあらうぞと云ふ詞也。○微は。禮運の注に孔なりといへり。地氣の出入する處。物の出来る處を云ふぞ。○此兩者とは。希夷微な處より云へば。無なり。萬物形をむすんだ處より云へば。有也。實は二つはなし。同じく皆谷神より出たぞ。名くる處により云へば。實は一物ぢやぞ。しかれば有無は谷神の妙用也。如此妙は微妙にして名け云ふべきやうはなし。是をさして玄と云ふ。玄は贊美の詞也。○衆妙之門とは。門は母と同じこと也。此谷神衆物の妙を出す處の門ぢやと也。衆妙は此門より出づれば。一二をあげて云へば。柳の縁り花の紅は。誰れ有つてそめねども。谷神の妙用なり。鳥の飛び獸の走るも。谷神が主也。物々一太極。物々一谷神。物々一造化。物々一佛性なり。是の章。老子の古今獨歩する所の妙處也となり。

天下皆知章第二

天下皆知^ニ美^ノ之爲^レ美。斯^レ惡^ノ已^ミ。皆知^ニ善^ノ之爲^レ善。斯^レ不善^ノ已^ミ。故^ニ有^ニ無^ノ相生^シ。難^シ易^ノ相成^リ。長^シ短^ノ相形^レ。高^シ下^ノ相傾^キ。音^ノ聲^ノ相和^シ。前^シ後^ノ相隨^フ。是^ヲ以^テ聖^人處^ニ無^爲之事^ニ。行^フ不^言之教^ヲ。萬^物作^ヲ焉^ニ而^レ不^辭。生^ジ而^レ不^有。爲^シ而^レ不^恃。功^ヲ成^テ而^レ弗^居。夫^レ唯^レ弗^居。是^ヲ以^テ不^去。

○首章には。有無の二字を以て。谷神の本然を知る工夫の上を示し。此章には。無心にして自然に法と。無爲の道を行ふ處を示したと知るべし。落着くの地は。長生の道に歸る也。面には見えねども。主意を探れば然り。古今の註者の見不及此也。○天下とは。此二句は。専ら無心を辨へたるなり。何事も無心にして爲すときは。道に叶ふ。少しでも有心なれば。早道に不叶と云ふことを示したる也。○天下とは。きはめた詞也。美とは。我なす業の上で云。齊家治國平天下の類は美と云ふもの也。善は心の上で云へば。忠孝信の類也。言ふは天下何にてもあれ。美事をなして目美ぢやと思ふときは。早や有心に

して不叶道也。實の美と云もので。道に叶ふ美にして。不知其美無心なれば。是れ無心を説くなり。何ぞ一善をつとめて自ら善ぢやと思ふときは。眞の善ではないぞ。上の句と一意也。譬へば水は冷なれども。自ら其冷を知らず。是真冷也。火は熱して其熱自不知。是真熱なり。無心なれば眞に叶ふと云ふもの也。○故―とは。上の二句は無心の上を説き。此六句は自然のなりに従ふことを説いた者。しかれば無心にして自然の法に従へば。氣を使ふことなき故。長生する也。畜の受用也。自然のなりと云ふは。ぬきさしのならぬもの也。然るを今人手入をする故に。氣を使つて天死する也。○有無―とは。理の上で云ふ。相生とは。有より無を生じて。互に離れぬもの也。言ふは無を捨て有にせうと云つてもならぬもの也。互に然り。然るを凡夫は一方ばかりを取らんとするゆゑ。氣を使ふ也。聖人は有は有に従ひ。無は無に従つて。少しも手入れはなされず。自然に任せて行はるゝ也。故に不勞。有無は自然の理なれば。ぬきさしならぬもの也。然るを凡夫はぬきさしする也。○難易―とは。人のたす業の上で云。人のすることは。難易相得て成就する也。譬へば山を上り下らんと欲すれば。先のぼりて下る。下るは易し。登るは難き也。是互にもちあうて成就す。然るを人は難を辟けて。易の場を思ひ従ふ。聖人は自然に任せて。そのなりに難易相得て行ふ也。○長短―とは。物々形の上で云ふ。譬へば鶴の足は短く。鶴の足は長し。鳴の足の短きも不足に非ず。鶴の足長きも非餘。是自然なり。故に聖人長も短もそのまゝにて。自然に任せ給ふ也。○高下―とは。勢の上にて云ふ。譬へば山は高く地は平也。是互に相傾くと云ふもの也。それもそれに任せたがよき也。若し山を平にして。地を高くせんとせば。其

勞可知。是有爲也。聖人はそのなりに任す。は無爲故不勞也。○音聲―とは。聲は出す聲也。音はひびき也。聲は本。音は末也。相和は互に應ずること也。聲ばかりにして音のなきやうにすることならぬ也。又音ばかりにもならぬ也。音聲は互に相應するもの也。若し一方ばかりにせんと欲せば。其勞可知也。○前後―とは。方角で云ふ。○相隨とは。付きまはりて不相離ること也。前有れば後へあり。左有れば右有るなれば。如此自然の法と云ふものは。ぬきさしならぬもの也。然るを凡夫は一方ばかりにせんとするゆゑ。勞甚しき也。勞して而も無功也。是則短命の所由出也。聖人は此を能く辨へて。ぬきさしの手入はなされぬ也。其手入をせぬ處が。無爲の道を行ふと云ふもの也。其場に望んでその事を行ふは。自然の法に従つて。自然の道無爲を行ふと云ふもの也。無爲なれば必不勞長生する也。其自然のなりに従つて無爲を行ふ處。畜の受用と云ふもの也。是養生の處へ落つるではないか。○是以聖人―とは。自然に任せて手入をせぬが。無爲の事にをると云ふもの也。故に長生する也。○行不言―とは。聖人の言行をば萬民手本とする也。上の六句で見るがよき也。山の高き地の下きは。萬人知つて居ること也。何にも言ふことはなき也。聖人は山は高きに任せ。地は下きに任せて。自然の法を行ひ給ふ。何ぞこゝにおいて云ふことかこれあらん。其聖人の行はるる處を。民手本として用ふるは。不言の教と云ふもの也。若貧窮の場を去つて富貴の場を求むることを。行つて見せ給はゞ。手本として不言の教とは云はれぬ也。○萬物―とは。此より天地の上に付て云ふ。聖人も天地に則り給ふ故に。天地と一體なることを云ふ。天地間萬の群りて作るは。皆天地のなす處なり。しかれば天地は無心より萬物を作爲することなれば。

勞することはなき也。故に萬物を作爲して不辭。無心にして勞なきゆえ。天地の休息する日はなく。古今衰ふるの色なし。○生不—とは。有は心にもつこと也。天地の間あらゆるものを生ずれども。心にめて是ぞ我が生んだと云ふ心は無い也。○爲—とは。天地の業は大也。四時を運行して。風雨寒暑。柳は緑り花は紅。皆天地の業也。然るを天地無心にして。心に恃んで自滿不爲。少なりとも自滿の心あれば。有心と云ふもので。長く續かぬもの也。特は自滿してほこりたかぶることぞ。○功成—とは。森羅萬象成就したる處は。天地の功成就したと云ふもの也。然れども天地は自らその功の上に不居。無心也。夫唯忘れて無心也。故此功を千古不失と也。少しも功の上に居てたかぶらば。其功を失うて。今迄は續かぬことぞ。○不去—とは。功を不失こと也。今日の人。自ら天地の功ちやと云ふに氣がつかぬ也。聖人は天地に法り給ふゆる。其功成就。而無心ゆえ。長生なさるとなり。

不尙賢章第三

不尙賢。使民不爭。不貴難得之貨。使民不爲盜。不見可欲。使心不亂。是以聖人之治。虛其心。實其腹。弱其志。強其骨。常使民無知無欲。使夫知者不敢爲也。爲無爲。則無不治。

○此段は。人君の上で云ふ。總じて我道を立て。教を施したれんとするときは。人君の上で人君を相手に取つて。政杯の上で説くなり。釋氏も國王を相手にす。儒者勿論のこと也。三教ともに同じこと也。○賢と云ふは。小がしこい知を云ふ。聖賢の賢とは異なり。總じて人君小がしこい知を以て政をなすときは。民も上に習つて。小がしこき智を出して争ふこと也。八宗の争も。小がしこき智より起つたもの也。人君大臣無爲を以て教ふるときは。民も化して争なく治まること也。○不貴難得貨とは。貨を願ふは欲也。人君欲有るときは。下も習うて欲をほしむにする故に。屋をやき人を殺し。不忠不孝をなすこと也。人君無智無欲にして政をなすときは。下民も化して無欲無知にして。盜杯はせぬこと也。是を無爲自然の化と云ふなり。争とは。譬へばあとめろん。公事さたの類也。宗旨争と云ふ。智を高ぶるからしておこりたるもの也。争ふこと無きときは。心氣を使はざる故に長生すること也。上に無智無欲なれば。下その如くにして。人を殺すの盜杯も無くして治まること也。實は養生の道へ説き落したものと知るべし。○不見可欲—とは。耳目口鼻の欲也。この耳目口鼻の好處に引かれて心氣を使ふ故に。亂れて短命也。耳目口鼻の欲をはなれたれば。心不亂して長生すること也。此は國家を治むると。養生の上とをかねて説く也。無智無欲の方を國家に施せば。民も無欲無智にして。不爭不盜して治まるは。即無爲の政と云ふもの也。無欲無智を身に施せば。心氣を不使不亂ときは。長生をとげ得ること也。是國家と身との養生の道にかゝる處也。扱て知と欲との離れぬと云ふことを知るべし。譬へば難得貨を費ふは欲也。その貨如何して得べきと。枕をくだきて分別するときは。或は築地をこえ。土藏を破るに

は。角するときはよきはすと云ふやうな。おそろしき分別仕出す者也。是即知なり。かくするときは。あの土藏はたやすくやぶるゝぞといふ知あるときは。たちまちその土藏のうちのたからをとらんとほつする心出づるなり。如此故に。欲より知を生じ。知より欲生じて。知欲は離れぬもの也と知るべし。故に知といへば。欲は内にこもりて有り。欲を云へば。知は内にふくみ有ると可知。此處も知欲をかねて見るべし。○是以―とは。此所林氏虛其心と云ふより其骨をと云ふ迄を。三句にして見たは。大に非也。二句にして見るべし。○虚心と云は。即不見可欲と云ふ處也。即無心也。無心なるときは。谷神の徳腹に實すること也。谷神と云主人が腹に充實する故に。名利色欲の魔も内へ入ることならず。若し心不虛ば。谷神と云ふ主不實。腹はあきやに成りて在る故に。名利色欲の魔が内へ入ること也。そこで心氣を使ふ故に。邪知邪欲起つて。心亂れて短命すること也。虛其心にして谷神の徳滿つるときは。名利色欲の爲に心を不使。亂るゝことも無き也。然るときは長命するはず也。○弱其骨―とは。心の往く處を志といへども。それは善へ往くも志。惡へ往くも志也。善をかねて志と云ふことなれども。此の志は専ら惡へ赴く志也。論語の匹夫不能奪其志と云ふとはちがふこと也。弱の字下し得て奇妙也。譬へば春駒の勢強く馳出づるを。乗る人下手なれば。たづなを強くしめて。勢つよきをとめる也。その時は。馬彌強くなりてとまらぬ者なり。上手なれば。いさんでゆく處を。たづなをゆるめて間をぬいて。そこで馬の氣もはり合ひぬけて。一さんにかける處も止まるもの也。丁度如此。名利には馳せ出づる志は強き也。無理に止めたことでは。彌名利の志つよく起つて止められぬ也。そのとき志のとりあきやうが大事也。

欲を去るときは。名利にはせる處の志弱くなりて止まるはず也。その駒あつかひやうが下手なるときは。中々止まることではなきなり。なれば其志をとりあつかうて弱まし止むるときは。心氣を使はぬゆゑ。身勞することもなく。骨が壯に強くして長生すること必定也。○常使民―とは。上に云ふ如く。己れ無知無欲故。下民も無知無欲也。そこで天下太平なること也。○使夫知者―とは。下民の小がしこき知あるものを云ふ也。人君無知無欲にして。大道へ目を付けて居るゆゑ。たとへ小がしこき知ある者も。うのけほども我小がしこき知を出して。あとめ論。公事のやうなことは。爲ることならぬ也。爲事不成のみに非ず。終には上の無知無欲に化せられて。我れも無知無欲になること也。なれば無爲を以て下民を治むるときは。治まらぬと云ふことは無きなり。即無爲の政と云ふもの也。故に上古堯舜の民は。無知無欲にして心氣を不使。故に長命にして治まる處が。無爲の政にして治むる効と云ふもの也。○智者とは。邪智の人を云ふなり。

道冲章第四

道^ハ冲^{ニシテ}而用^レ之^ヲ。或^ハ不^レ盈^タ。淵^乎。似^ニ萬物之宗^ニ。挫^ニ其銳^ヲ。解^ニ其紛^ヲ。和^ニ其光^ヲ。同^ニ其塵^ニ。湛^兮。似^ニ若^ク存^{スル}。吾^レ不^レ知^誰之子^{ナラ}。象^ニ帝之先^ニ。

○此段の二句。道の本然を云ふ也。道は谷神の字也。本然の上で解き。妙用の上でも説く也。道の本然を語るときは。深微にして手にも不取。虚なるもの也。時に是を用ふるときは。無窮無盡なもの也。○

或不盈とは。或盈ちて現在して。柳は緑り花は紅に有る所は。盈ちたると云ふもの也。如此なすその體はといへば。無聲無臭なもの也。是不盈と云ふもの也。手にも不取。足にも不踏もの也。或不盈と云つて。盈つると云ふことはふくんだものなり。或の字。表裏を該ねて云ふ字也。如此書く所が文法也。○淵乎—とは。道の本然を語るときは。萬物萬事の本元宗也。家の宗領。水の源也。萬物是より出づること也。○似とは。疑つて賛美しての詞也。萬物宗となる所のものが道ちやと。決して云へば慮外なるゆゑ。萬物の元宗たるものが。道と云ふものであらうかと。不決して能く疑はしく云ひたることぞ。此も其例なり。淵乎は。道理の深いこと也。○挫其銳—とは。此段は道の修行。生を全う持つのことを云ひたるもの也。銳はときこと也。譬へばとぎすましたる刃は。物にふれては齒こぼれやすきもの也。玉もみがきたてたる玉は。氣がさえて。物にふれて折れやすくかけやすきもの也。刃もとかくなまくらなれば。物にふれても齒のこぼれることなく。玉もみがきをかけぬときは。砂石の内に有つても。折れくだけもせぬなり。丁度その如く。人も亂世無道のときは。智をかくし。にぶくなりて居たが吉なり。かゝる亂世にかしこだてをする故に。人のために殺され。或は心氣を使うて。長命を不遂也。○解其紛—とは。糸を亂したる如きの世に在るときは。谷神を我安宅の居處にして居るときは。我心不亂解けて居ること也。譬へば大山崩れかゝると云つても。谷神を安宅として安んじて居るときは。心の紛るゝことなきなり。老子は春秋の末。戰國の時に生れて。世の亂れたるときなれば。如此云ふなり。時がよくば角は云ふまじ。而も此折り。よき人も皆死にたるゆゑ。亂世のときの身のたもちやうを教へたもの也。

なれば如此心不亂長生すること也。老子妄に生を貪るではなき也。時を待ちたるものなり。○和其光—とは。和光同塵のすがた也。亂世には我智の光をやはらげくらまして。世の濁塵に交りて居るが。亂世に身を有つの肝要也。亂世に我知をきらめかして。世俗の塵の如く濁る輩と。水ぎはを立つるゆゑ。死をまぬかれぬこと也。○湛兮—とは。此より道の本然へ立かへりて説く也。湛と云ふは。池などへ一盃にたゝへたる止水のこと也。○似若存—とは。とこしなへに存在してあること也。此末の章。谷神不死と云ふ心なり。總じて波もなく池などへ一盃たゝへたる止水には。森羅萬象の影よく映るもの也。人心もその如く。心無知無欲なるときは。萬善全く映るもの也。道の本元は。如此湛々として波なきが如く。故に萬物を生ずと云へども。無心なるゆゑ。とこしなへに存在して。道と云ふ物の盡きると云ふことは無き也。人心も。無知無欲にして自然にして。自然に従ふときは。心氣を使はぬ。無究の道理に應じて長生する筈也。扱如此無盡ことも。道と云ふものは何ものゝ子にて。いつより生じて有るや。不知と也。天地開闢の先より。象を生じて有ると也。帝と云ふは。天を尊んで云ふ詞也。地も尊んで云ふときは。后土と云ふ。上帝后土と云ふときは。天地のこと也。此も天地をかねて云ひたるもの也。○象とは。目にも不見手にも不取。止められぬ象を指して云ふ時。象の字を書くこと也。風類は象也。實字でカタチヌとよむべし。なれば谷神と云ふものは。天地未分の時より象を成就してあつて。不知誰子となり。

天地不仁章第五

天地不_レ仁_{トセ}。以_ニ萬物_ヲ爲_ニ芻狗_ト。聖人不_レ仁_{トセ}。以_ニ百姓_ヲ爲_ニ芻狗_ト。天地之間_ハ。其_レ猶_ニ橐籥_ニ乎_カ。虚_ニ而不_レ屈_セ。動_{イナ}而愈_ト出_ツ。多言_ハ數_ク窮_ス。不如_カ守_レ中_ヲ。

○此章。天地無心にして物を生じ。聖王無心にして民を養ふことを云ふ。是皆自然也。道也。修養の道も。内にふくみはらまれてある也。○天地とは。天地の萬物を生じて成就せしむるをみれば。天地には大なる仁があるなり。なれども萬物を生成して。是は我なす所の仁恵ちやと云つて。自功となされぬ也。即無心也。此れが眞の仁と云ふもの也。即少なりとも我功と思ふときは。有心にして眞の仁とは云はれぬ也。○以萬物とは。此は天地無心なるの喩也。芻狗とは。わらにて作つたる犬のこと也。此芻狗と云ふもの。祭に用ふるもの。即犠牲などを具ふる臺也。此芻狗は。祭の時に當つて用ひらるゝときは。綾羅錦繡を以て飾つて。殊の外調法にすること也。祭過ぎたときは。もはや不入故に不貴。路邊に棄つること也。其ときは行人も足にてふんで通り。或は釜のたき草杯にする也。然れども芻狗は何とも不思無心で居るなり。丁度その如く。天地は萬物を生ずるを以て。己が仁とは思召されず。芻狗の如く無心でござること也。扱老子を説く者。聖人は萬物百姓を芻狗の如く。ちりあくたのやうに。何とも思召さぬことと見たり。大に誤れり。上聖王萬民を塵芥の如く。何とも思召さぬときは。民を棄つると云ふもの也。此譬は天地。生物を無心にして。己が功とせず。聖人。養民を無心にして。恩にさせるこ

となき事を云つたもの也。林註詳に評せり。老莊の語は。怪しき所多く。人を惑す所の有るくせが有る也。此芻狗と云ふも。奇怪な語と云ふもの也。○聖人とは。上て云ふと同じこと也。聖人は即天地なり。天地は即聖人なり。上の例を推して知るべし。此等分双關の文法と云ふ也。聖人民を養ひ教へ給ふ所は。大なる仁なるなり。然れども自ら仁と思召さず。無心にして行はせらるれば。是眞の仁と云ふもの也。○天地之間とは。此は天地之間。物を生ずる處に於ては無心なれども。谷神と云ふが有つて。萬物を生ずると云ふことを云はんため。橐籥の喩を起したなり。橐は鍛冶のもつフイゴのひつ也。籥は出人するくだ也。なればふいごの中は虚にして。何にも無きもの也。然れども人用之風を生じて。萬器生成すること也。是たやくの中は。虚にして一物もなければ。萬器を生出すことなり。丁度如其。天地之間は虚にして。本何も無きなり。然れども谷神と云ふもの有つて萬物を生成するなり。谷神は虚中の神也。橐籥は中がうつぼにして物がなないもの也。天地も虚にして。一物も本ない也。然れば共に虚中にして萬物を生ずるなれば。天地の體は大なる橐籥也。谷神の天地に於ける。則橐籥に風の於けるが如く。橐籥の器を生成することは。本虚中より生ずるゆゑ。屈し盡くることなく。用之彌。風生じ。動かせば彌。萬器を生出して有ることなり。天地の萬物を生ずるも。本虚中より無心にして生ずるゆゑ。盡くることなし。千古萬古天地物を生ずる處盡きぬ也。春秋夏冬と推移れば。彌其功成ずことなり。なれば天地谷神の道體は。言葉にては不_レ云_レもの也。谷神を言語で云はんとすれば。チヨツ／＼とそこ／＼で言ふが。いきつまりていはれぬなり。然れば默然として中心にして守つて居るがよいと也。○多言とは。

聴くしてものを多く云へば。心がさわがしくなりて。理にくらきもの也。譬へば止水の如きは。森羅萬象の影をよく映すこと也。波水には其影見えぬもの也。心も又虚にして静なときは。萬事の道理に於て。明ならずと云ふことなし。多言して心の波立つときは。理に於て通ずることなし。動くときは氣を使ふことなれば。養生の道もかけて。長生は不叶也。然るときは以言心を動すことなく。口を黙して中ち心を守つて居れば。修養の道にも叶ふこと也。註に孔子の語を引て。老子の意に合せて。林氏がじまんしたは。大に非なり。老子の意は。修養を旨として説いたもの也。林註に。或者以爲戒人多言與上意不貫矣と云つて。林氏が評したは。又大に非也。老子はなるほど多言を戒められたなり。養生を主として説くからは。多言心の動を戒むるはずなり。

谷神不死章第六

谷神不死。是謂玄牝。玄牝之門。是謂天地根。綿綿若存。用之不勤。

○谷神は老子の秘密藏。而他に所不出也。然れども老子五千言之間。谷神の二字を解くもの也。一部通貫之筋骨。而諸家不知也。故に林氏も此所ではかり谷神を象に由つて説く也。老子を見る所の見無き故也。老子の主意を見んと欲せば。莊子を熟讀すべきなり。莊子は道家の二祖にして。老子の道の書を見て傳へたもの也。故に老子の旨を莊子の書中に解いて。老子の養生して命を有つことは。徒に命を貪つ

てのことではない。時命相戻る故に。長生を好むと解いたなり。然れども諸學者不知也。なれば莊子程の注はないなり。老子は谷神と云ひ。莊子は造化と云ふなり。皆同じこと也。道と云ふも谷神の字なり。道と云ふは三教に通じて云ふ名也。然れども各指す處有り。儒者専ら仁義を道と云ひ。佛者専ら本來面目空の一字を指して道と云ひ。道家専ら谷神を養つて死なざるやうにして居るを道と云ふ。儒者と佛者と學すちの背く處は。谷神より分れたものなり。而るを程子谷神の章可也と云ふは。儒者に似合はぬこと也。扱谷神は。物として而無不具。即儒の一物一太極。佛者の一物一佛性也。道家は一谷神也。人々此谷神を死なざるやうに養ふが。老子の修養の第一也。○谷神とは。虚中の神也。天地滅却すとも。亡死と云ふことはなし。勿論いつから有るやら。其始を知らず。今日より以後。百億萬歳經と云ふとも。亡失せると云ふことはなし。而も虚中の神なれば。一切の相を離れて。手足に不掛言句に不渡もの也。故に道可道非常道と云ふ。古今不易のもの也。○玄牝は谷神を贊美して云ふ也。道と云はぬなり。牝は女けだもの也。母の義をとり。物の因つて出づる處を云ふ也。森羅萬象皆谷神より出づる也。玄とは。其所以は玄の微妙にして計不知所よりして。玄牝と云つたもの。門と云ふも。直に玄牝の字を受けて。物の因つていづる處を云ふ。衆妙の門なり。天地未開より存して。天地もこれより出でたるなれば。天地の大根は谷神ぢやと也。綿々とつらなり續いて不止不絶。長へに存在して有るゆゑ。綿々若存と云ふ也。若は疑の詞也。贊美して云ふ也。此四字は不死の二字に響けり。○用之とは。勤勞と續いて。つとめ難義すること也。谷神が萬物を生出し。風雨寒暑。草木の榮枯。日月晝夜のめぐり。皆谷神の所作

也。なれば人間の上で見れば難義な勤め也。而も用之勤勞はなきなり。人間なれば大に勤勞あることなり。天地は用之て心氣を不遺。故に不死長生するもの也。なせなれば無心よりして出生する故也。骨折はなき也。扱谷神は老子の秘密藏なれば。一部の書に渡つて無不在。然るに此ばかり云ふは。註家淺見なれば也。此章肝要の所也。

天長地久章第七

天長地久。天地所以能長且久者。以其不自生。故能長。是以聖人後其身而身先。外其身而身存。非以其無私耶。故能成其私。

○此章。老子彌長生の道を説きたり。長久と云ふは齡久しき也。天地の長久な子細を推して見るときは。別のことはない也。森羅萬象生じて自生するに心ないゆゑ也。生ずるに心あれば。心勞して長生はない也。天地の成生する處は。大なる務めなり。然れども病煩なく。其務不怠行はれて。千古同じこと也。是天地に勞する處なきゆゑ也。人も亦無爲無心にして行ふときは。萬物應じて無勞長生する筈也。人の短生なることは。心氣をつかふゆゑ也。○是以とは。後其身とは不爭の徳を貴んで。不爭して勝つこと也。強氣を避けて柔弱を守るときは。身は立つてゆくもの也。○外其身とは。我身を忘れたこと也。我身を忘れて身は存すること也。身を捨て、身を存するを云ふ也。即吾喪我也。血骨の色身をはな

れたるときは。法身の佛性は立ちゆくこと也。○非以無其私とは。私は身のこと也。身と云へば廣し。我と云へば。一分の身にかゝるなり。身と云ふものは。面々の我獨前なもの也。故に我寒けれども他人の身はさむきことはなき也。然れば此れ私は一分の身上を云ひたる也。常に人に對して云ふも。我一分の身をば私と云ふ。此も其道理也。後身を外身と云ふは。私なきを以てすると云ふもの也。身を捨てた處也。身存と云ふは。成其私と云ふもの也。即身存在して不爭。故に身に災不來。不爭ときは。不勞心氣長生すること也。以無其私成其私と云ふものなり。有私ときは。身をすてずして氣を勞するゆゑ。短生すること也。

上善若水章第八

上善若水。水善利萬物而不爭。處衆人之所惡。故幾於道矣。居善地。心善淵。與善仁。言善信。政善治。事善能。動善時。夫唯不爭。故無尤矣。

○上善とは。不爭の徳を説くなり。争ふときは災をとり。長生不叶ゆゑなり。水善の善。虛字也。水の善を述ぶるなり。萬物利益することなり。今日の人命生を有つてゐるは。水の利益也。如此萬物利益而争ひをせぬなり。水は方圓の器に従ふと云ふ是也。方圓に従つて不爭。故に水にきずはつかぬ也。物に逆はぬゆゑ也。争ふときは必疵付いて破れをとるもの也。人も亦同じこと也。不爭れば必破れをとら

ず。長生する也。衆人のあしき町處の下卑の地に居て。争ひをせぬ也。人の下卑の地を嫌うて。昌んの地などに居るを恥惡むゆゑ。災をとることなし。水の性は。流に順ひ卑きに下るが水性也。其性のまゝに任せて居るゆゑ。長生して災を不取也。水の心となつて居るときは。どこちやと云ふとも。惡き地と云ふはなきなり。皆善地なり。水の其地を嫌ふためしはなきなり。人も亦無心にして其處を安んじて居るときは。皆善地也。水の心となつて居るときは。心も淵然と定つて。靜にして争ひは無きなり。水の心と成つて。萬物にあたへ施すときは。皆善仁也。利萬物の類是なり。水の心と成つて言へば。皆善信にして偽はなき也。言處即信のすがたをあらはす也。方器に入れば方也。圓に入れば圓なり。皆信なり。少しも違ふ處なき也。水の心と成つて政をするときは。皆善治にあらずと云ふことなき也。水の心となつて業をするときは。皆善能也。惡しき業と云ふことは無き也。其時に不當と云ふことは無きなり。如此なれば唯不爭故也。争ふときは人心破を取つて。とがめうらみらるゝ也。なれば不爭柔弱にして事をなす時は。全く成就してならずと云ふことなき也。總じて人よりとがめ災をとることなき也。道の字。此は谷神などを云ふにあらず。我修養の道に近しと云ふこと也。

持而盈之章第九

持^{ツテ}而^レ盈^ス之^ヲ。不^レ如^ニ其^カ已^ム。揣^{ツテ}而^レ銳^ス之^ヲ。不^レ可^ニ長^ク保^ツ。金玉滿^ル堂^ニ。莫^ク之^レ能^ク守^ル。富貴^ニ而^レ驕^ル。自^ラ遺^ス其^ノ咎^ヲ。功^ヲ成^リ名^ヲ遂^グ。身^ヲ退^ク天^ノ之^レ道^ヲ。

道

○此段は。物十分に盈つるときは溢るゝうれへある故。戒めたもの也。人欲は盈ちて止まることを不知ものなり。其れを戒めたは。水を器に一盃入れて持つときは。必こぼるゝ也。盈つるを持つたんよりは。持たざるには如かず。○已むとは。持つことを已むるを云ふ。○揣とは。及なればとぎすまし。玉なれば磨さすましたときは。物にふれて折るゝ愁あり。然るときは長く保つことは不成也。にぶき及は折るゝ愁はなし。故に長生するなり。是れ亂世無道の時。小がしき智を出すゆゑ戒めたもの也。金玉も堂に満つるときは。火水盜難愁多くして。よく守ることならざるもの也。富貴にしておごるときは。必身亡ぶる也。とかく盈と云ふが惡きこと也。日月も中分すれば傾くなり。功成名遂げて身退くは。山林に隱遁する類ではなき也。止まることを知ること也。我分を知つて安んじて居ること也。然るときは身に災は取ることなきなり。

載營魄章第十

載^{メテ}營^ヲ魄^ヲ一^ニ抱^ム。能^ク無^レ離^ル乎^カ。專^ニ氣^ヲ致^{シテ}柔^ク。能^ク如^ニ嬰^ノ兒^ノ乎^カ。滌^ク除^ク玄^ヲ覽^{シテ}。能^ク無^レ疵^乎。愛^{シテ}民^ヲ治^メ國^ヲ。能^ク無^レ爲^ス乎^カ。天^ノ門^ヲ開^キ闔^{シテ}。能^ク無^レ雌^乎。明^ク白^ク四^ノ達^{シテ}。能^ク無^レ知^乎。生^メ之^ヲ畜^メ之^ヲ。生^{シテ}而^レ不^レ有^ク。爲^{シテ}而^レ

不恃。長而不宰。是謂玄德。

○此章。専ら畜の受用也。二十一章五十一章通じて見るべし。尤重き章也。營魄は。諸家註皆雖有一理。不入手也。魄は。形に屬する精魄也。目の見る處耳の聞處は魄也。○營とは。形の魄。各役義有り。經營の義也。目は見ることを役とし。耳は聞くことを營みはかる也。それを營と云ふなれば。營は魄に屬して云ひたる字也。唯魄と云義也。載とは。車に物をのせて東西南北に自由に使ふこと也。なれば此魄をのせて使ふ主有り。即谷神也。谷神を名のらずして載の字に含めり。谷神が使つて魄の用をなさしむること也。谷神無く成るときは魄の用無き也。死者の如き是也。○抱一とは。一とは即谷神の一也。上て名のらず。一と云ふなり。知欲有るときは。此一。身を離れて失ふ也。此一を失離するときは。魄の營經すること不成也。只此一を抱て不失。則長生の魄能用て成す也。是不失こと也。○專氣とは。畜の受用也。嬰兒は谷神の姿也。六根乍有。六欲無之する故元氣全し。故に終日啼けどもその聲不枯。久しくみれどもまじろかず。六欲無きとは。足行も爲にすること有つて行くに非ず。無心にして物を追ふ處の心定つて。氣散ずることなき也。此氣が純一專一にして他物成ことなき也。故に精全也。氣散じて不專一。則早死の本也。專氣を莊子は純氣の守と云ふ也。元氣全く精氣昌なる故に。其握り強し。其筋骨は和なれど。握りのかたきは致柔と云もの也。筋骨柔にして握かたきは。元氣全き處也。如此氣專一に精しく元氣全きは。長生の方也。嬰兒は無知無欲ゆえ也。○滌除玄覽とは。煩想をすゞきはらうて。玄の微妙の谷神を觀覽して。此谷神にさす付けぬやうにせよと也。覽は。觀じてみること也。常人

は知欲を滌除せざることゆえ。谷神を觀覽すること不成也。知欲有ることゆえ谷神へ疵附く也。玄覽は。谷神の面目を覽すること也。○愛民とは。谷神は自然に無爲なもの也。國民を愛する處無爲自然なれば。能く治つて愛及ぶ也。政の上で云へば。君を相手にして云ふ也。君は教の所由出故也。此無爲の道を政に施せば。治愛廣く。身に施せば。畜の受用也。○天門とは。天の物を生じ用をなす。近くしては晝は陽に屬して天門開くなり。夜は陰に屬して天門の闔づる處也。遠くしては四時。春夏陽にして萬物生ず。門の開也。秋冬は陰にして萬物收む。天門の闔づる也。天門如此萬物を生成收藏の用をなす。皆無心也。人々望事に無心にして行へば。功成不勞也。即長生す。有心にして行ふ故に短命也。雖は。めとり母也。生の義を取る也。○明白とは。知の明白四方に通ぜざと云ふ處なき也。知の四方に達して。能守るに無知を以てせんか。以てすまじき乎。以上の數句。皆人に責詰つて教をたるゝの辭也。然れども無心にして自ら知つたと思ふことはなき也。下は字の如く也。

三十輻章第十一

三十輻共一轂。當其無有車之用。埏埴以爲器。當其無有器之用。鑿戶牖以爲室。當其無有室之用。故有之以爲利。無之以爲用。

○此段は。虚なれば用に立つと云ふことを解く也。人我の一念起つて。内物欲の爲に塞蔽せられれば。外

萬物の理に味くして。分明に應ずることならぬもの也。内心は利欲の蔽を拂ひぬれば。外萬物に應せぬと云ふことはなきなり。故に虚則力達する也。車輪の輻は。一ヶ月三十日に形つて三十輻のもの也。輻は輪を圓に張るもの也。車の三十輻ある輪は。一つ轂に集つて。旋轉して用を達する也。轂は中虚にして軸を通ずる穴あるもの也。車の用の達するは。轂の虚無の穴に依つて用を達する也。○堯堯とよむは。古注の點也。此佳也。堯とは。水を以てこねること也。埴は。ねば土のこと也。なれば埴をこねて茶碗の如き器を作る也。其茶碗の用に立つ處は。中虚なる處を茶碗に水を盛つて用立つること也。此茶碗の用は。其中の虚無な處に有る也。戸牖は。家の往來の口也、路地には柱もなくして虚なるゆゑ。往來の用を成す也。牖は。まどさまの類也。牖は壁などをうがつて穴を明けて虚なるゆゑ。明を取つて用立つること也。なれば人の室家を作つて用の達する處は。戸牖也。戸牖は虚なり。其虚なるところが用に立つ也。○有―とは。有は實體有る者を云ふ也。車器室の實體あるもの也。轂の虚にしてある所が。用を達するゆゑぢやと也。利は。己に利益也。調法になること也。此は全く譬喩の章也。即老莊虚無を尊ぶ此也。二教實體有る物の利益たる處は。虚無の物が用をなすゆゑ也。

五色章第十二

五色令_レ人_{ラシテ}目盲_セ。五音令_レ人_{ラシテ}耳聾_セ。五味令_レ人_{ラシテ}口爽_ハ。馳騁田獵令_レ人_{ラシテ}心發_レ狂_ヲ。難得_レ之貨_ハ。令人_{ラシテ}行妨_ク。是以_レ聖人爲_レ腹_ヲ

不爲_レ目_ヲ。故去_レ彼_ヲ取_レ此_ヲ。

○此段は。道は本來空にして。一切の色相を離れて。形色味の類は無いと云ふことを云ふ也。五色は。人のゑとり拵へた色なれば。眞の色ではなき故に。五色の彩は。人に眞色を見誤らする也。人目彼五色にまどはされて。眞の色を見る處に於ては。盲目の如くにして。眞の色を見得することは不成也。眞の色は。色形と云ふものはなき也。五音の宮商角徵羽も。人の拵へたもの也。上の句と同意。五味は。辛苦甘酸鹹也。此れ眞味なれども。口をして爽はしむることなれば。眞味にてはなき也。なれば谷神は虚中の神なれば。味はなきはず也。○馳騁田獵―とは。殊の外面白きもの也。なれども心狂亂して定むることなき也。心不定則氣滅じて長生不叶もの也。○發狂とは。人心の散亂するを云ふ也。大事の貨と云ふものは。人の行跡を妨ぐるもの也。如何となれば人その寶を得んと欲すれども。大事の貨なれば中々難得こと也。そこでは不得已人體に似合はぬことをなして。行跡崩るゝもの也。そこで他人皆指をさし。或はつまはじきせられて笑はるゝもの也。此五つのものは。皆外形の欲に屬したるもの也。其物欲に従つて居るときは。心くらく成つて萬事に應ずることはならざる也。物欲腹心立つときは。萬事道理を分明に照し應ずることは不成もの也。氣もそこで散亂する也。○是以―とは。腹目の字内外とよむはあしき也。腹目とよんで可也。何如となれば。腹は谷神の宿り處也。目は六根の内重きもの也。耳に聞いて心に感ずるも。口鼻で感ずるとふたつはないもの也。なれば六の内てその重きをあげて。他を該ぬるは文法

也。目は精神の集まる處にして。心に感ずることの深きもの也。六根皆あぐるときは。文章やかましく成る也。論韻があはぬ也。此は句を減じて章を成すと云ふもの也。只内外と見ては。作者の意を付けて下した文字のせんが不立也。註に内外のことと斗り云つては荒き也。言をよそへてみねばならぬ處也。なれば聖人は耳目に屬する欲心を拂去り。腹に舍して有る谷神を養はるゝこと也。そこで長生する也。○外耳目とは。欲の爲には心を不動。内谷神を殺さぬやうに養はるゝ也。○彼とは。上の者也。即外欲也。○此とは。内腹に舍る谷神也。

寵辱章第十三

寵辱若驚。貴大患若身。何謂寵辱。辱爲下。得之若驚。失之若驚。何謂貴大患若身。吾所以有大患者。爲吾有身。及吾無身。吾有何患。故貴以身爲天下。則可寄於天下。愛以身爲天下。乃可以託於天下。

○寵辱とは。富貴貧賤得失の地也。驚は。心の動くこと也。若とは。きはめた字也。言は人寵辱の爲に。大に悲喜の心を動す也。寵辱は外物にして。外より來るもの也。心は内にして。我に有るもの也。なれば外物の爲に内物を動すことは。始めからなきはず也、ぢやにどうして心を驚動するぞと也。なれば悲喜して動すと云ふは。大な患と云ふもの也。然るを人やもすれば悲喜して動すは。大患を自ら貴

ぶと云ふもの也。それは如何した事ぞと云へば。其筈がある。此身と云ふもの有るが故也。此身は血肉身。即六根の欲具つて有る也。此血肉の身を忘れたときは。寵辱に心を動すことはなき也。其只身有るゆゑに大患を貴ぶなれば。富貴なれば身の自由達し。貧賤なれば自由不達。故に此六根の欲に離れたときは。大患を貴ふことはなき也。其時長生に叶ふ也。○何謂とは。本心は内にして重し。寵辱は外物にして輕き物なれば。外物などは云ふに足ることではないぞと也。○辱爲下とは。寵の字を込めて云ふ也。下と云へば貴ばぬこと也。如此則長生に叶ふ也。○得之。得は寵の場寵の地に驚くは喜也。○失之は。辱の地也。辱の地にて心驚くは悲也。世俗は皆是也。故に短命する也。○何謂とは。問の詞也。○吾所以とは。答の詞也。○大患とは。悲喜は生を害す。故に大患と云ふ。及吾無身とは。釋氏の真空實有。莊子が吾喪我。老子嬰兒樸の體也。身には六根の欲有り。その六欲を去れば。即無身と云ふもの也。上に無私と同じこと也。如此則喜んで不動。患はなき筈也。其時長生する也。○故貴以身とは。眞如佛性即谷神也。此谷神を貴ぶこと。天下の富よりも貴ぶときは。天下を我居處として居るによいなり。心がのんびりとする也。即莊子廣博之野に遊ぶと同じこと也。天を戸はかりとし慈にする心也。若本心を失ひ富を貪る心有らば。天下に身のおき處なきほどくるしきもの也。その身をわすれて。その身をたつとぶときは。行くとして善地ならぬと云ふことなし。又其身を貴んで。其身を忘れたときは。行くとして障礙なきと云ふことなき也。故長生故短命とす。愛天下貴天下者即寵辱若驚也。

視之不見章第十四

視^レ之^レ不^レ見^エ。名^ケ曰^フ夷^ト。聽^ケ之^レ不^レ聞^ス。名^ケ曰^フ希^ト。搏^フ之^レ不^レ得^ス。名^ケ曰^フ微^ト。此^ノ三^者。不^レ可^ク致^ス詰^ル。故^ニ混^ジ而^レ爲^ル一^ト。其^上不^レ皦^ナ。其^下不^レ昧^{カラ}。繩^繩兮^ト。不^レ可^ク名^ク。復^ニ歸^ス於^レ無^キ物^ト。是^謂無^キ狀^ノ之^レ狀^ト。無^キ象^ノ之^レ象^ト。是^謂惚^ト恍^ト。迎^ヘ之^レ不^レ見^ス其^ノ首^ト。隨^フ之^レ不^レ見^ス其^ノ後^ト。執^ニ古^ノ之^レ道^ヲ。以^テ御^ス。今^之有^ラ。能^ク知^ル。古^始。是^謂道^ノ紀^ト。

○視之不見一とは。此章は人の修養の方には不抱。谷神本然の上で云。故に高妙に説く也。修養の方なれば。高上には不説也。林氏往々に養生の章も。禪家の悟りの様に註するは。見短き處也。釋氏も高明と説く也。なれば谷神を唯直に説出して贊美して説く也。道は谷神の字也。其道と云ふのは。釋氏の本來の面目空と云ふもの也。道は本來無狀無象なもの。一切の色相を離れたゆゑに。視れども取留めて不見もの也。其みえぬ處から名を分ちて云ふときは。夷と云ふ也。夷は。平等一まいなこと也。希と云ふは。聲有りそうで。どうやらほのかに聲が有るやうな故。耳を傾けて聞けども聞えぬ也。そこから名付けて云ふときは。希と云ふ也。希の字をよくみるべし。スツキと聲がないとは云はれぬ也。ほのかに有るやうなと也。此が文章と云ふもの也。何やら微塵にして有るやうなゆゑ。これを手に取つて見れども。中

々不取也。そのとられぬ處から名付けて微と云ふ也。此もスツキと無とは不云也。此形容の文法也。道は跡が無い處を云ふ也。道が三に別れたものでは無き也。道家の虚と云ふ處也。なれば此一では。見るにも不見。耳にも不聞。手にも取られぬものなり。然るときは詰ることを致すべきものではなき也。詰るとは。いかんいかんと問ふこと也。不可致詰と云へば。いかんいかんと問ひつめて。問おすことはならざるものぢやと也。希と云へども。きくに聞えぬゆゑ也。道と云ふものは。混然として一體なもの也。多端に渡るものではない也。此を老子朴と云ふ。或は大朴と云ふ也。莊子は内七篇めに混沌帝と云ふ也。混と云ふは道を指して云。三のものを云ふではない也。三者は三者で立つて居る也。道はあきらかなるものかと思つて。上で求むれども。あきらかにして有るものでもなき也。味くして下に有るかと思つて。伏して下に求むれども。味くして有るものでもなき也。なれば道と云ふものは。明暗を離れたもの也。明暗は又色相也。金剛經曰。若以色見我。以音聲求我。是人行邪道不能見如來と云へり。又釋氏も不垢不淨ととくなり。心經に不垢不淨と眞如法性をとけり。なれば道は淨穢を離れたものなり。此釋氏の空寂。道家の虚靜也。道は繩々として。なはで引きめぐらした如く。かしこにも四維上下に彌淪して有り。然れども白とも黒とも名けて云ふべきやうなきもの也。上の三つの視不視一と云是也。畢竟本來無物に復歸する。道と云ふものは無物なもの也。手にこそとらぬ。目にこそ見えぬ。至靈至奇にして取留められぬ象が一つ有る也。是を無狀の一と云ふ也。譬へば風の如き是也。狀は。もやうのこと也。もやうなきやうにして又有るもの也。畢竟無とは云はぬ也。至つて靈妙にして狀象有ると也。是を

谷神と云ふなり。惚恍とは。おぼろ／＼として有りとも無いとも云はれぬこと也。有かと思へば。取りとめて見るべき象なく。無かと思へば。四時の行はるる。惚恍は。谷神を形容したもの也。おぼめくことなり。○迎之一とは。道は終もなく始もなくと云ことを説く也。迎は。来るに付いた詞也。隨は。去るに付いた詞也。其谷神来るかと思つて迎へて見れども。其始見えぬ也。又去るかと思つて見れども。其迹もみえぬなり。道の始終無きを云也。○古道一とは。虚無也。古とはほめた詞也。古の虚無自然の道を以て。今日萬有を御治したらば。所謂古始と云ふものを知り得ることぞと也。古と云ふは。何ほど遠いやら知れぬこと也。始と云ふは。老子は始は萬物の母と云ひ。莊子は始と云もの有りと云ふ始なり。然と云ふは。古始と云ふは谷神の本體也。林氏は只古とばかり見たる也。生の字を死字に仕うた也。是之道化と云ふ。○紀とは。道の肝要大綱のこと也。此を道の大／＼り肝要と云ふ也。此章は本然谷神の上で云ふ也。末に至つて人の上に掛けたなり。三のものを一丸して道と見たるは非也。

古之善爲士章第十五

古之善爲士者。微妙玄通。深不可識。夫惟不可識。故強爲之容。豫兮。若冬涉川。猶兮。若畏四隣。儼兮。若客。渙兮。若冰將釋。敦兮。其若樸。曠兮。其若谷。渾兮。其若濁。

孰能濁。以靜之。徐清。孰能安。以久之。徐生。保此道者。不欲盈。夫惟不盈。是以能敝而不新。成。

○古之一とは。此章は道家修養之道に掛るなり。肝要の章なれば。老子も一入念を入れて解かれたり。林氏は禪家の悟の如く注す。大に非也。修養の道と心得べし。古と云ふは。善人を稱するの詞也。今は何程善人にてても證としがたし。なれば古の善士と云ふほどの者。徳は微妙玄通。深うして中々凡俗の眼にて計知ることならぬと也。○通は。通達の明なこと。深は。計不知處より云ふなり。不可識三字。註に古之士の無心なこととしてみたは。大に非也。凡俗の目で不知こと也。○夫唯一とは。上で云ふ通にして不可識と云へども。其儘にして置くも残念也。故に雖不可識。強て爲之。其難識徳を形容すればと云ふ心也。○豫兮一とは。此より以下若濁と云七句を以て。古の士の徳を容る也。二句一聯づゝにして可見。其時七句なれば。一句餘るなり。其餘渾兮其若濁と云ふ一句を以て。上の六句を結んだものと可也。如此段略見安き也。先字義を云は。猶豫の字を分けて書く也。疑の貌也。豫は。狐の冬川をわたる貌也。狐は冬こほりの上をわたるとき。耳をかたむけて水音を聞て。ちかくきこえる處はわたらず。水音遠き處を渡るもの也。水音近き處は水の重ねうすき也。遠き處は重ね厚きこと也。氷厚きときは踏ぬく愁なき也。故に世に氷を渡らば狐の足跡を見て渡れと云ふ也。なれば狐の冬川渡るとき。ふみ出したりふみ入れたりして見る貌をみれば。殊の外恐れ氣づかひする體也。又猶と云ふは。子犬のこと

也。犬と云ふものは。人の行先へ立つて行くもの也。人足をとむれば。犬も先に留つて。後をふりかへり見て。其人の來るをうかゞひ待つもの也。なれば其人が來るや〜と疑ふ貌あらはるゝ也。其人不來。則後へもどる者也。なればうらおもひする處有り。うらおもひするは。恐れきづかうて居る也。○畏四鄰と云は。譬へば高くうたはんと欲すれども。隣家に客人などあれば。恐れ謹んで高歌せぬことなり。是恐謹む體也。なれば言ふは古の士の徳を謹む貌を云はゞ。猶豫とうらおもひして。狐の氷川を渡る如く。人の四隣を畏れ氣づかふ如く。大事に徳を謹む也。此畏れきづかふ内に。柔弱を守り。毅強を避け。不爭の徳がある也。此道家修養の第一也。補氏謂はく。儒者戒慎恐懼かたたらば如此歟。主意は異也。猶豫とうらおもひすると云ふ和訓。尤なる和訓也。扱古の士の有心を云ふ處也。然るを林氏無心と云ふは非也。此有心は。凡俗の有心にてはなき也。○儼若客一とは。此一聯は。道家氣を遍散せざる貌也。賓客の束帶したる處は。儼とおごそか也。丁度如其道家の氣をたもつてもらさぬやうにする處は。束帶の賓客の如くにして。外より見れば窮屈なやうに見ゆる也。然れども窮屈にしては。氣を養ふことは成りがたし。其窮屈な内に。和する所が有る也。其和する處が。渙と氷の解けんと欲する如く也。窮屈な内に和する處は。譬へば早朝に霜を掃つてみれば。氷のさびしく張つてあるもの也。時に朝日のそろ〜と出る時。氷少しとけるもの也。其のごとくちやと也。なれば古の士の徳有りて。氣を有つて放散せぬやうにする處は。客の如く。其内に和なる處は。氷の釋くる如くちやと也。此二句一聯也。○敦兮一とは。樸と云ふは。山より今伐出したるあら木の皮付て。斧目の無き其儘の木也。樸と云ふものは。上から見た處は文章なけれども。内に性を全く具へてある也。なれば混敦としてまろらかにして。外よりみて文章のあやかざりは無けれども。内に萬全を含んで居ることは樸ちやと也。樸は老子の骨髓也。大樸と云ひ。或は無名の樸と云ふ也。莊子は内篇七の部に。混敦帝と解くも是也。谷神の本體也。○曠兮其若谷一とは。前の三十幅章の意也。心を空曠にするには。知と欲とを去らねば不成也。六根の知欲を去つたときは。心空曠として若谷なる也。そこで谷神が腹に實する也。谷神腹に實ちたるときは。即樸の體と云ふもの也。胸腹に谷神主たるときは。六根邪欲魔内へ入ること不成。總じて人のなきあばらやには。魔が住居するもの也。此も二句一聯也。曠兮如谷なる處で。敦として若樸也。詩に下の句解上句の法と云ふも。此等の類歟。○渾兮一とは。此一句は。上の六句に一聯の結語也。○渾兮一とは。即和光同塵の容也。凡俗の濁るは違ふこと也。雖濁と不濁所あり。此以上は。古の士の心を用ひて徳を謹む處を形容したるもの也。○孰能一とは。此二句は工夫と效驗とを云ふ也。濁以靜に安以久と云ふは。工夫。徐清徐生と云ふは。效也。濁つて以て靜なる處で徐に清み。安んじて久しき處で生きたもの也。言ふは人心の濁と云ふは。知欲のわざ也。其知欲をほしきまゝにする處で。心の清むことはなき也。譬へば泥水をかきたてゝ動かすときは。濁つて其水清むことなき也。其水を不動靜にするときは。水すむもの也。丁度其如く。心を濁す處の六根の知欲を不肆也。不動靜にしづめておくときは。漸々に清んで。本心の田地へ歸る也。徐は。俗にせん〜の心也。心の安定不成と云ふは。六根の欲に心が馳する故也。心六欲に馳するときは。心いきてはたらくこと不成也。生活と云つては。生きてはたらくこと也。六欲に馳する

ら見た處は文章なけれども。内に性を全く具へてある也。なれば混敦としてまろらかにして。外よりみて文章のあやかざりは無けれども。内に萬全を含んで居ることは樸ちやと也。樸は老子の骨髓也。大樸と云ひ。或は無名の樸と云ふ也。莊子は内篇七の部に。混敦帝と解くも是也。谷神の本體也。○曠兮其若谷一とは。前の三十幅章の意也。心を空曠にするには。知と欲とを去らねば不成也。六根の知欲を去つたときは。心空曠として若谷なる也。そこで谷神が腹に實する也。谷神腹に實ちたるときは。即樸の體と云ふもの也。胸腹に谷神主たるときは。六根邪欲魔内へ入ること不成。總じて人のなきあばらやには。魔が住居するもの也。此も二句一聯也。曠兮如谷なる處で。敦として若樸也。詩に下の句解上句の法と云ふも。此等の類歟。○渾兮一とは。此一句は。上の六句に一聯の結語也。○渾兮一とは。即和光同塵の容也。凡俗の濁るは違ふこと也。雖濁と不濁所あり。此以上は。古の士の心を用ひて徳を謹む處を形容したるもの也。○孰能一とは。此二句は工夫と效驗とを云ふ也。濁以靜に安以久と云ふは。工夫。徐清徐生と云ふは。效也。濁つて以て靜なる處で徐に清み。安んじて久しき處で生きたもの也。言ふは人心の濁と云ふは。知欲のわざ也。其知欲をほしきまゝにする處で。心の清むことはなき也。譬へば泥水をかきたてゝ動かすときは。濁つて其水清むことなき也。其水を不動靜にするときは。水すむもの也。丁度其如く。心を濁す處の六根の知欲を不肆也。不動靜にしづめておくときは。漸々に清んで。本心の田地へ歸る也。徐は。俗にせん〜の心也。心の安定不成と云ふは。六根の欲に心が馳する故也。心六欲に馳するときは。心いきてはたらくこと不成也。生活と云つては。生きてはたらくこと也。六欲に馳する

處をひきしめるときは。其心安定になる也。其安定なること久しき時は。心徐くに生活する也。此生はうごくときよんで。徳心のいきてはたらくこと也。外物にうごくことでは無き也。孰能の字を以てみるときは。老子願ひの詞也。誰かよく濁つて以て静にしてすまぬものあらう、若有るならば。其人にくみせんの心也。○孰能安一と云ふ句も然り。○保此道一とは。道とは處によつて可見。此道は濁以一安以一動かぬ所の道を保つものは。盈つることをきらふ也。なれば虚を欲する也。虚にして無心なるときは、能く敵古にして不改新也。不新とは改易のなきことなり。敵して不新一云は。依々として若舊云心也。莊子に。神人は千歳へて綽々として如處女と云ふ類也。近くは日月で以て可見。無心にして照す故。千歳以前の日月も。今日の日月も。かはることはなき也。天地無心にして。萬物を生ずる故。天地老病衰と云ふはなき也。知欲を去つて如此なるときは。古くして不改易。長生すること也。如此則道家の道は成就したと云ふものぢやと也。○成とは。一字一句の法と云ふ是なり。

致虚極章第十六

致^{スコト}虚^マ極^{トキハ}。守^レ静^ヲ篤^シ。萬物並^ビ作^ツ。吾^レ以^テ觀^ル其^レ復^ヲ。夫^レ物芸^芸云^々。各^レ歸^ル其^レ根^ニ。歸^レ根^ニ曰^ク静^ト。静^ヲ曰^ク復^命。復^命曰^ク常^ト。知^レ常^ヲ曰^ク明^ト。不^レ知^レ常^ヲ妄^ニ作^シ凶^シ。知^レ常^ヲ容^ル。容^ル乃^チ公^{ナリ}。公^ハ乃^チ王^{ナリ}。王^ハ乃^チ天^{ナリ}。

天^ハ乃^チ道^{ナリ}。道^ハ乃^チ久^シ。没^レ身^ヲ不^レ殆^{カラ}。

○致虚一とは。六根の欲を去り知を離れたるときは。虚の至極に至る也。なれば不見可欲。心をして亂れざらしむるときは。静を守ることの篤き也。静は心の本然也。○篤とは。丈夫なこと也。なれば心の本然の静たる處。如何やうな名利の魔が來るとも。動くことなきなり。夫が上手な處也。○萬物一とは。作るとは生ずること也。詩にも微作と云ふ。易などにも出だたり。森羅萬象の生發すること也。此れは動くとき也。動者必静へかへらぬと云ふことはなき也。復を易の復の卦杯にして見るは非也。静に歸ることなり。天地の上で云ふときは。春夏は萬物を發生して動のとき也。秋冬は萬物を收藏する處也。静と云ふもの也。なれば生ずるもの必ず滅する道理にして。本の静へ歸らぬと云ふことはなき也。人の上で云へば。喜怒哀樂の色々のことが作る也。天地の萬物を生ずる如く也。則動のとき也。其喜怒哀樂が静ならぬと云ふことはなき也。是静に歸る處也。天地の萬物を收藏する處也。なれば動くこと極れば。本の静に歸る也。其を觀其復と云ふ也。○夫物とは。天地の萬物は芸々と多く並生すれども。一度は各其根本の静へかへらぬと云ふことはなきなり。人の喜怒哀樂は紛々として生ずれども。一度は各其根本の静へ歸らぬと云ふことはなき也。其静なる處が。即本根の静に歸ると云ふもの也。物生じて根本へ歸る處が。静と云ふ也。其静を指して復命と云ふ也。○命とは。道の本然の命也。なれば動く事極つて静と成りたるを。本然の命に復つたと云ふ也。南氏謂ふ。静と命と解き分ちがたし。静と云へば。動に對する

心あり。本然の命と云へば。對する處なき歟。なれば道家で靜を大事に説く也。周子圖説を作つて無極と云ふ。道家の無極に本きて作りたる也。即無極は虚の事也。又通書と云ふを作つて。主靜を主とする也。すなはち道家の靜に本きたる也。明道も冲莫無朕のことを述べたり。即虚也。聖門に於て靜を主として説くこと。絶えてなきこと也。易大學其外經書になき事也。只禮記に出でたり。人生の靜なるは。天の性也。感物而動性之欲也と云へり。禮記は漢儒の附託にして。多くは道家の説を用ひたもの也。漢儒専ら道家の學に眩つたもの也。禮記の人生の靜と云ふは。此處に本けり。乃朱子の詩の序に。禮記を引用ひたり。聖人の主意でなき也。宋以來今日迄。六百年程也。今以て宋以來の學すぢをついで來れる故。朱子學を評すれば。今の人うけがぬ也。朱子に至つて専ら靜を説く也。釋氏の空寂は。道家の虚靜也。然も落着は異也。朱子専ら釋氏に近き靜を説いて。釋氏道家をしかるは。理にもとると云ふもの也。扱其復命とは。常道と云ふ也。常道と云ふものは。古今不易なるよりして云ふ也。其不易の常道を知るときは。長生する也。其不易の常道を知り得たものを。道に眼が明いた人と云ふ也。故に知常曰明也。其常道を不知者は。道に眼が不明故。妄作と云つて。妄なことをさま／＼して。或は名利色に溺るゝ也。そこで禍を取つて命を捨つる也。此れ殊の外凶事のいまはしきこと也。名利色の類に心を馳せて事をなすを。妄作して凶と云ふ也。常道を知るものは。無我にして量が廣いゆる。能く物を受入るゝ也。物能く受容るゝときは。心が平等一枚に公けなるときは。即王也。王と云ふは。心の位で云ふなり。爵位の上では不云也。譬へば身は匹夫にても。物を平等一枚に見て。心公けなれば。心萬物の上に立つて獨り貴き也。然るときは身は賤しくとも。心は王と云ふもの也。心が正しければ。即直に天也。天なれば。即とりもなほさず道なり。なれば常道にして常に久しき也。そこで長生を全く遂得るもの也。如此則一生身を終るまで。あやふき事はなき也と云ふ心で。沒身不殆なりと云ふ也。

太上章第十七

太上^{ニハ}下^ル知^ル有^ル之^レ。其次^ハ親^ク之^ヲ譽^ム之^ヲ。其次^ハ畏^ル之^ヲ。其次^ハ侮^ル之^ヲ。故^ニ信^ズ不^レ足^ラ焉^ナ有^レ不^レ信^セ。猶^シ兮^{トシテ}其^レ貴^ク言^フ。功^ヲ成^リ事^ヲ遂^フ。百^ク姓^ヲ皆^ク曰^ク我^レ自^ラ然^ラ。

○太上とは。此段今世の不^レ及^ル古歟じて作れり。太上は大昔也。下の字誤。不の字也。古註に隨ふべき事也。○不知有^レ之^ト。萬事に心を付けぬ事也。太上と云ふも。萬人無知無欲にして。正直のみにして。何にても有ると云ふ事を知らぬ也。忠孝をよくなし。其のよくなすと云ふに。己をわすれてあとがなき也。太上の人は。惟口にも不言。心も付けずして。天然と道に叶ふ事を云ふ也。今の學者の。口と心と言と行とがちがふを。譏つたもの也。又中上のときにて。身方を親み他を疎んじるやうに成つたぞ。太上は親疎有る事を不知也。末上には畏るゝと云ふ事出でたり。民邪知邪欲の心起つて。屋燒人殺出來る故。公儀より法度刑法を立て。火あぶりなどの類を仰出さる。故に民大に恐るゝ也。又上よりの法度を畏るゝまではよき也。小の上に至つては。上を侮りなふるやうな心に成る也。或は刑罪の場にて。奉

行の紙入を盗む類。上を恐れずあななどと云ふもの也。今は三日法度ちやと云ふ類も然り。此世の段々衰へたる證也。今日皆然り。かうした衰世なれば。上の信不足。故下民上を信仰せぬ也。君は身。民は影の如きもの也。上に信なくして下に令するは。朽木に釘を打つやうなもの也。萬本打ちたりともきかぬ也。然るに今の役人。猶安然として。曲げて號令教詔を貴んで法度を下すと云ふは。愚な事也。猶として貴言と云ふもの也。古は不令ども善く行はれ。不禁ども惡は止んだ也。況令所於は生板に釘打つ如く。一本でも利く也。○功成。此より老子古を上んで今を歎いたもの也。上古には上下ともに無心にして和せし故。織衣耕食なれば。功成事遂ぐると云ふもの也。今日衣食天地の恩なる事を知らざるがごときなり。

大道廢章第十八

大道廢^レ有^ニ仁義^一。智慧出^テ有^ニ大偽^一。六親不^レ和^セ有^ニ孝慈^一。國家昏亂^レ有^ニ忠臣^一。

○大道一とは。即上の段の不知有之と云ふが大道也。大道全存則仁義の沙汰はなき也。仁義は大道の中に含んで有る事也。大道廢れた處で。末學の手に入つて。仁義の沙汰出た也。大道の行はるゝときは。仁義の道は有れども。名目は無き也。仁の仁たる處。義の義たる處を不知が。大道と云ふもの也。後世末學の手に入つて。仁義の名出で。沙汰專に成つた也。仁義の沙汰出で。學問に穿鑿が出来た處、人が

しこき智慧が出た也。智出て大偽と云ふもの有る也。種々様々の智を出して争ふ故。大偽の事有る也。智には欲が付きてまはる也。欲有る時は。必大偽行るゝ事也。父母妻子兄弟の六親不和に成つて。孝慈と云ふもの出た也。古は萬人は萬人まで。不慈の親不孝の子と云ふものはなき事也。天下全く孝慈で有つた也。故に目立たぬ故。人々あの人は孝あり。此人は慈有る人と云ふ事を不知也。後世は千人が千人まで。不孝の子不慈の親也。故に千人の一人。孝子か又は慈の親有るときは。其處其孝行人ちやと。始めて孝慈の名があらはれたもの也。此後世天下の六親不和にして。孝慈と云ふ名目出たと云ふもの也。國家も上古は太平なゆゑに。忠臣と云ふ事はなき也。一人として國家を亂す様な。不忠の臣と云ふはなくて。皆大切に君を貴ぶゆゑ。皆忠臣なれば。目當てゝ氣が付かぬ也。國家皆亂れたゆゑ。忠臣と云ふもの出でたり。國家こぞつて昏亂するに。我一人忠有る處が有れば。忠臣と云はれたもの也。なれば忠と云ふも。混亂が本と成つて起つたもの也。皆世の衰へたる證也。譬に白鷺烏の辨別有り。此章段々一通に説下してよし。

絶聖棄智章第十九

絶^レ聖^ヲ棄^レ智^ヲ。民利百倍。絶^レ仁^ヲ棄^レ義^ヲ。民復^ニ孝慈^一。絶^レ巧^ヲ棄^レ利^ヲ。盜賊無有。此三者。以爲^レ文^ニ不足^一。故令^レ有^レ所^レ屬^ス。見^レ素^ヲ抱^レ樸^ヲ。少^レ私寡^レ欲^一。

○絶聖とは。聖は眞の聖ではなき也。聖智の聖。かしこき邪智の事也。上人君たるもの。聖智を絶棄して。不見不欲使民爭事なき也。此民の利百倍なる處也。争ふときは必害有り。又使民盜をなさしむるやうなつひえ出づるなり。上一人を下萬民學ぶもの也。末の穿さくに陥つた仁義を棄てたときは。民皆眞の慈孝に歸る也。孝の孝たるを忘れ。慈の慈たるを忘れたときは。眞の孝慈と云ふもの也。巧のおそろしき事を捨て。利欲を絶つたときは。盜賊なくなる也。無智無欲なれば。民をして盜をなさしむる事無き也。三十幅の章に出でたり。此聖智仁義巧利の三つのものは。以て文にして外のかざりて。内徳を損害するもの也。此等は中々民を治むるに足る事ではない也。○見素とは。素はかざりなき白木也。心無欲にして不動處よりして云ふ也。一切外物のために不動心。色を見ても不動。聞聲のためにも不動。五味のためにも口を不亂。一切外物のために不動處が。見素と云ふもの也。素を見る處。即樸を抱くと云ふもの也。樸は山の新木にして。元氣のあつきもの也。谷神の徳全く具つて。渾然とまろらかな處に。萬善を含んで居る也。素を見るときは。谷神渾然たる也。なれば此三者は外文にして。天下を治むるに足らず。民をあつめて。只民に素を見せ。樸にして私欲を少なくするときは。天下泰平也。見素抱樸と云ふ處。道家の秘密藏也。重く可見。齋の修養に掛る事也。林氏治天下事にしてのみ説くは不可なり。

絶學無憂章第二十

絶^レ學^ヲ無^シ憂^ヘ。唯^ト之^レ與^レ阿[。]相^ム去^ル幾^ク何^ゾ。善^ト與^レ惡[。]相^ム去^ル何^ク若^ク人^ノ之^レ所^レ畏^ル。不^レ可^ク不^レ畏^ル。荒^ク兮[。]其^レ未^ク央^カ哉[。]衆^人熙^レ熙[。]如^ク享^ク大^ノ牢[。]如^ク春^ノ登^ル臺^ニ。我^レ獨^リ泊^ク兮[。]其^レ未^ク兆^セ。若^ク嬰^ル兒^ノ之^レ未^ク孩^セ。乘^レ乘^ク兮[。]若^ク無^シ所^レ歸^ス。衆^人皆^レ有^リ餘[。]我^レ獨^リ若^ク遺[。]我^レ愚^人之^レ心^ナ也^哉。沌^沌兮[。]俗^人昭^々。我^レ獨^リ若^ク昏[。]俗^人察^々。我^レ獨^リ悶^悶。澹^兮兮[。]其^レ若^ク海[。]颺^兮兮[。]似^ク無^シ所^レ止[。]衆^人皆^レ有^リ以^テ。我^レ獨^リ頑[。]且^レ鄙[。]我^レ獨^リ異^ニ於^リ人^ニ。而^レ貴^ク求^ム。食^ニ於^リ母^ノ。

○此章。専ら長生不死の事にして。齋の受養を解く也。此學と云ふは。古學をいはず。今學を云ふ也。老子今の學問を嫌ふ也。學問程心を累するものはなき也。學問すると。我之相違しくなりて。己を是とし人を非として争ひ。吟味穿さくするときは。心を勞す。心が勞すれば。氣が耗散する也。其時は長生不叶也。道家は。氣を惜んで齋の修養を尊ぶ也。今學を絶つときは。争ふ事はなき也。然れば心を勞する事もなく。累す事もなき故。無憂と云ふ也。釋氏も絶學の事は解く也。達磨も文字不立と云ふ是也。此早や長生を解く也。○唯之とは。此は學者の吟味せんさく。毫厘の處争ふ事を云ふ也。唯とは。對ぶる事也。阿も亦然り。唯は。人の呼ぶとき。すみやかにして。うやくしくはやき事なり。此を學者は

取つたもの也。阿とは。答へる事おそくして。うやくしからずおこたりたる答へ也。此を學者は吟味して。大にしかる事也。然れども唯も阿も。速遅のたがひなどあれ。何れも答へる事なれば。同じ事なり。それを吟味せんさくして。唯を取り阿を嫌ふと云ふは。争の大なる事也。唯阿どれも答なれば。其間相去る事いくばくもなき事也。毫末のソツとした處を争うて。氣を使ふ事也。故に長生は叶はぬ也。善惡と是れ多くの違はなき也。今の學者。善以てとり惡を捨てしかる也。是れ何れも相にかはりて争ふと云ふもの也。今日の學者の弄ぶ善惡は。相去る事如何。左程もなき事。其れを争ふ故。長生する事は不成也。上と同じ事也。○人之―とは。今我如此云つた程にとて。然れば善惡もなきと云つて。大事なきの見に落ちて。公儀の法度などを背いて惡をばするなとなり。指定めて人の可恐事は。畏れいで不叶事也。法度杯を犯すときは。此の可畏法度を荒亂して。身に禍をとる事決せり。有るまじき事也。故に荒として未央哉と云ふ也。放逸むざんな事をいませめたもの也。○衆人―とは。釋氏の衆生と同じ事也。衆生の凡夫は。名利色の諸欲を樂む事は。丁度大牢のけつこうな料理を受くるやうに。うれしがる也。又春の臺に上つて。うちかすみたる春色をよろこぶごとく。物欲をうれしがる也。大牢は。日本の鶴の料理に當る也。三牢と云ふは。牛羊豕也。牛を大牢と云ひ。羊を中。豕を小と云ふ也。大牢は天子。中とは三公九卿。小とは太夫より以下用ふる物也。○春登臺とは。諸欲をたのしんで。心よいと事也。○我獨―とは。我は老子也。衆生は諸欲をうれしがる。我獨り心が水の如く。泊とあはしくして。ヅンと無心也。三欲の類。毛頭さざし起らぬ也。其さざし起らぬ處を。たとへて云はゞ。嬰兒の如く也。

嬰兒とは。みどり子の事を訓じて云ふ。草木の若みどりのやうなもの也。生れて其儘の赤子の事也。孩と云ふは。三四歳のときなり。此は少し知が出た故。父母の愛を知つて笑ふ也。未孩と云ふは。一向無心な事也。なれば嬰兒の只乗々としてうごめいて。何方へも心を歸する事無いやうちやと也。父母をも見知つて。歸するやうな事はなき也。無心の至極也。○衆人―とは。有餘とは知の上で説きたり。上に絶學と云ひ。又下に愚と云ふを以て可見。衆生は口になど云はね。心には智慧じまんで。鼻のさきへ知があらはれて有餘也。そこで少しの善惡のちがひを争つて。心を勞する事也。我獨其智を忘れて。此愚人のやうな處が。眞知也。此遣れたる處が。實に愚人であらうや。愚人ではない。此が眞知ちやと也。○沌沌とは。水のどみたる事也。水のどみたる如くにして。一向無知のやうなれば。此が即眞知也。○沌々とは。即無欲の事也。無欲無心の貌也。○俗人昭々―とは。小形の貌也。俗人智慧自滿で有餘する處は。昭々として星螢鉾の如くきら／＼とする。我獨りやみの夜のくらさが如き也。和光同塵なり。○俗人察々―とは。萬に心を付け氣を配りて。目から耳へぬけるが如き也。そこで禍は出る也。昭々察々の政は必破るゝ也。如此氣を配り心を使ふ故に。長生は不叶也。我獨悶々。愚人のやう也。そこで禍を取る事なき也。○澹とは。一切無欲無心故。心が廣大にして大海の如き也。少も氣のせまい事はなき也。○颯とは。風の吹く也。我無心なる事は。虚舟の風吹いて。どこの島何方の岸へ著かんとする體もなき如くちやと也。ヅンと無心な事を云ふ也。如此無心故。心氣使ふ事もなくして長生する也。○止とは。舟の島へ止宿する事也。我は虚舟の如くなれば。何方へ着くと云ふ心もなき也。知欲ほど心氣を使ふものは

なき也。泊澹颯は。皆同じ事也。乗々沌沌闕々。皆同じ事也。未兆。未孩。若海。無歸。無所止。皆同じ事也。昭々。察々皆同じ事也。此書韻を押して作つたもの故。歌の體が有る也。故にくりかへしく同じ事を云ふ也。日本の本組歌の類也。此章も糸竹にかけ歌へば。うたはるゝ也。○衆人皆有以とは。有爲也。我獨頑愚にして無爲ぢやと也。頑は。頑石と云つて石の如く。鄙は。田夫野人の如く。朴の體有る事也。此谷神渾沌として一點のさすなく。萬善全く具りたる處也。頑鄙は凡夫の頑鄙とはちがふ也。老子は和光同塵のすがた也。○我獨一とは。上の句どもを結んだ也。衆人は上で云ふ如くの有さま也。我獨り上で云ふ通りなれば。これが衆人に異なる處なり。○貴求一とは。其衆人に異なるは何の爲なれば。谷神を養ふ事を求むる事を貴んだもの也。母は。谷神也。首に出てたり。食は。養也。老子の愚となる處は。谷神を養つて長生する道具也。衆人の昭々は。谷神を退治する斧と云ふものなり。

孔德之容章第二十一

孔德之容。唯道是從。道之爲物。唯恍。唯惚。惚兮恍。恍兮惚。其中有物。窈兮冥兮。其中有精。其精甚眞。其中有信。自古及今。其名不去。以閱衆甫。吾何知衆甫之然哉。以此。

○此章は。五千言之内でも至つて重く。老子眞意の有る處也。此章の眼は。精の字也。精は。谷神の精隨也。谷神とは。精中の神と云ふ心也。谷神は名字。精は谷神の本來の面目也。精は米の至つて上のしらげ也。斛を斗に作り。斗を升に作つた所が。精と云ふものなり。此精は。萬善萬美を具へて。即衆妙の門也。長生するに此精を養つて長生する事也。老子數解此章のみに不限。五千言の大定擬也。谷神と精を他に不言事は。道家の秘物なれば也。故に他になき也。五十一章目精の字出でたれども。本然の上ではとかぬ也。精の字はこゝにばかり説いた也。註者忘れたり。孔德は。即盛徳の容也。谷神造化也。道に已而從ふ。其すがたは。十五章に出でたる七句が。即盛徳の容たの道にのみ從うた處也。盛徳の士は。他に從ふ事はなき也。恍惚惚恍と云つたは。只おぼろゝとして。手にも取れざる處を形容したるものなり。其おぼめいたる中に象が有りし也。象は。風の如くにして。聲色臭を離れたもの也。谷神には聲色は無きもの也。物と云つたもの。靈妙の物。即谷神を云ふ也。○有精一とは。上の句まではゑときをなして。此で開帳して見せたもの也。精と云ふ秘佛は。即眞なものぢや也。一切の物皆假物也。此精斗りは似せものでなき也。眞物也。一切外物は。皆假物にして似せもの也。精は。即谷神の本來の面目也。信は。驗也。此精は甚眞也。其中に眞と云ふたしかな證據が有る。春夏秋冬の榮落の類は。皆精のなす所なり。なれば物はなしとは云はれぬ。たしかな證據ぢやとなり。而も眞物故。時序のたがふ事はなきなり。若似せものと云ふ者有らば。某し證據に字は一入念を入れて説いた也。○自古一とは。其名は道と云ふ名と云ふに不可抱。此は前の谷神不死と云ふ事を如此書きたる也。○衆甫とは。萬善萬美也。此道

には萬善萬美全う具へてあり。故に衆妙の門と云つた也。内に萬事を具へてあり。故に種々様々の善美が出る事也。鳥の飛び魚のをどる。花の紅柳の緑り。一つとして善ならずと云ふものはなき也。其衆甫が道の内に具へ閱べて有ると云ふ事を知つたなれば。此精を以て知りたると也。

曲則全章第二十二

曲則全。枉則直。窪則盈。弊則新。少則得。多則惑。是以聖人抱一爲天下式。不自見。不自是。故彰。不自伐。故有功。不自矜。故長。夫唯不爭。故天下莫能與之爭。古之所謂曲則全者。豈虛言哉。誠全歸之。

○此章は。道家不爭の徳にして。守柔避強の事を云ふ也。惣じて物を曲げるとき。其曲れば全くして居る也。直と云ふは略文也。枉げるとき枉り。直すとき直ると云ふ事也。兩句一意也。松の枝に雪折あり。柳の枝に雪折なき也。雪を去るときは。本の全にかへる也。是不爭の徳也。○窪則とは。地の窪な處へは水たまる也。其の如く六根の欲を去つて。心虚なれば。谷神腹に盈つる也。莊子曰。藐姑射神人。數千歳を經。其年は弊れけれども。其姿は綽々然として處女の如くぢやと也。はその年は古けれども。すがたは新と云ふもの也。日月も又然り。○少則とは。道家は物の満つるを嫌ふなり。充滿すれば欠くる道理有る故也。○得と云ふは。不失事也。物少きときは。餘る事なければ失ふ程はなき也。多則失

惑となる也。其故に聖人は谷神の混然たる一を守つて。乾と抱いて離さぬ也。一は谷神の本來の面目也。故に聖人は天下の法式手本とならせらるゝ也。○不自とは。此四の自は我也。四の不自は無我也。自ら道を見たとき云ふは我也。故に我の雲に覆はれてくらき也。聖人は自ら見たと不思。無我故に其徳明なりと。自己を是とするときは。衆人免さぬ也。自ら是とせざる故。衆人に許されて。聖人と云ふ名顯る也。自己が功業有る處にほこるときは。衆人其功を不許也。自己が才知才能にほこるときは。人が立ておかぬ也。其知能にほこらぬ故に。衆人の長として衆人貴び。己は長となる也。伐は。功にはこる也。矜は。才知にほこる事也。皆不爭して身を全う有つを云ふ。○古之とは。古語を起句に引く也。誠に全而歸之とは。天より全うして受けた身を。又全うして天へかへすと云ふ也。只全うしてかへし難き也。不爭して柔を守るときは。身を全うして一生終る也。是が全うして歸すと云ふものなり。

老子經國字解卷二

希言自然章第二十三

希言自然。故飄風不終朝。驟雨不終日。孰爲此者。天地。天地尚不能久。而況於人乎。故從事於道者。道者同於道。德者同於德。失者同於失。同於道者。道亦樂得之。同於德者。德亦樂得之。信不足於信。信亦樂得之。

○此章は。人間定常之思を破却した章也。貧なればいつまでも貧なものぢやと思つて居る。一夜檢校などに成ると。餘り悦んで喜びに動じて煩ふ也。富めばいつまでも富むものと思つて。俄に官祿などを失つては。悲みに心を動じて死に及ぶもの也。此は貧富は常住でなきものと云ふ事を不知故也。知常て不知變故如此也。老子そこを戒めたまふ章也。希言自然と云ふ一句は。況於人乎と云までの張本也。言少いが自然と云ふこと也。直に見下したがよし。故に飄風之大風も。多く久しくは吹かぬ也。漸く不

終朝吹止む也。此自然と云ふもの也。朝とは。夜明けて五つ時分までの間を云ふ也。驟雨の大雨も。一日はふらぬもの也。此時雨などを以て可知也。此皆希にして不久處が自然也。如此風雨をして不多不久しむるは。何者の仕業ぢやとは。天地の仕わざぢやと也。天地さへ希れが自然の道理故。風雨を久しくすることはならぬ也。なせなれば少ないが自然なれば也。其自然には天地も背くことは不成也。況んやあさましき人間は。何として事久しく多くして居ることがならうぞや。然るに凡夫は富の場に居れば。いつ迄も久しく如此なものぢやと思ふ故に。時として變に逢うて富を失ひ貧しくなれば。悲みなげいて心を動して短命する事也。故に知道の人。常住の思を不成。遇所の界に安んじて居る事也。○故一とは。従事道とは知得道朝夕さんまいにして居る聖人を云ふ也。道に一味の人は。道德の界に安んじて同じて居る也。○失者一とは。失の字の内に得の字を兼ねて云ふ也。難所の重きを上げて輕きを略するは。老莊に多き文法也。得ると云ふは。よい方也。富貴の場に居る類也。失は。悪い不仕合の場を云ふ也。貧賤の場を云ふ也。貧賤の場に居るの類也。有道の人は。富貴を得るの場に居しては。眞得の界目に安んじて同得居る也。堯周公の類。居富貴不淫富貴行富貴類也。又貧賤失の場に居るときは。失に同じて其界目を安んじて居る也。顔子の一簞食にして不改其樂類は。素貧賤行貧賤と云ふもの也。此即失者同失者と云ふもの也。故に道德の場に居ては道德に同じて居るものは。道德の界目を安んじて樂む也。樂とは。安んじて居る事也。○得之とは。道德の場を得ること也。なれば道德の界目を得て安んじ樂む事也。得の場に居るものは。得の界目を得て安んじて居る也。失の場に同じて居る者は。失の

界目を得ることを安んじて居る也。なれば得の場を得てもきはらず又不淫。失の場を得ても不悲又不厭也。是有する處は。學者の深く信得て不叶處也。若其深く信する處に行きとゞかいては。此道を信ずることはならぬ也。深く信得して此道を信じ得て我ものに可爲ことと也。此所をかりそめの様に信じておいた分には。道の可信處を信ずることならぬとなり。

跛者不立章第二十四

跛者不立。跨者不行。自見者不明。自是者不彰。自伐者無功。自矜者不長。其在道也。曰餘食贅行。物或惡之。故有道者不處也。

○跛者—とは。此句は自然の道に従へば。事が成就し其事が行はると云ふ借喻の文也。立とは。成就すること也。○行とは。此も首尾好いことが調つて行はること也。跛者は半時も立つて居ることならぬ也。跨者は二間もありかれぬ也。此らは無理故也。○自見者—とは。前の曲則章の意を及ぼして云ひたる也。自ら道を見たとき云ふが。我の曇れば其心の月不明也。下皆同じこと也。其とは文勢を可見。自見自是自我自伐自矜者を指して云ふ也。此らの人は。道の上から見れば無用の餘りものちやと也。贅は。こぶ也。肉の餘りものなれば無用の物也。○物とは。人を指して云ふ也。○或とは。彼餘食贅行は長物なれども。尤惡み嫌ふ人もあらんけれども。若自然惡みさらふものあらんと云ふこと也。是は氣味惡く

真綿で首をしめる文法也。或の字真綿で首也。必と云ふ處なれども。わざと氣味惡く或と云ふは妙也。

有物混成章第二十五

有物混成。先天地生。寂兮寥兮。獨立而不改。周行而不殆。可以爲天下母。吾不知其名。字之曰道。強爲之名曰大。大曰逝。逝曰遠。遠曰反。故道大。天大。地大。王亦大。域中有四大。而王處一焉。人法地。地法天。天法道。道法自然。

○此章は。専ら谷神を云ふ也。物とは。名をば不云谷神也。混沌としてまとかに萬善全く具つて成就した物が有る也。成は。成就の義也。成就とは。百が百ながら全具して欠目なき處を成と云ふ。釋氏圓成と云ひ。道家混成と云ふ。同じこと也。只まとかと斗りではなき也。氣魄厚き處で云ふ也。如此谷神には。混成して萬善全く具つた故。衆妙の出づる門也。天地未開より谷神と云ものは生じて有る也。○寂兮寥兮とは。虚中の神なれば。希夷微にして。見れども不見聞けども不聞手にも不取。一切の相を離れた物なれば。寂寥と云ふ也。○獨立とは。天上天下唯我獨尊と同じ事也。谷神と云ふものには。肩を並ぶる者はなき也。天地古今に一本立ちなもの也。釋氏は真如法性を示されたと見えたり。獨立は。詩

經にも無聲無臭と云是也。双ぶものがなき處より云也。○不改―とは谷神は。古今不易の常道なれば也。○周行不殆とは。健の徳也。谷神の道と云ものは。古今天地に周行して殆いことはなきなり。譬へば日月の速にめぐる處は。健にして其勢強き也。如是健に速に周行して。落ちそらにもなく殆いことはなき也。此日月を如此するも。谷神のなすわざなれば。道と云ふものはさうしたるもの也。○可以爲天下母とは。此天下は天地萬物を云ふ也。天下はきはめた詞也。天地萬物は此谷神より生れ出た物なれば。谷神は天地萬物の母と云ふものなり。かくしたものが一つ有ると云うたもの也。○字之―とは。谷神を尊稱して名に替へて付けたもの也。なれば道と云ふは谷神の字と也。或は本然の上で道と云ひ。妙用の上で云へども。道家にては皆谷神のこと也。此谷神と云ふものは。形で云ふべきやうはなきものなれども。無理に形取つて云へば大と云ふべき也。なせなれば道と云ふものは。平等一枚なもの也。故に大きな處より云へば。大と云ふべき也。又周行して健なる處から云へば。逝と云ふべき也。逝は。往也。即速に行りて不可追也。又獨立して双びもなき尊處より云へば。遠と云ふべき也。遠は。譬へば天子の如く。貴人へは近附くこと不成也。遠く隔たりて居ること也。其如く此道と云ふものは至尊にして。何にても道の尊きには可譬ものなき也。獨尊なれば遠なりと云ふ也。他物の不可双處より云ふ。尊の至也。又道の本然は。根に復歸して至つて静なもの也。其根に復歸して静な處より云へば。反と云ふべきなり。此四のものは。道を形容して云ふ處の大箇條也。道と云ふは總體で云ひ。大逝遠反は大箇條を上げて云ふ也。譬へば人と云ひ分けて云ふときは耳目口鼻四支と云ふ類なり。人と云ふは總名也。家と云ふ

も然り。大逝遠の二字は帽頭の文法也。道は如此大きなものぢやと也。天の廣く萬物を覆ふは大也。地の萬物を載する處は大也。王は萬民の上に立つて。萬民の鏡と成り給ふことなれば。是れ大也。王に責を重く掛けた者也。○域中―とは。太虚の總廓を云ふ也。四大とは。風空火水のことではなき也。道天地王を指して云ふ也。王は其大の一に居れば。身を大切に持せられねば不成也。輕々しく可持ことではなきとなり。萬民の善惡は皆王に掛ることなれば也。王に責を重く云ふ也。道を説くときは王を相手にして云ふこと也。人は生るゝ地にそだつ故。法地と云ふ也。地は又天の命を受けて。天の萬物を生ずるを地が受載せて成就なさしむることなり。雨露天より下して地にかこんで。萬物を長育する故。法天と云ふ也。天の廣く物を覆ふは。天も谷神より出で。さうして覆ふことなれば。法道と云ふ也。道は谷神也。道は法自然とは。此法は上の文法で云つたもの也。文字に不可抱。道の行はるゝすがたを見れば。自然なもの也。強ひて行はるることではなき也。天然と左様有ること也。自然なりと云ふこと也。

重爲輕根章第二十六

重^{キハ}爲^ニ輕^カ根^ニ。一^ニ靜^ハ爲^ニ躁^ガ君^ニ。是以^ラ君子^ハ終日行^イ不^レ離^レ輻^ニ重^ヲ。雖^レ有^ニ榮^ニ觀^一。一^ニ燕^シ處^シ超^シ然^リ。如何^ゾ萬乘之主^ニ。而以^テ身^ヲ輕^ニ天下^ニ。一^ニ輕^ニ則^レ失^レ臣^ヲ。一^ニ躁^ニ則^レ失^レ君^ヲ。

○此章。専ら畜の修養を説く也。重靜の二字を貴んで。輕躁の二字を戒めたもの也。心の本然は重く靜

な者也。然るに軽く躁ぐと云ふは。物欲に引かるゝ故也。本心は固よりも泰山の如くすわりたるもの也。輕躁は心の本然ではなき也。不見可欲谷神實するの心は。重く靜な者也。心が欲知に走るとき。軽く躁しく成りて本心亂るゝ也。其重靜な處が。とりもなほさす齋の修養也。心が一切の外物に不動處が。重靜なと云ふもの也。外物の爲に動くは。軽く躁ぐと云ふもの也。然るときは心氣を使ふ故長生不叶也。なれば重靜なるは心の根君ちやと也。根君は根本の義也。輕躁は根君にあらずと云ふこと也。○是以君子とは。有道の久敷を指して云ふ。○輜重とは。軍營へ牽く大車を云ふ也。武具兵器を積む車なれば。殊の外重き物也。此は重靜の義に取る也。君子たる人は。終日行いても。一切の外物に心をひかれて輕々しく躁しきやうなことはなきなり。片時も心の本然たる重靜を離るゝことはなき也。無知無欲故本然を離るゝことはなし。即修養也。凡夫は心走名利。片時も輕躁を離るゝことはなき也。君子に反したるもの也。○雖有榮觀。榮觀は人を迷はす外物を云ふ。譬へば美女の類を見ては。乍ち心を動して輕躁し。華屋を見てはうらやむの類は。小人の心也。有道の君子は。常に重靜を守つて居る故。美女華屋の如き榮觀有りと云へども。少しも心を不動。谷神を不離。谷神を安宅として燕處と安んじ居る也。燕とは。谷神を安宅として谷神の上に燕する也。超然とは。榮觀を離れて。一切の外物の上に超出て居ること也。なれば一切の相を離れたこと也。如此一切の相を離れた故。心が平生重靜にして谷神實する也。凡夫は着相故。心が輕躁にして谷神を離れたもの也。○如何萬乘主而とは。帝王也。身とは。血肉の身のことではなき也。釋氏の法身也。谷神也。なれば帝王は四大の一なれば。心を外物に走せて。大切の

法身を天下より軽く可思ふことではなき也。天下は外物。身は谷神也。樂得天下身亡ぶるは不思也。是以身輕天下と云ふ也。萬乘の主は其様なことは何にしにあらうぞと也。○輕則失臣とは。耳目口鼻の類を云ひ。君とは谷神を云ふ也。凡夫は利欲に心引かれ心が輕き故。耳目も我下知を不聞也。耳目みな邪路へ趣く也。是れ心輕故失臣と云ふもの也。名利甚しく心が馳せては躁しき也。躁しきは。輕きより又甚しき也。躁しき段になりては。失臣のみならず。谷神を根こぎに失うて仕まふことぢやと也。然るときは學者不可不慎乎。又云はく。釋氏に意馬心猿の喩有り。

善行無轍迹章第二十七

善行^{フモノハ}無^シ轍迹^シ。善言^{フモノハ}無^シ瑕謫^シ。善計^{ルモノハ}不^レ用^ニ籌策^ヲ。善閉^{ツルモノハ}無^シ關鍵^ヲ。而不可開^レ。善結^{ブモノハ}無^シ繩約^ヲ。而不可解^レ。是以聖人常^ニ善救^フ人^ヲ。故無^シ棄^ル人^ヲ。常善救^フ物^ヲ。故無^シ棄^ル物^ヲ。是謂^フ襲明^ト。故善人^ハ不善人之師^ト。不善人善人之資^ト。不^レ貴^ニ其師^ヲ。不^レ愛^ニ其資^ヲ。雖^レ知^ラ大迷^フ。是謂^フ要妙^ト。

○此章は。無心にして自然に法り。無爲にしてなすことを云ふ也。轍迹は。車のあと也。無心にして自然に任せて行ふときは。目立つことがなき也。仁を行つて民其仁を蒙ることを不知也。是れ行けどもあ

とのなきやうな者也。○善言一とは。瑕は。玉の疵也。謫は。せめ也。善く言ふときは。言に無失故人のせめ來ることはなき也。無心を云ふ故也。○善計とは。計は數也。算用の名人を善計と云ふ也。善策は。日本で云ふそろばんのこと也。算用の上手なれば。そろばん不入埒明くと也。自然の數に預けて自の勞を辭して居る也。此は皆無爲無心にしてする故。迹のなきことを云ふ也。○善閉一とは。關は。門を閉づる處の横木也。鍵は。錠まへえびのこと也。有道の人は。人心を仁の徳を以て閉づるゆゑ。とざしはなければども。此門を開くこと不成也。仁が大きな故。民其仁に化して自ら仁をかうむることを不知也。故に關なければども。門を開くやうなことなき也。是即關鍵無けれども。善く閉ぢられて開くことならずと云ふもの也。仁徳以て民の心を結びとむる故。無繩して仁の繩を解いて外へ出る様なことはなき也。萬民皆仁に化して居る也。善行と云ふより此迄。和光同塵のすがた有り。○是以一とは。聖人は此仁の徳を以て人を救ふ也。一切衆生を捨つると云ふことはなき也。譬へば盲人を以て樂人とする類也。盲人は廢人と云つてかたはものなれば。世にすたれもの也。なれども此を樂人とするときは。不廢して用に立つと云ふもの也。聖人以盲人樂人とすることは。聖人の知也。心不走他專一なる故。事を記憶すること苦勞なき也。是を以て用ふる也。楠氏思へらく。聖朝無棄物是也。人のみならず有情非情の物迄捨てぬと也。非情の上で云はゞ。大木を梁とし小木をたる木となす類。有情で云はゞ。牛は耕させ馬は荷を付けて遠きに及す類は。皆聖人の成し置かれしこと也。此不棄して用ふと云ふもの也。聖人は如此諸事をなさるゝこと。其知勝れたること也。然れども其知をかくして。人物ともによすてさせられぬ處

は。和光のすがた也。我に不及の人ぢやと云つて捨て給ふときは。世人は不立。其身も立たぬ也。我はかほど知なれども。人をすてず世人と水きはを立てぬ處を。襲明と云ふ也。襲明は。藏しかくすの義也。即和光同塵を二字につめて云つたもの也。和光の名目也。かやうに和光のすがた故。人物をすて給はぬことを云ふ。○善人とは。上の聖人のこと也。不善人は惡人のことではなき也。愚不肖の人也。師となりて教ふることも也。不棄人物處也。善人が愚人を役に立たぬと云つて捨て、救はぬときは。愚人は立たぬ也。善人と云ふ者は。不肖人の師となりて救はるゝ處で。不肖人は立つて居たもの也。不善人は善人の資になる也。不善人なき時は。善人と云ふことはなき也。俗に云ふ有衆生有佛と。資とは。不善人に依つて善人の善人たる處を知るが分明なるを云ふ。此れ互に相資不合るときは。即天下の大亂也。然るときは善人が何程ものしりぢやと云つても役に立たぬ。大に迷うたと云ふもの也。なれば貴其師其資を愛して。互に不棄不被棄處を嗜んで知り得る處を。是を人間の上に於て肝要の妙道と云ふぞと也。南氏謂はく。善行と云ふ上の五つの善の字肝要ならん。道家で云へば。無心自然に任せて事をなすを善くすると云ふものなり。

知其雄章第二十八

知其雄。守其雌。爲天下谿。爲天下谿。常德不離。復歸嬰兒。知其白。守其黑。爲天下式。爲天下式。常德不忒。

復於無極。知其榮。守其辱。為天下谷。為天下谷。常德乃足。復歸於樸。樸散。則為器。聖人用之。則為官長。故大制不割。

○此章は。亂國身を有つの法を解けり。雄は。陽に屬して毅強也。故に怪我をする也。而して身破る。雌は。陰に屬して柔弱にして靜也。故にけがすることなくして身を破ることもなき也。人亂世に處しては。雄にして勝つことは知つて居れども。それを止めて。雌にして柔弱なる處を守つて不爭。則身を全う有つ也。此れ不爭の徳を解けり。亂世に勝つことを求むるときは。必禍身に及ぶ也。勝つことを不求めるときは禍を免る。是れ俗に云ふ拔かぬ太刀で功名也。如此勝つことを求めざれば。人が許して。歸服する也。萬人歸するときは。己は天下の長となる也。即拔かぬ太刀の高名是也。谿とは人歸するの義也。谿は。丘陵とはちがうて下き也。其下き處へ萬水歸する也。故に谿は水の王となる也。是れ萬人が不爭して。下れるものに歸するの道理なり。萬民歸則王長となる也。なれば天下の萬民の長となるを為天下谿と云ふ也。此れなれば谷神の離るゝと云ふことはなき也。常德は。谷神也。○復歸於嬰兒とは。六根はあれども其の欲がなき也。其の欲がなきときは。萬善全具つて元氣厚くして而も盛也。故に赤子の手握りつめた處を。男の力で開き難きもの也。是れ元氣の厚き處也。なれば嬰兒は道の本然を云ふぞ。神道にも。ことを嬰兒にかり心を神性に求むと云へり。○知其白とは。和光同塵の形也。身に潔白な

ることは知つて。少しもけがすことはなければ。世俗と水きはを不立して。あとをくらまして黒を守つて居るは。和光の徳也。角した徳なれば。天下の手本教となると也。亂世身をたもつるの法と也。天下の手本教となると也。天下の手本と成る程なれば。常德の谷神にチットモふみたがへ誤ることはなき也。復於一の字。上下の例を見るに復歸於と可有。歸の字落字と見えたり。無極は。無の至極なり。知を去り欲を去つて無の至極に歸復して。有爲の累はなきなり。周子太極を此無極を以て解けるは是也。儒家で無の至極を貴ぶことは。絶えてなきこと也。道家専ら用ふる處なり。程子の支學論は。全く虛無靜を主として解けり。朱子此を要として論語の註にせり。周子程子朱子道學にめぐりめいた處なり。○知其榮とは。富貴の場也。辱とは。貧賤の場也。亂世に處しては。富貴の場に處することの可なる事は知れども。亂世故辭之。貧賤の場に安んじて居るときは。身に禍を得ることはなきなり。亂世無道のときに當つて。富貴に處すれば必禍を取るもの也。此れも即亂世身を有つの法也。如此不求榮安貧にして居れば。則萬民却て歸己也。そこで天下の長となる也。谷は谿の處と同事也。○常德乃足とは。谷神全具つて一分のかけめなきことを云ふなり。○復歸於樸とは。樸は。山のあら木未だ斧の入らぬまさらりのなき新木也。新木は元氣厚くして全也。道の本體は。混然とまろらかにして厚く。而も萬善全く具つて有り。衆妙の門也。二十五章に有物混成と云ふ是也。此を名けて嬰兒と云ひ。莊子は混沌帝と云ふ也。或歌に。山がつが白木づくりの其身をば。漆つかねばはげ色もなし。○樸散とは。譬へば樸は新木なれば。此は梁にせうとも棟にせうとも。何やうの器にせうとも。すきなことなり。故に大工

此を様々の器を作り出す也。其の如く道と云ふ者は。萬善全う具つたもの故。道が散じて天となり地となり人物となりたもの也。聖人は此人物を用ひて能く修められたもの也。故に官の長と成り給ふ也。釋氏も論義多き也。○官長一とは。萬物の上に立つこと也。○故一とは。大制とは能く制し治むる義也。○不割一とは。無跡也。聖人は物を能くのことさす大制し治めらるゝ故に。混然とまろらかにして無跡也。其あとのなき處が和光の姿也。故に亂世に處して。能く身をたもち長生不死すること也。長生不死の四字眼を付くべし。又云。以天下之心爲心故無割也。

將欲取天下章第二十九

將欲取^レ天下^ニ而爲^レ之者^ハ。吾見^レ其不^レ得^レ已。天下^ノ神器^ハ。不可^レ爲^ス也。爲^ス者^ハ敗^レ之^ヲ。執^ル者^ハ失^レ之^ヲ。凡物^或行^或隨^也。或^ハ嘘^或吹^也。或^ハ強^或羸^也。或^ハ載^或隳^也。是以^テ聖人^ハ去^レ甚^去奢^去泰^也。

○此章。自然を行ふこと也。○爲之一とは。善行を施すこと也。天下を取らんと欲する心と云ふもの也。其欲より起る處の善行なれば。皆誠は無くして偽詐の善行を行うて。萬民をなつくと云へども。其天下を得ることはならぬものぞと也。戰國の諸侯は皆偽の善行をなした也。然れども偽にして誠のなき故。一旦雖得と乍ち亡びる也。漢の王莽が如き。又齊の田生子の類は。天下を仕てやらん爲に民に惠を施したなり。然れども不能有事也。已は也の字の意。也の字。也已は輕き所有る也。○天下一とは。天下

は神妙の器也。常の器をさへ非道のことでは得られぬ物也。況んや神器なれば。にせの善行をなし。己が知力を以て得ると云ふことは不成こと也。盛徳にして堯舜の如きなれば得ることぞと也。○不可爲一とは。不可爲以己知力得之と云ふこと也。私の知力にては。此神器たる天下は得られぬと云ふこと也。○爲者一とは。己が知力有心を以て得られんとするときは。必仕損する者也。敗は。仕損すること也。有心を以て執るときは。却つて失ふこと也。敗するとは。皆私欲より出る故也。自然にして爲したり執つたりすれば。得るものなり。○凡物一とは。皆自然に任せざることを云ふ也。行は。先達のこと也。隨は。後るゝこと也。なれば君父兄夫長は皆先立つが。自然の理也。臣子弟婦少は得られて跡からするが。自然の理也。此皆自然の理に任せるときは。勞することはなき也。嘘は熱を云ひ。吹は寒を云ふ也。嘘は。いきをかけてあたゝむる體也。吹は。急に吹いてさますこと也。寒熱を不^レ云して嘘吹と云ふこととは。老子文章に奇を好んだ也。我書ではなきこと也。なれば譬へば火は火の性に任せて用ひ。水は水の性に任せて用ふるが。自然の理也。虎狼は強く兎羊は羸き。是自然也。成就するものは成就させ。隳るゝものはやぶれにまかすが自然也。聖人は是自然に任せて行れ従はせらるゝ故。何でも身に勞を受くることはなき也。自然の則に越えたこととはなされぬ也。難得天下を得んとする類は。自然の則にはづれたこと也。故に禍を得る也。甚奢泰は皆自然の則にすぎたこと也。聖人は雖一分過當なることは去てゝなされぬ也。一分も過當なるは自然でなき也。以有心欲得神器之天下者。大に過つこと也。聖人固所惡也。○載隳一とは。南氏謂はく。莊子に家をたてんと欲してた

つるときは。家室は成就すれども。山の材木は際る也と云ふ。是自然の理也。然るに材木をやぶらざるときは。家が成就せぬ也。故に是成れば際れ。際れるは自然に任せて事をするときは。其事成就する也。木のやぶれを厭うて家をたてぬときは。人の居所なき也。是自然の定理にもとる故也。只自然の理に任せて其事の成就する所は。聖人の處用也。反之材木をやぶらずして家なくして居所なきは。自然の理にそむいて禍を得ると云ふもの也。聖人の所惡也。莊子と意少異也。斷章取義之例を以て見ば可ならん。

以道佐人主章第三十

以道佐人主者。不以兵強天下。其事好還。師之所處。荆棘生焉。大軍之後。必有凶年。故善者果而已矣。不敢以取強焉。果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得已。果而勿強。物壯則老。是謂非道。非道早已。

○此段は。戰國之諸侯欲の爲に用戰ことを戒めたなり。人主は。天子或は諸侯を指す也。臣として眞の道を以て人主を佐くる者は。兵の勢の強を以て天下に幅などはせぬ也。以兵強天下とは。兵の勢強を以て幅をすること云ふ也。兵の勢強を以て諸侯の國などを多く亡して。我ものにして我儘にする

と云ふは。眞の道ではなき也。兵勢を恃んで列國を亡すと云ふは。皆欲より出たこと也。一旦亡すと云へども。軍の事と云ふ者は。反報せぬ事はなき也。大國雖亡小國。小國含怨怒矢を反すもの也。然るときは大國は疵付き小國は亡ぶる也。譬へば大蛇争うて。大蛇は疵付き小蛇は吞まるゝ如く也。なれば兩方に破れ有ることなれば。軍すべきことではなき也。○師之所處とは。軍のあつた場を云ふ也。○荆棘生とは。荒地となりたこと也。軍のあつた場をば。民耕作をせぬ故。殊の外荒地となり稼も不生也。是軍の害たる一也。○大軍之後必有凶年とは。大風或は地震あつて。飢饉の年を云ふ也。大軍あつて後には。必飢饉のけち十年なもの也。なせなれば天地陰陽之和氣を敗る故。天より自然に如此凶年の應有る也。なれば軍を止めてせぬがよい也。總じて軍を起すことは。皆欲より出たこと也。其欲に引かれ。軍を起して人民を賊ふ故。一旦勝つといへども。人民怨怒の心を含む。故に今は我身に禍を得て亡びる者也。不如止軍也。故善者果而已矣とは。此一句眼也。言ふは善は様々廣きこと也。其内道家老子の善と云ふ者は。此果に止つたと也。而已矣の三字。盡して無餘之意也。果とは。即論語に所謂る克己也。果の字義を見るに。雖水火之中。二足をふまずふんこんで仕てとること也。なれば此は己が私に克つことの強きを云ふ也。總べて物欲の私に克つことは。難成もの也。求名者は其名に引かれ。求利ものは其利に引かれ。求色ものは其色に引かれて。克つことならぬもの也。其物欲に克つが克己と云ふもので。即果也。六根之欲聰明の知にキツト勝ちおほせて。夫れにおぼれぬ所が。果と云ふもの也。雖克物欲。少しも二の足をふむ處有つて。弱處有れば果とは云はれぬ也。一文字にふみこんで。六欲に勝

得た處が果也。其六根欲と聰明の知に克ち得たときは。無知無欲に歸つたと云ふもの也。無知無欲なれば。心氣を不遣。とりもなほさず修養也。此果の内に有ること也。○不敢以取強とは。此強は外に有ること也。人と力を争うて勝つを好むを取強と云ふ。人と力を争ふときは。我一倍強きものなれば。必身に破れをとる也。故内欲克心欲而外不欲與人争勝也。○果而とは。矜は。才智にはこりて智慧争ひすること也。伐は。功業にほこりて己が手柄を争ふこと也。驕は。富貴威勢にはこりて。町人の色くらべ大名の威勢争の類也。此矜伐驕は即外の争也。此外の争は。我よりうはてなものに遇うては。必やぶれを取るもの也。取分け戦國の時は可愼こと也。南氏謂はく。武士が當戦國守愚故。竟に立幼君也。是無矜則勝の證也。故孔子曰不可及其愚也。又孟子反殿たり。然れども馬の不進也と云ふ。是不伐功也。故に孔子も孟子反不伐と云うて稱之也。なれば矜伐驕を專一にして戦争ふことを好むは。却て禍を受くること也。戦國の諸侯皆是也。大にひがごとなれば。内心の物欲には果にして克て。外人と才智才能を争つて勝つことを好むなど也。好むときは必又禍を受くる程にと也。果にして無知無欲に歸つたときは。即ち矜ることばなき也。故に果して勿矜と云ふ。勿れとは。皆欲に引かれて争を好む故。其を強く戒めた詞也。伐驕の意も同じこと也。果不得已とは。不得已の三字を以て。戦國の時なることは不云して知れたこと也。天下有道時ならば。出で、事を行ふべし。如此亂世無道の時は。此方より指出で事を行ふことはするなど也。さし出たときは。必無道の世なれば禍を受けるぞと也。なれども身にせまら掛つて。せいで不叶やうに成りたらば。不得已事をなすべしと也。必しも亂世なれば。手前からさ

し出ることば無用と也。莊子不得已の字數々用ひたり。此が出處也。果而勿強とは。無知無欲に歸して。人と力を争ふことはするなど也。我より強きものゝ爲には必破らるゝ也。南氏謂はく。上の不敢以取強と同じこと也。然れども上は果而已矣。不取強と云へば。戒禁の詞ではなき也。爰は禁強を云ふ也。物壯則老とは。壯とは十分したること也。即上の矜伐驕者は。氣が十分に壯になりてのこと也。如此最早我ほどのものはなきと云つて矜伐驕するものは。必亡びる也。譬へば日月中するは。十分に上りつめた處也。已に十分するときは。早や傾く道理也。三五夜の月は。已に既望に近き也。人のよはひは三十が壯なるとき也。已に三十になれば。年衰ふるに近き也。是十分すれば傾くに近きものは。自然の理也。故に道家は貴不足惡十分也。盈は必缺ける道理なれば也。なれば今日戦國の諸侯。兵の勢を恃んで國を亡しては天下に驕り。一旦の功をなしては。伐争又は才能などに矜つて十分して居ると。必老ゆるもの也。矜伐驕は凶器にして。道と云ふものではなき也。かやうな道でなきことをば。皆早く止めてすてたがよいと也。果の剛を用ひて。矜伐驕強の三の外の強を示したるもの也。果の剛が本の強也。此示不爭の徳也。

夫佳兵章第三十一

夫佳兵者。不祥之器。物或惡之。故有道者不處。是以君子居則貴左。用兵則貴右。兵者不祥之器。非君子之器。

不_レ得_レ已_レ而用_レ之。恬淡_ヲ爲_レ上_ノ。故_ニ不_レ美_ト也。若_シ美_ト。必樂_ム之。樂_ム之者。是樂_ム殺_ス人也。夫樂_ム殺_ス人者。不可_レ得_レ志_ヲ於_レ天下_ニ矣。故_ニ吉事_ハ尚_レ左_ニ。凶事_ハ尚_レ右_ニ。是以_テ偏將軍處_レ左_ニ。上將軍處_レ右_ニ。言_フ居_レ上_ニ勢_ヲ。則以_テ喪禮_ヲ處_レ之_ニ。殺_ス人衆多_ク。以_テ悲哀_{シテ}泣_ク之_ニ。戰勝_シ以_テ喪禮_ヲ處_レ之_ニ。

○此章は。老子春秋之末戰國而も七國勇を争ふ時。生れ給ふ故に眼前見之。戰兵之事を戒めて作れり。戰を好むは本欲より生じたこと也。即人之邑や國を奪つてわがものとせんとするは。欲にあらずして何ぞや。故に此章に兵を戒めたは。即欲を戒めた也。而して三寶の内不爭の徳と慈の徳とを主として解けり。○夫佳兵者とは。好戰佳兵不祥にしていまはしきこと也。其忌はしきことを好み用ふる人は。即不祥の器と云ふもの也。器とは。形よりして下なるの謂也。○物或惡之とは。物は人也。古は人を指して物と云ふ也。人も天地の間の一物なれば也。或惡之とは。或の字妙也。不祥の器をにくまぬものもあらうけれども。大方の人は惡むてあらんと也。眞綿で首くゝる如く。まぐりわるく云つたもの也。○故有道者不處とは。起兵を好み戰場に居らぬこと也。○是以君子とは。平居と云つて何事も無き時のこと也。左は陽に屬す。善にして目出度方也。右は陰に屬す。惡にして忌はしき惡しき方也。無_レ兵即善兵即惡也。

君子平生の主意は善に在り。故に左を貴ぶなり。兵を好んで用ふるは。惡を好むと云ふもの也。故に右を貴ぶ也。なれば君子たる人は常に善を貴び。戰國の諸侯は常に惡を貴ぶと云ふもの也。故に用兵也。○兵者とは。兵は殘害の器也。故に不祥の器と云ふ。○非君子之器とは。君子は在位の君子也。なれば兵は人君の用ふべきことではなき也。○不得已而とは。恬淡とは。無味と註してあちなきこと也。味ふと云ふは好むこと也。無味と云へば不好こと也。なれば恬淡は。うれしや悦ばしやと不思こと也。不得已用之とは。大舜の伐四凶禹の伐三苗。湯武の伐桀紂者。不得已而兵を用ひ給ふ也。聖人何ぞ此を好事とは喜ばんや。伐つことは氣の毒なことぞと思召しながら伐たせらるゝ。恬淡を爲_レ上と云ふもの也。不好伐故。紂を伐つて後に。弓を囊に治めて馬を野に放ちき。戈を櫃に藏め給ふは。重ねて兵を不用ことを示したるもの也。殺_ス惡人は殺と云ふものではなき也。釋氏も。慈悲の殺生は菩薩の萬行に勝れたりと解く也。○勝而不美とは。聖人の意也。而美之者は示_レ殺_ス人也。一は是は皆戰國の諸侯之心也。是皆欲心故勝つて美之樂之也。故に吉事とは。婚禮或元服袴ぎの類也。凶事とは。喪禮或亂兵の類也。左りは陽に屬して。善にして目出度方なれば。吉事には左りを貴び。右は陰に屬して。惡にして忌はしきことなれば。凶事には右を貴ぶ也。○是以とは。偏將軍はそへ大將也。上將軍は本大將也。添大將はいやしければ右の方に居り。本大將は貴ければ左の方に居る筈なれども。偏一は左に。上一は右に居ること。偏一の凶器たることは。上一の凶器ほどではなき故。如此さかしまに居ること也。是れ吉事は尚_レ左。凶事は尚_レ右の謂也。なれば古人も兵をば凶器とする也。○言居上とは。上將軍は左にして上に居り。偏將

軍は右にして居る筈。いやしき偏將を左にして。貴き上に居る勢を。古へに如此言うて置いたは。凶事の喪禮を以て行ふことを處置したものなり。なれば兵は凶事ぢやと云ふことを示したものとぞ也。殺人衆多とは。慈徳にして人を愛する意也。人を多く殺し國などを得て喜ぶは。不仁の至り也。不仁なれば天下歸することなき也。聖人豈喜んで殺すことを好まんや。然れども惡人なれば不得已殺す也。雖殺本不好なれば以悲哀泣之。是慈の徳也。○戰勝以とは。雖勝吉事として喜んで行ひはせぬ也。凶事として自ら惡んで行ふ也。吉事は主喜。凶事には主悲哀。喪の禮は凶事也。故に戰勝は凶事となして。喪の禮を以て悲哀する也。○處とは。處置と云つて行ふこと也。吉事に喜ぶは吉事の行也。凶事に悲むは凶事の行也。勝つて不喜は不爭の徳也。○三寶とは。釋氏は佛法僧を云ふ也。道家は修養不爭の徳慈を云ふ。此章は聖門に入れても可也。妄に爲異端は無眼の至り也。佳兵不祥の器とは。其用ある處よりして云ふ也。譬へば三木は不祥の事を司る器故。不祥の器と云ふ也。三木は手かせ足かせ首かせ也。此人は兵の不祥なことを司る。故に不祥の器と云ふ也。

道常無名章第三十二

道常無名。樸雖小。天下不敢臣。侯王若能守。萬物將自賓。天地相合。以降甘露。人莫之令。而自均。始制有名。名亦既有。夫亦將知止。知止所以不殆。譬道之在天下。

下。由川谷之於江海也。

○道の常とは。道は谷神の字也。常とは。谷神の本然常體と云ふ者也。一切の相を離れて。見れども見えず。虚にしてなきもの故。得て可名付様なき也。故無名と云ふ。○樸雖小とは。即谷神と一道也。道と樸と二つはなき也。混然として萬善全く具つた上で樸と云ふ。物は一にして名はさまざま也。阿彌陀如來を無量壽佛と云ふ類也。其道は大なるものをなぜに小と云うたなれば。道は胸中方寸内に宿して居るもの故。小と云ふ。臣妾と云うて賤んだ詞也。不臣とは尊んだ詞也。天下誰有つて此道を不尊ものはなき也。侯王とは。人君の稱也。天子國君を云ふ。人君たるもの此樸を能く守るときは。萬民皆歸服する也。萬物は。萬人と云ふこと也。萬人の内になびかぬ草木もなきとなり。賓とは。歸服すること也。主は在内に。賓は外より來るの義也。○天地相合とは。甘露の降るは天地和合の徴しなり。人君如此道を守つて萬人歸るときは。天地も和合して甘露降る也。甘露は。物を育するもの也。即天地和合して甘露降るときは。人民は言ふに不及。萬物育せられて生をとげぬと云ふことはなき也。即致中和天地位し萬物育する義也。○人莫之令而自均とは。如此者は人が角せよと號令はせねども。自然と平均にまゐるべんに其恩化ゆきわたりて。一物も生をとげずと云ふことはなき也。是有道の代なれば。自然の勢如此。○始制有名とは。樸散じて爲器とき。其始は山の荒木也。棟梁の名なき也。大工の手に入つて大に此樸をけづり制して。始めて棟梁の名出でたり。如其谷神本は無名也。其の已に清めるものは輕くして。

陽となりて天に見はれて。日月星辰の象を垂れ。濁つて重きは。下つて地となりて。山川丘陵草木を生ずる也。そこで上にあらはるゝを天と云ひ。下に見るゝを地と名けて。始めて天地の名ある也。○名亦既有とは。それよりして段々人の身の上。善惡邪正様々名紛々とまぎらはしく出てたり。そこで止まることを不知者は。末に出た名利名聞さまゝの名を追うて。其名に迷つて邪路に陥る也。是れ本を忘れて末を追ふと云ふもの也。此に於て止り處を知るがよい也。どこに止まるぞ。其本然の谷神を安宅として立歸つたがよい也。谷神へ立歸つて其れにふみ止りたときは。何にても身にあやふいことはなき也。其末の名を追うて迷ひありくときは。あやふき邪路に入つて。而も身に禍を受くるもの也。故に其本然に立歸つて。邪路に入らぬやうにすべきこと也。譬へば川谷は皆江海へ流れ入るもの也。其の如く天下の萬物。皆此道に歸せぬと云ふことはなき也。なれば人君たる人。道を守つて有つときは。天下の萬民萬物有情の鳥つばさ。心なき山川に至るまで。なびかぬ草木はなし。天地までも和合して甘露を降すなり。可不慎乎。

知人者知章第三十三

知人者知。自知者明。勝人者有力。自勝者強。知足者富。強行者有志。不失其所者久。死而不亡者壽。

○此章は。善と惡と二つに對して擧げて云ふ也。聖經にも此例多いこと也。善と惡とを並べて見するは

教の法也。○知人者とは。惡の方也。○自知とは。善の方也。○知人者とは。己れが身の惡をば棚において云はれざる。只人の善惡斗りを穿さくして知る者は。私知と云ふもの也。本の知者とはいはれぬ也。○自知者明とは。これが本の知也。能く我を知るものは。必人の善惡も知るもの也。先づ己が本心のある處を尋ねて。徳を尋知つたがよい也。好惡の上でも有ること也。己れが好惡をする處を知つて。己れをかねにして人を推して知るときは。人の好惡も能く知るもの也。此が明かなると云ふ者也。○勝者有力とは。これは毅強を好んで。人と勝つことを争ふ也。好剛強外人と勝つことを争ふは。力で争ふと云ふもの也。これにて必我より力強きものゝ爲に破らるゝもの也。なれば本の強と云ふものではなき也。○自勝者強とは。内心の私欲に勝つものが。本の強と云ふもの也。なせなれば。自ら勝つことは成りにくいもの也。名利色の三欲に勝つて看よ。どうでも其方には負けるもの也。其勝ちにくいものに勝つ故。本の強と云ふものぞと也。○知足者富とは。千金をそなへたを富と云ふ。王侯といへども足つたとは思也。不足な處あり。なれば富んだと云ふものではなき也。故に大名も大國に居て。又他の國を合せとりたがる也。是れ不足にして限りなき故也。谷神の徳には。萬善全具りて一も缺けたる處がなき也。其谷神の本然。萬善萬美全う具つて足りたる處の徳を知るときは。なんでも不足なことはなき也。是が本の富と云ふものぞと也。○強行者有志とは。行は道家の行にして可見也。和光の修行。膏の受用之類也。此修行を強むるものは。有志と云ふべしと也。○不失其所者久とは。我安んずる所也。即谷神也。谷神を安宅としてそこで長久也。○死而不亡者壽とは。本然に立歸つてと云うたもの也。即前の谷神不死綿々

長存と云ふ是也。血肉の身は死すとも。此谷神の亡び失せると云ふことはなきなり。谷神の生ずる始を不知。其終を不知也。是れ壽と云ふものなり。

大道汎兮章第二十四

大道汎兮。其可左右。萬物恃之以生。而不辭。功成不居。衣被萬物。而不爲主。故常無欲。可名於小矣。萬物歸焉。而不知主。可名於大矣。是以聖人能成其大也。以其不自大。故能成其大。

○大道は。谷神也。汎は。廣大なこと也。可左右とは。谷神と云ふものは廣大にして。天地四方左右前後無不彌綸と也。萬物此谷神を恃んで生じたもの也。此谷神森羅萬象を生ずるは。殊の外なんぎなこと也。なれども終に辭退なされたことはなき也。なせなれば不勞無心に生ずるゆゑ也。森羅萬象を生じた處は大功也。なれども其功に居て我こそこれほどの功をなしたものとちやと云うて。おごりはなされぬ也。○衣被萬物とは。谷神の恩澤を萬物に蒙らしむれども。谷神が終に主人顔して自ら主となる志はなき也。其恩を無心にして。萬物にかうむらしめたもの也。○故常無欲とは。こゝは無心なこと也。道の眼から何でも大と思しめさぬ也。皆小さいことと思召す也。なれば天下の事物をば道は小とすると也。譬へば

堯舜は天下を大と思召さぬ也。なれば此小は道に屬して云ふ也。○萬物とは。天下の萬物皆此谷神に歸して榮枯する也。なれば谷神は萬物の主也。なれども谷神の心で自ら主たることを不知也。其不知處が大也。なれば如此ときは此谷神を大と可名也。大は人から云ふ也。人に屬して可見。是以とは。聖人は道と同體也。聖人は谷神と同體故。大功を成就す。なせ大功を成就なさるゝなれば。谷神と同じく。何程大功を被成ても。自大也と被成ておごり高ぶることはなき也。夫故に大功を成就被成しと也。大功をなしてそれに不居が谷神也。聖人大功を成して其功におごらぬは。谷神と一體なる處なり。

執大象章第二十五

執大象。天下往。往而不害。安平泰。樂與餌。過客止。道之出。言淡乎。其無味。視之不足見。聽之不足聞。用之不可既。

○執大象とは。大象は谷神也。谷神は大にして其形とりとめられぬ也。故に大象と云ふ也。前に出てたり。此谷神を執つて天下に行ふときは。行うてなんでも害はない也。身に禍を受くることもなき也。○天下とは。究めた詞也。往くは。行ふ義也。南氏謂はく。雖之夷狄の義か。扱なんでも一つ害なきときは。身心ともに安平泰也。此三字樂の一字を云ふ也。安平泰の氣象は即樂也。大學に曰はく心廣體胖と云ふ是也。樂の字の安平泰ほどよく形とる注はない也。○樂與餌とは。借喻也。物は聚ることあれど

も必散ず。道は聚散なくして常道常德なものと云ふ喻也。餌は。膳部のこと也。先賓客の有るときは。心の樂を設けて馳走する。それに樂人も添ふ也。是れ聚る也。膳部も様々の膳部をいだせば。是れ聚る也。然れども其客去るときは。樂餌も散ずる也。なれば物は隨時聚也。然るに此道は常道常德にして。古今聚散することはなしと也。道と云ふものは谷神也。面白く見事なと云ふことはなき也。面白いと思ひ見事なと思ふは。道を不知也。音樂や能舞は。皆耳目の慰になりて見るにまざるもの也。此道斗りば。耳目で見聞に足らぬもの也。何のかはりぬることなく。只自然にして淡乎として無味なる故也。然るを道は味いものぢやと思ひ。面白いものぢやと云ふ徒は。道を不知人也。此道は古今の常道常德故に。何ほど用ひても盡きぬものぢやと也。萬物生じて不辭者。用之つきぬと云ふもの也。道と云ふ者は角したものぢやに。世上の人は知らぬは悲しいことぞと也。

將欲噏之章第三十六

將欲噏之。必固張之。將欲弱之。必固強之。將欲廢之。必固興之。將欲奪之。必固與之。是謂微明。柔之勝剛。弱之勝強。魚不可脫於淵。國之利器。不可以示人。

○此章の數ヶ條の喻は。不爭勝抜かぬ太刀の高名を云ひたる也。○將欲とは。弓のあつかひを以て比した也。弓は常に張りつめて置けば。弓が噏んで弱く成りて役に不立もの也。強弓を噏めんと思ふならば。

常住張之置けと也。則噏くなる也。其の如く人に勝たんとならば。己れは力を不入。其の相手に任せて争はせて置くがよいと也。どこぞでは自ら屈するものぞ。是不爭勝の理也。○將欲とは。人の力を以て比した也。今相撲を見て可知。必相手を弱くせうと思はば。其相手を強くせよと也。此方には力を不入。相手に力入れさせて骨ををらせて。彼を強くすれば。卒には草臥れて自らたふるやうになるもの也。そこで拍子よくやるときは勝つものなり。此れ不爭勝の理なり。○將欲廢之必與之將欲奪之とは。柔弱の剛強に勝つことは。分明に見えたこと也。譬へば魚の淵を離るゝことのならぬは。分明に知れたことぞと也。柔弱の強に勝つは定つたこと也。こそげのけてものけられぬ道理也。魚の水を離るゝこと不成は。は定つた必然の理也。こそげてのけられぬ理ぞと也。淵は。水の心也。○國之利器とは。利器は。兵卒のこと也。示は。加ふる義也。人とは。人の國と云ふ心也。言ふは自ら兵を起して人の國へ加へると云ふものは。皆争也。争ふときは必亡ぶるものなれば。隨分柔弱を守つて不爭方がよい也。不爭則必勝つぞと也。不爭徳を示したるもの也。扱上の四の喻。老子の尾があらはれた處也。序に西山の曰はく。其間有陰謀之言と。此れまぬかれがたき評なり。老子には陰謀の言あり。おそろしき巧みあり。孫子も吳子も及ばぬ處ありと云うたは。此章の類也。老子も隨分かくされたけれども。此章であらはれたる也。我身を有つを專にする學なれば。此のつひえはある筈也。聖門には絶してないことなり。老子の意は。尤只争ひは禍を受くるの道。不爭して禍をさけたがよし。然るときはけつく勝つものぢやと。不爭の徳を只すらりと示されたけれども。欲廢興之欲奪與之と云ふときは。其言陰謀に渡つたなり。こはき心根な

れば。聖門より咎むる處逃れがたき處也。孫子吳子も此謀を多く用ひたことなり。

道常無爲章第三十七

道常無^ハ爲^{ルコト}。而無不^レ爲^ス。侯王若能守^{ラバ}。萬物將^ニ自化^{セント}。化^{シテ}而欲^ス作^{ラント}。吾將鎮^{ムルニ}以^テ無名之樸^ヲ。無名之樸^ハ。亦將不欲^ス。不欲^ス以^テ靜^{ナリ}。天下將自正^シ。

○此章は。三十二章と全同意也。道の常とは。谷神也。谷神の常體無爲なものぞと也。無心也。前に此意たびく出てたり。○侯王とは。人君の稱なり。三十二章に出てたり。○自化とは。其德化に萬物が自然と教化して。不知自化するなり。○化而欲作とは。二十八章に樸散而爲器の時也。此化は。上の自化の字と異也。作は。生ずることなり。谷神様々に千變萬化して。様々の物に形して生ずる也。其様々の物が出ると。色々の名出で。善惡邪正紛々とまぎらはしうして出る也。そこで衆生がふみまようて邪路に入る也。此で迷はぬやうに鎮むるに無名の樸を以てする也。若無名の樸を以て鎮めずんば。邪路に入ること無窮也。三十二章には名亦有將知止とあり。此も同意也。無名の樸は。即谷神を云ふ也。○無名之樸とは。一切の相を離れて無心なこと也。谷神の本然は。無知欲して虚無なもの也。○不欲以静とは。欲は動けば也。静は。本然に立歸つて静な場也。一切の相を離れて。無知無欲にして虚無なものとは。静なと云ふもの也。静なれば天下は自ら正しうなる筈也。天下所以不正者。知欲有つて争ふ故なり。無

知欲静なときは。人争ふ心ない也。侯王此無知無欲にして。虚無にして静な處の谷神を守り給ふときは。萬民皆其德に化せられて。天下の人無知無欲になる。然る時は天下豈不正哉。不可不慎也。

上德不德章第三十八

上德不^レ德^ス。是以有^レ德^ト。下德不^レ失^レ德^ヲ。是以無^レ德^ト。上德無^レ爲^ニ而無^レ以^テ爲^{ルコト}。下德爲^レ之^ヲ而有^レ以^テ爲^{ルコト}。上仁爲^レ之^ヲ而無^レ以^テ爲^{ルコト}。上義爲^レ之^ヲ而有^レ以^テ爲^{ルコト}。上禮爲^レ之^ヲ而莫^レ之^ニ應^{ルコト}。則攘^グ臂^ヲ而仍^ス之^ニ。故失^レ道^ヲ而後德^{アリ}。失^レ德^ヲ而後仁^{アリ}。失^レ仁^ヲ而後義^{アリ}。失^レ義^ヲ而後禮^{アリ}。夫禮者忠信之薄^{キニシテ}。而亂之首^也。前識者^ハ。道之華^{ニシテ}。而愚之始也。是以大丈夫^ハ。處^ニ其厚^ニ。不^レ取^ニ其薄^ニ。居^ニ其實^ニ。不^レ居^ニ其華^ニ。故去^レ彼^ヲ取^レ此^ヲ。

○此章。専ら末學の手に入りたる仁義のつひえから譏つて。仁義禮を上げてあたまで打ちたる也。本然の仁義を譏つたではない也。今日儒者束帶して仁義を語り。出家の佛衣を着て佛を拜するは。見分は禮なれども。心山のあなたに有る也。そこをいきどほりて云ふ也。仁義と道德とを上げて云ふは。右の通りなれば也。道德は眞の仁義也。○上德とは。前に大道廢れて仁義ありと云へり。德と云ふになつて

世が衰へた也。大道が廢れて上徳と云ふに落ちた也。然れども上徳まではよい也。不徳とは。徳を守るに心がない也。故に徳がある也。下徳の段に成つては。徳を不失様に守る也。即有心なれば徳はなくなる也。○無爲とは。全く無爲にして自然を云ふ。譬へば如四時之行。無爲とは無心也。爲之とは有心也。なれば下徳は上徳より下ること甚しき也。上徳は有爲の累なし。下徳は有爲に落ちた也。○上仁とは。仁より以下は下ること甚しくして。徳の部に不入也。徳と仁との異なることは。無爲と云ひ爲之とある也。下も亦語るに足る處ある故。下徳と云ふを上げた也。○爲之とは。有爲之ともいまだ有爲の累と云ふまでには不落也。なれば上仁はまたかゝはつた處ある也。上義と云ふに至つては。又其下ること甚しきなり。爲之とは。有心にして有爲之累に落つる也。又上禮の段になりては。至極下つて不及古こと愈甚也。○爲之とは。民に禮を行はせて。民が心身におこなはざれば。うでまくりして押して強ひて行はしむる也。是れ有爲の甚也。仍之とは。強ふること也。扱本然の仁義禮には。如此の異界はなき也。此三者異界を立つることは。甚しく知つて云ふ也。○故とは。道は前に云ふ大道廢と云ふ道也。徳は道徳の徳に非ず。後世の末學の徳也。仁と云ふより徳の部に不入。仁義禮は今の學者の行ふ處を云ふ也。道徳と云ふが正味の仁義也。老莊の何ぞ其の仁義に可指手乎。夫禮とは。忠信は表裏で云ふ也。忠は裏心まことのこと也。信は外行のまことのこと也。本然の眞をかたるときは誠と云ひ。執行底の眞を語るときは忠信と云ふ也。禮と云ふものは。まことの薄もの也。形は禮正しけれども。心が山のあなたなれば偽也。偽なれば亂の本となる也。○前誠とは。前代古人の言行を多く知つた博學多才なものゝこと也。

老佛は。實有を惡み虚と空とを專とす。誠は有也。誠と云ふのは。本來の道より見るときは外の飾也。聰明の知なきときは心虚にして明か也。知欲あるときは。内心がまつくらに成つて見ること聞くこと不正。是れ心が昏き故也。心くらければ。愚と云ふもの也。誠は愚の本となるもの也。無知無欲にして虚を尊ぶこと可知也。○是以とは。大丈夫は男子の稱也。大と云へば。釋氏の龍象と云ふと同じこと也。釋氏強量の人を龍象と云ひ。老儒は大丈夫と云ふ也。厚と實とは道徳を云ふ。薄華は上の仁義禮を云ふ也。彼とは仁義禮の薄華なるものを指し。此とは道徳の厚實なるものを指して云ふなり。

昔之得一章第三十九

昔之得一者。天得一以清。地得一以寧。神得一以靈。谷得一以盈。萬物得一以生。王侯得一以為天下貞。其致之也一也。天無以清。將恐裂。地無以寧。將恐發。神無以靈。將恐歇。谷無以盈。將恐竭。萬物無以生。將恐滅。侯王無以爲貞。而貴高。將恐蹙。故貴以賤爲本。高以下爲基。是以侯王自稱孤寡不穀。此其以賤爲本邪。非乎。故致數車無車。不欲碌碌如玉。落落

落トシテ如シテ石ノ

○此章は。專稱谷神云ふ也。谷神片時もなくしては萬物不立也。谷神は萬物の大となれば也。釋氏空を尊び。儒者仁義を尊び。道家谷神を尊ぶ。皆同じこと也。○昔とは。今に對して也。今の善惡は證にとられぬ故也。昔と云ふこと也。○一とは。混然たる谷神の一を指す也。清とは。清明也。天の清明にして日月星辰の象を垂れて。普く世界を明に照すは。此谷神の一を得てのこと也。谷神を失ふ時は。不得清明。○寧は。安寧にすわりて不動也。地の萬物を載せて不重安寧なるは。谷神の一を得てなり。○神は。萬の鬼神也。八百萬の御神也。靈とは。罰利生の靈驗也。意上に同じ。○盈とは。氣也。谷は虚なもの也。故に氣が盈つる也。山上に呼べば谷應ず。氣のみつる故也。總じて虚なものには氣が盈つるもの也。○萬物とは。意上に同じ。王侯とは。天子諸侯也。即人君の稱也。貞の字誤也。正の字可也。正は法則の義也。意上に同也。○其致之一也とは。其とは天地神谷萬物王侯の類を指す也。之とは上の清寧靈盈生正を指す也。下は此は得一の一と義異也。虚字也。同と云ふ義也。言ふは天の致清も谷の致盈も。谷神を失うてはならぬは皆同じことにたとへたる也。天無以清とは。再解する也。裂とは。やぶれをとること也。發とは。動いて不安寧也。言ふは天地谷神の一を失つて清寧なければ。天地くらやみと成つて天地も滅却すと云ふ心也。神無以靈將恐歎とは。罰利生の靈驗がなくなる也。○谷無以盈將恐竭とは。氣の不満ことなり。○萬物無以生將恐滅とは。滅却してなくなる也。○王侯無以爲貞とは。

貞の字正に可作也。意皆同じき也。南氏曰。此數句の無ければ以の二字の上に。谷神の一を失つてと云ふ四字を入れて見れば易解か。○故貴以とは。此句は貴高の二字を分けて韻に叶へたもの也。句を調へて章を成すと云ふ是なり。貴高の人は賤下を以て基本とすと云ふこと也。言ふは貴人も賤民と云ふものなければ不立也。其證據を下で云ふ也。○是以とは。孤寡不穀は賤の至り也。位するを人君は自稱して孤と云ひ寡人と云ひ不穀と云ふ也。穀は。善也。不善人と云ふ義也。どうして貴き王侯が自稱して如此云ふなれば。満を嫌うて也。満は必缺ける道理也。月の十分日の中は缺けるに近き也。王侯の場は十分の場也。乍ち缺けるに近き也。故に下つて自ら孤寡など稱ふる也。是れ王侯も以賤爲本と云ふなり。居高自ら下り居貴自らひききにするは。人君の修行也。老子の學の。十分をきらうて虚を尊ぶこと如此也。此をつめてみれば不爭の徳也。居貴自らたかぶるは争也。居貴自ら下るは不爭の徳也。○非乎とは。なんと我云ふことがうそではあるまいかと云ふ義也。故致とは。此一句虚の字を形容した也。碌々落落は。凝りかたまりて不動。物に應ずること不成。不自由なことを云ふ也。石玉を以てこりかたまりて不能應物に比して云ふ。車と云ふは總名也。車をかぞへてみれば。輪の軾のと云ふ類はあれども。車と云ふ名のある處はない也。なれば車と云ふは虚也。其虚を道家では貴ぶなり。なせなれば虚なれば萬事に能く應ずる也。玉石の如く碌々落落と凝りかたまりて。物に應ずること不成をば。欲しねがはんと也。不自由なれば也。此句は難解也。南氏曰。唯虚にして應ずることを尊んで云ふ也。譬へば鏡虚なる故能應物自在也。老子の尊ぶ所也。

反者道之動章第四十

反者道之動。弱者道之用。天下之物。生於有。有生於無。

○反者とは。反は前の歸根復命の時也。至つて靜なる時也。○動とは。よく動いて物に應ずるを云ふ也。道の本體と云ふは。至つて靜なるもの也。故に能く物に應ずる也。總じて靜なれば能く物に應ずる也。譬へば人靜心なれば。事を處するとき誤りはない也。心いそがはしきときは。必仕損するもの也。なれば至つて靜なるの反は。道の動いて能く事物に應ずるもの也。○弱者道之用とは。受用と云うて修行のこと也。強を去り柔弱を守るは。身を有つ法にして道學の修行と也。道の修行とは。即ち強を去り弱を守る處が道の修行ぢやと也。道家養生の法也。○天下之物とは。森羅萬象也。有とは。道の可道の章に所謂有名の有也。即ち天地を指して云ふ。無は。同じく所謂無名の無即谷神也。天下の森と萬とは。天地より生れたもの也。其天地はと云へば。谷神より生れたると也。本然の上で説くものなり。

上士聞道章第四十一

上士聞道。勤而行之。中士聞道。若存若亡。下士聞道。大笑之。不笑不足以爲道。故建言有之。明道若昧。夷道若類。進道若退。上德若谷。大白若辱。廣德若不足。建

德若倫。質真若渝。大方無隅。大器晚成。大音希聲。大象無形。道隱無名。夫惟道善貸且成。

○上士とは。上—中—下—は人之位界を立てたり。上士たるものは。道を聞いて勤勞して行ふ也。なげなれば道を信するに因つて也。中士は。今日の我等如きを云ふ。即ち中人也。中人は道を聞いては。其道を或は信じ或は疑ふ故。其人に道が存する様にもあり。亡する様にもなり。俗に云ふ中にぶらりと云ふもの也。又最下の下士は。一文不通の奴僕を指す也。此下士が道を聞いては腹を抱へて笑ふ也。其笑ふ處が忝なき也。若し下士が聞いて。うなづき喜ぶやうな道なれば。下賤なもの也。下士の笑は合點せぬからのこと也。下士が笑ふ所で。道の高上可知也。○故建言とは。古人の言を言ひおいたことありと云ふ義也。明道と云ふより大象無形と云ふ迄。建言の詞也。然れども老子の語也。建言の詞ぢやと云ふ心は。當時の人にあだにきかせまい爲也。故に古人の名を借りて己れが言を重んじさせたもの也。是を莊子に重言の法と云ふ。○明道若昧とは。眞に明なる者はをぐらく見ゆるもの也。跡をあらはさぬゆゑなり。目立たぬ所よりして云ふ。即ち和光同塵の姿也。夷道は若類とは。大道と云ふものは平等一枚にして。彼ぞ是ぞと云ふへだてはないもの也。貴賤高下はないもの也。そこを釋氏は無差別の境界無別地と云ふ。○進道は若退とは。進まんとするときは。相手が出てあたまを押へる故。進むことならぬもの也。退いて不爭出。則自ら進むこと易き也。是即不爭の徳不爭して勝つのを意を述べたり。○上德若谷

とは。上徳は谷神也。谷は虚を形どつた也。谷神と云ふものは。一切の相を離れて虚なものの故。如谷と云ふ。○大白若辱とは。老子の書は韻を合せてうたひ物の體故。同じことをくりかへし云うたもの也。即ち和光のすがたにして。明道若昧と云ふと同じことなれば。南氏亦略す。目に立つことなきを云ふ也。辱の字は韻に叶へり。○廣徳若不足とは。廣徳も上徳と同じ。廣徳の人は。外からみても愚かに見ゆるもの也。かしこだてをせぬ故也。そこを不足とは云うたもの也。○建徳若偷とは。建徳は順下に見て可也。立得て成就仕た徳のこと也。偷の字義は。十五章に有徳の人の徳を慎む姿を形とり。豫兮若冬涉川と云ふ處と同事也。物を大事に掛けて徳を慎む處を形どりたる也。有徳の人は物をいかつてはせぬ也。丁度盜人のぬき足をする如く。大切に慎守る也。○質真若淪とは。是も順下に見るべし。質朴にして眞實なことも也。眞の誠と云ふものは。作りかざりた處はないもの也。其作りかざりない眞實は。人と物を約束して替へる様なもの也。なせなれば其實が外へ不見跡をあらはさぬ故也。今時のテレン人は。口にはまことを云へども心は相違せり。其口に云うて約するはかはらぬ様なれども。底心は大に淪りてある也。かざりのない人の實と云ふものは。口で實らしきこと斗りを云はぬに依つて。どうやら不頼母様なもの也。そこを若淪と云うた也。○大方無隅とは。大方は。大道也。隅と云ふは。究り盡きた處を云ふ也。大道大虚と云ふものは。無邊にして隅の端のと云ふことはない也。無邊とも云ひ無隅とも云ふ。釋氏は本來無東西何處有南北と云ふなり。○大器晚成とは。大器も亦大道を指して云ふ也。譬へば小佛は三五日に出來する也。大佛の如きは百日にも不出來也。其ごとく今日各々や我等は大道を學ぶ也。其大道を

一兩年の中に成し得て。歸家して講釋せんと欲するは無理なこと也。大道は終身の修行なること可知。此一聯は人の益に成る處あり。○大音希聲とは。大音は即谷神の聲也。道の聲と云ふものは。耳にこそきこえぬ千古存する也。其無聲に聞く處が。眞に道の聲をきいたと云ふもの也。悟道の人は聞いて居るなり。希の字はのかに有るの義也。どうやら有るやうに思つて。耳をかたむければない也。なれどもスキトないではなき也。そこで希と云ふ。皆道を形どる也。○大象無形とは。象は。風のごときかたち也。見ゆるかと思へばなく。無いかと思へば聲有つて物を動かす也。なれば谷神と云ふものは。一切の相を離れ。虚にして無形な者也。其無形にみゆるが。名づけて云ふべき様はない也。これが眞に見ると云ふもの也。悟道の人は見る也。此れまで建言にある詞なり。○道隱とは。此より建言を老子が評判する也。上に云ふ如く道は無聲無形故。隠れて名をつけて云ふべき様はない也。谷神は虚の體なれば也。道は谷神の字也。○夫惟とは。名付けて云ふべき様なれども。道と云ふものがないてはない。さすが道也。道なればこそ能く物に貸與へて。萬物を成就なさしむる也。森羅萬象の生る。此谷神が根とならぬと云ふことはなき也。南氏按ずるに。中庸曰體物而無遺と云ふも是か。又上の章に萬物は得一生と云ふ是也。貸とは。借與ふる義也。道と云ふは本然の上で云ふ。林氏誤つて人に屬して云ふ也。道が自ら物に道を借與へて。其物を成就なさしむるの義也。

道生一章第四十二

道生一。一。一生二。二。二生三。三。三生萬物。萬物負陰而抱陽。沖氣以爲和。人之所惡。唯孤寡不穀。而王公以爲稱。故物或損之而益。益之而損。人之所教。亦我義教之。強梁者不得其死。吾將以爲教父。

○道生一とは。他の所と異也。谷神を云ふにあらず。虚無自然を指す也。下に云ふが谷神也。然れども谷神は虚無の後に出来る物かと云ふ不審可有。谷神の生の久しきことは難云也。虚無自然と共生して有る物也。而も是非とも谷神の生れた處を云へと云ふならば。虚無の場の時よりと外には云ふべき様はなき也。必しも不審に不可抱。○二とは。陰陽二儀也。谷神から陰陽の二儀生れた也。○三とは。天地人の三才也。此三才立つてより萬物は終りに生れた也。負陰とは。萬物は陰陽二氣を具足して居ると云ふ義也。負陰抱陽と分けて書くことは。調句成章と云ふもの也。韻に叶へたもの也。而も亦陰は背に屬す故に負と云ふ。陽は前に屬す故に抱と云ふなり。冲虚氣は陰陽の氣を云ふ。萬物のいき居人間の生き居るも。陰陽の氣が和合して調うて居る故。生きて居る也。二氣不和合。則乍ち病死するなれば。人身不養生なれば二氣不和合。不慎哉。養生の道を云ふ也。○人とは修行底を教ふる也。十分の場は必缺くる道理故。物の十分を嫌うて身を有つの法を示す也。○孤寡とは。天子などは十分の場に御坐あるなれば。身をくつがへすあふなき場に立たせらるゝなり。此の十分の場に立つて。自心を十分に用ふるときは必

缺くる也。故に其貴き十分の場をへり下りて。自ら稱して孤の寡の不穀のとの給ふこと也。是有身法と云ふもの也。○故物とは。十分すれば必缺の道理を云ふ。此一句。上の一句を結ぶ也。譬へば三日月は損の場に在る也。故に段々益す處の勢あり。十五日は益の場にあり。故に損の勢あり。なれば十分の場は惡みきらふべきもの也。益は十分の場。損は不十分の場也。王公は益の場を去り損の場に立ち給ふこと也。○人之所教とは。世上の師範となる徒を老子が評する也。世上の人の師と成つて教をなすものが。自ら云ふには我こそ義を以て教ふるぞ。不義は教へぬぞと云ふ也。然れども其所教皆不義也。なせなれば世儒の所教。皆勝つことを教ふる也。其のしようこは皆我云ふ處斗りをほめて。他をそしりてなんてもないものにするは。只勝つことを教ふると云ふものではないか。勝つことは即強梁也。強梁は必可死場では不死して。死ぬまじき地て死するものなり。南氏謂はく。子路が如きか。孔子も由者不得其死然と也。なれば強梁の場は争也。争は身を亡すの本也。老子自ら云ふ。我教をなさうならば。左様なことは教へまいぞ。強を去り弱を守り。不争の道を可教と也。さうして吾は教の宗匠となるべきとなり。父とは宗匠の義也。

天下之至柔章第四十三

天下之至柔。馳騁天下之至堅。無有入於無間。是以知無爲之有益也。不言之教。無爲之益。天下希及之矣。

○天下とは。極めて云ふ辭也。天下の間に柔物は多しと云へども。此中で至柔なるものはと云へば谷神也。なれば至柔と云ふは。名を云はずして暗に谷神を指す也。谷神は處によつて至剛にも成り。又至柔にも成る也。至堅は。先づ金石之類也。馳騁は。あたりさはりなくすらくとゆくこと也。譬へば谷神と云ふものは。向ふに銀山鐵壁ありと云うても。谷神はそこに至つて足よどみはせぬ也。なせなれば無形で虚なもの故。なんでもあたりさはりとなるものはなき也。○無有とは。此句で能くきこゆる也。無有とは無なり。谷神は虚にしてなきもの也。故に大象は無形と云ふ也。無間とは。密にしてすさまのないう物を云ふ。即金石銀山鐵壁のたぐひなり。谷神は無形にして虚物故。金石密しか中へも足よどみなくすらくと入る也。何でも障礙をするものはなき也。道家貴虚如此也。○是以とは。従つて無心而行無爲自然之道。則何でも障礙をするものはなき也。なれば物に障礙にせられぬときは。心自由にして樂しきなり。たとひ石のからとの中に居ると云うても。心の自由底を得る故。逍遙自得して樂む也。然るときは自ら長生する也。なれば無爲の行ほど益あるはなき也。是を莊子は逍遙遊と説きたり。谷神は無爲自然なもの也。なれば谷神を取失はぬ様に修行可爲ことなり。○不言教とは。無爲より出でたり。不言之教とは。目さへあけば。山の高さも谷の卑さも教にあらざると云ふ事なし。柳は綠花は紅。皆教にあらざると云ふ事なし。道の目が明かぬ故。其教たることを知らぬ也。なれば不言教無爲の益ほど。けつこうなもの天下になし。なれば他は皆外物なれば。不足行となり。

名與身章第四十四

名與身孰親 身與貨孰多 得與亡孰病 是故甚愛必
 大費 多藏必厚亡 知足不辱 知止不殆 可以長
 久

○此章。名貨の二句で世の名聞利心を戒め。下の三句で老子の家の道を示した也。○名與身とは。名聞の病は學者に有る者也。孰とは。此と彼とを並べて云ふ詞也。名は外より來る物にして外物也。身は己れに有るもの也。此名と身とは。己れに取りて孰れが己れに親しきものぞ。名は外物で我に疎きもの。身は屬己我に親しきもの也。然るに今學者外物の爲に身を捨つるは。どうしたことぞと也。學者の名聞を戒めたる也。○身與貨とは。世俗の利欲を戒めたる也。多とは。重き心也。即ち親しきと云ふ心也。互文格也。今世俗の我生身を捨てて。財貨を貪るを戒めた也。○得與亡とは。此の孰はなんぞとよむべし。何ぞ足らん心なり。得と亡とは。名と貨を指して云ふ也。名聞や財貨は外物なれば。得と云うても亡と云うても。何ぞ心を動し或は喜び或は病むに足るものぞと也。得ても亡つても心を病むに足ることではないとなり。○故甚とは。名の句を受けて云ふ也。名聞を甚愛し好むものは。生身を失ふ也。是即大に費ゆと云ふ者也。名聞は小なるもの。生身は大なるもの也。○多藏とは。此句は貨の句を受けて云ふ也。多藏とは。譬へば金をふやさん爲に利足金とかす類也。必本金までを損するもの也。皆欲心故也。○厚亡とは。大損する也。○知足とは。此より老子の道を示した也。足と云ふは。谷神の足のこと也。

富貴ノ足はまだ不足な處あり。足と云ふは百が百ながら缺けぬこと也。谷神の満足と云ふことを知れば。外に願はなし。求願あれば人體に不似合ことをなす者也。そこで辱を取る也。願が無きときは。人に辱めらるゝことはなき也。○知止とは。谷神を安宅として其に止るときは。名利に心を動すことなれば。身に禍を得ることもなく。一生不殆して。目出度長久なるべきこと也。然るときは随分谷神をとり失はぬ様に修行なすべしとなり。

大成若缺章第四十五

大成若缺 其用不敝 大盈若冲 其用不窮 大直若屈 大巧若拙 大辨若訥 躁勝 寒 靜勝 熱 清靜 爲天下正

○大成とは。大に成就したものはかけた様に見ゆるなり。なせなれば跡をあらはさぬ也。去れども大に成就仕たものなれば。用ひてみたときは。其用の究り敝ゆると云ふ事は無き也。○大盈とは。盈而若虚心也。上と一意也。若缺冲屈訥は不見跡事也。即ち和光のすがた也。皆一意也。○躁勝とは。躁は動の甚しき也。動は陽の精也。陽至極すれば寒となる也。○靜。火極つて似水。水極似火の論也。靜は陰の精也。言ふは情欲一偏して盛なれば。陰陽の氣不和の時也。又即情欲の盛なる時也。如此情欲勝つときは必病する也。皆欲心の致す所也。欲心多ければ長生不能也。清靜とは清淨無欲なこと也。釋氏も同じくとく也。落着異り。老子の清淨無欲也。畜の字に落ちて。長生不死の方に掛かる也。言ふは清淨無欲

は天下の正しき法りぢやと也。然れども皆清淨無欲の修行すべきこと也。道家養生の道也。

天下有道章第四十六

天下有道 却走馬以糞 天下無道 戎馬生於郊 罪莫大於可欲 禍莫大於不知足 咎莫大於欲得 故知不足之足常足

○天下とは。走馬は百千里の馬也。有道の世には千里の馬も貴びはせぬ也。追却けて田を耕す馬にする也。なせなれば有道の世は。人心無欲にして戦なき故也。無道の世には。兵馬野外にいくつも生るゝ也。其兵馬は即ち有道のときの走馬也。有道の世と無道の世とは。是ほど品が違ふ也。無道にして戦世なれば。馬一匹にして千金にも賣買する也。此れ貴ぶ故也。如此馬を貴ぶは。無道にして戦國なるの證也。其戦軍は皆欲心より出づる也。○故罪莫大と云ふは。禍と云ひ咎と云ひ。皆欲心を戒めた也。一意にして文異なる斗りなり。○不知足とは。即欲心也。禍は即おごるもの不久也。人の怨怒を含む故也。皆其本は不知足の欲心より致すこと也。咎とは欲得と云ふ皆欲也。譬へば戦の上で云へば。君欲心にして他國を合せんとすれば。親が軍に立てば子は孤となり。夫が戦に立てば婦はやもめとなり。子が軍に出づれば親は獨夫となりて難儀する也。此れ程の咎なことはなき也。皆欲心より出たこと也。○故知足とは。谷神の中には萬善全く具つて。何にも不足はなき也。此谷神の足る事を知つて。其れを足れりとするも

のは。常に富足つて不足ぢやと思ふことはなし。富貴は不足爲足也。故に富貴にあくことはなき也。欲心甚しきが故也。

不出戸章第四十七

不出戸知天下。不窺牖見天道。其出彌遠。其知彌少。是以聖人不行而知。不見而名。不爲而成。

○不出戸とは。居然として天下を知る也。どうして知るなれば天下の人心同じこと也。己れが所欲人亦欲す。己が不欲は人も亦惡む也。己が心を以て天下の心を計るときは。天下はねて居ても知る也。其故に聖王の政は能く天下の人心に合ふこと也。南氏不審して曰はく。聖王の時不出戸知天下。巡守之禮は何ぞや。答へて曰。老子は徳の上で云ふ。不出戸知天下之徳を以て巡守すれば天下太平也。必しも以巡守泥んで不可議老子也。○不窺牖とは。此一句は對して帶びて云ふ也。軽く見るべし。不出戸の一句を重く可見。主意は上の一句にあり。天道は。春は花咲き秋は實のる類也。此れは牖を披いて天をみざれども。自然とねて居て知る也。○其出彌遠其知彌少とは。最明寺を以て可知。天下のことを周ねく知らんとて日本を回國せられて。只經世一人を知つて召しかへされた也。外に經世より幾人かこんなう人のあらんけれども。只一人を知つて擧げたは。出ること遠く知ること少しと云ふもの也。堯舜の如きは居然として知り給ふ故。恩澤四表にあふれた也。最明寺は回國して。只一人を知つて澤を施す也。

不出して知るの人より見れば。最明寺の如きは下徳也。然れどもわるいと云ふことでは無きなり。見聞の人能々了簡して可見也。○是以聖人とは。不出戸知天下上の意也。不見而名とは。我徳をあらはして見せ給はねど。聖人と云ふ名を得給ふこと也。堯舜孔子は我こそ聖人よと教へられねども。聖人の名ある也。○不爲とは。無爲而無不爲也。成とは。萬物が生を遂げ功成就することなり。

爲學日益章第四十八

爲學日益。爲道日損。損之又損。以至於無爲。無爲而無不爲矣。故取天下者。常以無事。及其有事。不足以取天下。

○爲學とは。眞の學を云ふには非ず。今の世俗有爲之學也。今世俗が學をすれば。色々様々の事附益すること也。目には賢知耳には聰など出で。そこで欲と云ふもの出で。眞の道を害ふこと也。なれば世俗の今仁義の學などは。可爲ことではない也。釋氏も絶學無爲と説き。又文字不立など云うて。學をば嫌ふこと也。此章など釋氏に似たり。故に見あやまり落着の旨異也。扱老釋ともに學を嫌ふこと尤のこと也。其學の弊有れば也。學をすれば人我の相たくまじうなりて。宗旨争ひする也。此を甚だ惡んだもの也。○爲道とは。道は自然無爲の道也。眞の道をすれば。耳目に屬した所の知欲。皆損してなく成る也。故に日に損すと云ふ也。○損之とは。耳目などの欲が。損つた上に又損して無爲に入る也。此が道をする

の徳と云ふもの也。無爲は。一切の人我色相を離れた處也。そこは虚の場なり。釋氏も空と云ふ也。無爲無心則何でもせぬと云ふはないなり。譬へば天地無爲にして四時運行して。春は花咲き秋は實のる如き。皆無爲にして無不爲の處也。此意は前に多く出てたり。故に略之也。○故取天下者常以無事とは。無爲也。有事とは。有爲也。天下を取つて天下の主となるものは。無爲の道を以て天下の主と成つたものなり。有爲にしては中々天下を取つて天下の主とならぬ也。無爲にしてかき知欲なきときは。天下を取つて不欲して。天下の人が無理に天下をあたらふる也。然れば有爲の世俗の學などは可爲ことではなき也。取の字妙也。戰國の時にして。人の天下を取らんと争ふを眼前に見て。取の字を用ひたるなり。

老子經國字解卷三

聖人無常心章第四十九

聖人無^ハ常^ニ心^ト。以^テ百姓^ノ心^ヲ爲^ス心^ト。善^{ナル}者^ハ吾^モ亦^モ善^ニ之^ヲ。不善^{ナル}者^ハ吾^モ亦^モ不^レ善^ニ之^ヲ。善^ニ之^ヲ得^ルレバ^ハナリ。善^{ナル}矣。信^{アル}者^ハ吾^モ信^ニ之^ヲ。不^レ信^{アル}者^ハ吾^モ亦^モ不^レ信^ニ之^ヲ。得^ルレバ^ハナリ。信^{アル}矣。聖人之在^ルニ^テ天下^ニ。慄^{トシテ}慄^{トシテ}爲^ス天下^ノ渾^ニ心^ト。百姓皆注^ス其^ノ耳目^ヲ。聖人皆孩^{トス}之^ヲ。

○此章。養と教とを兼説いて。三寶の内慈の徳を述べたなり。聖人とは。徳位を兼ねた聖人也。孔子の如きは無位故。天下を治むることは不成也。○常心とは。我主とする心也。主を立つるは争の端也。而も相手が出る也。六字を主とすれば。七字と云ふ相手有つて争ふ也。故に萬人の主となりて世を治むる所の聖人は。我心と云ふはなきなり。萬人の心を以て我心となされて。我に主とする心はない也。此が眞の無心と云ふもの也。其無心と云へば。木石に異なることではない也。此段を以て無心と云ふを可知と也。○以百姓心爲心とは。己が欲する所は。百姓も又欲するなり。百姓の惡む所をば。われも亦惡む故。百姓の欲惡する所に従つて或は施し或は不施也。是れ百姓の心を以て我心とする也。是を以て天下能く

治まる。○善者とは。人は十人が十人まで善者也。而るに今孝あり忠あり信あるは。誰が善者になしたと云へば。我が教をなしてこれを善者になした也。○不善者とは。不善者と云うて棄てはおかぬ。吾亦これを教へて善者になすぞと也。どうして善者になすぞと云へば。本よりなきものを善者にするではなし。天下の人皆天より善を得て具足して居る也。其具足の善を以て其人を教ふる也。故に皆善者と成りなるぞと也。教へて善者となるは。善を人々天より受得て居る故ぞと也。竹を金になさうと云うても。本より竹に金を具足せぬ故ならぬこと也。上に立つ人聖徳にして教ふるときは。善者に不成と云ふことはなき也。故に堯舜の世には。比屋可封と云うた也。又中庸に以人教人と云ふ是也。○善者—信者—は一意也。得善と云ふ一句重き也。扱天下を治むと云ふは。政が第一に立つ也。先民を富ましておいて。そこで教を施したるもの也。貧にしては民行を務むるひまなきものなり。故に論語に曰はく。衆ある哉と云ふ。冉求の曰はく。又何を加へんと云へば。富之と云ひ。又何を加へんと云へば。教へんと答へ給ふ也。なれば民を養育するは教の下地也。故に政と云へば教へを含み。教と云へば政を含んで有る也。此も政教を兼ねて云ふ也。○聖人之とは。治教を兼ねて云ふ也。○僕々とは。奢りたかぶらせられぬこと也。天子は十分の場に在す故。孤と稱し寡と稱する類是也。○渾心とは。和光の姿也。なれば聖人の天下を治めらるゝは。少しも奢りたかぶり給ふこととはなき也。自稱しては孤などゝ云うて。我こそ聖徳の天子ぞと云ふ様なことは少しもなき也。百姓の心を我心と被成て。和光の姿となりて。無心にして天下を治めさせらるゝ也。○百姓—とは。聖人の言ひ給ふことは。一言と云へども手本と成る。故に民おろ

そかには聞かぬ也。とくと耳を付けて聞いて。そこで其れに法とりて善者となり信者となりたるもの也。聖人の行は。一行も手本となる故に。民目を付けて望之也。一意也。聖人は其民をすてられぬ。孩童の如く養ひ教へさせらるゝこと也。赤子を安んずる如く百姓を成さるゝと也。此結句も治教を兼ねて可見。

出生入死章第五十

出^ブ生^キ。入^レ死^ス。生^ノ之^レ徒^ヒ十^有三[。]死^ノ之^レ徒^ヒ十^有三[。]民^ノ之^レ生^動。之^レ死^ニ地^ニ。亦^十有^三。夫^レ何^レ故^ゾ。以^テ其^ノ生^ト生^ノ之^レ厚^キ。蓋^シ聞^ク善^ク攝^ル生^ヲ者^ハ。陸^ニ行^キ不^レ遇^ニ兕^ノ虎[。]入^レ軍^ニ不^レ被^ニ甲^ノ兵[。]兕^モ無^レ所^レ投^ニ其^ノ角[。]虎^モ無^レ所^レ措^ニ其^ノ爪[。]兵^モ無^レ所^レ容^ニ其^ノ刃[。]夫^レ何^レ故^ゾ。以^テ其^ノ無^ニ死^ニ地[。]焉[。]

○此章。齋の一字を云ふ也。首の二句尤重き也。長生の道に掛かる也。出とは。悟つて明なる處へ出たこと也。入るとは。迷うて昏に入ること也。六根の邪知を離出たときは。心氣を遣ふことはなき也。人は氣で生きて居る也。氣がへることなきときは。自然と長生する筈也。六根の知欲に迷ひ入つて居るときは。知欲の爲に心氣を遣ふ故。終には死んでしまふこと也。○生之とは。十有三は人の全體を擧げて云ふ也。九竅は關合せて十三と云ふに不可泥。只人の全體を止めて云ふ也。人の體には知欲有るもの也。なれば長生するも此知欲の上にあること。又若死するも此知欲の上にあるぞと也。なせなれば形に屬し

た所の知欲を脱出して。六根性を得て氣を不遣ときは生きる也。入つたときは死すと也。なれば只生と云ふも知欲のあつかひやう。死すと云ふも知欲にあづかることなれば。其れをよくわきまへよと也。○民之生とは。動の字をやゝもすればとよむときは虚字也。此は實にして。動く可讀。觸の義也。此では生を略して。重き死斗りを上げた也。民の生涯やゝもすれば死地に赴く也。とかく物に觸れ動くと。早死地に赴く也。其は何故ぞ。一身の邪知邪欲の爲に然る也。耳目の欲知を離れて。耳目の觸るゝ處の爲に心を不遣ときは。死地に之くことはないなり。○夫何故とは。自問自答格也。之死地はどうしたとぞと云へば。生を生とするの厚きぢやと也。生生とは。下の生は。生きた身のこと也。上の生は。生きた身をいかさうとて養生すること也。虚字實字のわけある也。厚とは。養生すること也。今世上富限者養生する者を以て可見。長生せんとして。薬ぐひ又はさまざまの類を用ふる也。此れ厚と云ふもの也。其の厚と云へば。養生喰などする人は。唯は不居もの也。或は酒色にふけり夜戦を過すもの也。なれば生、生厚きものは皆欲心から也。故に死地に之くぞと也。○蓋聞とは。能く養生して長生するものは。左様なことではなき也。無心を以て長生すると也。○陸行とは。兎は。野牛とて一角の獸也。人を害ふ也。善長生者一人深山へ行くと云うても。兎虎の難に不遇也。なせなれば無心故。先きも化せられて無心なる故也。○入軍とは。一意也。兎無投とは。上に不遇と云ふは。兎虎には遇へども其難にはあはずと云ふことなり。此段は谷神の威光を合せて解く也。無心なれば兎虎兵も害すること不成也。なせと云へば谷神實する也。其谷神の威光におそれて。害をなすこと不成也。無心に化せらるゝ故也。○夫何とは。兵兎虎の害することないと云ふはどうしたことなれば。此方が無知無心無欲故。死地がなき也。兵兎虎も化せられて無心なるときは。其人を害することなき也。故に無死地と云ふ也。無心なれば谷神實なり。谷神實するときは長生する也。

道生之章第五十一

道生^レ之^ヲ。德畜^レ之^ヲ。物形^レ之^ヲ。勢成^レ之^ヲ。是以萬物莫^レ不^ニ尊^{シテ}道^ヲ而^{シテ}貴^ニ。道^ノ之^ヲ尊^キ。德^ノ之^ヲ貴^キ。夫莫^ニ之^ヲ命^{ズルコト}。而常^ニ自然^{アリ}。故^ニ道生^レ之^ヲ。畜^レ之^ヲ。長^レ之^ヲ育^ミ之^ヲ。成^レ之^ヲ熟^{クシ}之^ヲ。養^レ之^ヲ覆^フ之^ヲ。生^レ而^{シテ}不^レ有^ク。爲^{シテ}不^レ恃^マ。長^{シテ}而^{シテ}不^レ宰^ラ。是^ヲ謂^フ之^ヲ玄德^ト。

○谷神之本然で云ふ章也。此本文に法れば。自ら聖人也。○道生之とは、道は。谷神の字。之とは。天地萬物皆谷神より生るゝ也。徳とは。谷神の恩徳也。畜は。養也。寒暖雨露皆谷神の恩澤也。萬物は其恩徳を以て成長する也。なれば谷神恩徳を普施して。萬物を養育しそだつると也。○物形之とは。一物あれば其一物に其形を與ふる也。皆谷神のなす所也。○勢とは。彼と此と一物對するを勢と云ふ也。物と云ふものは一方斗りでは成就せぬもの也。譬へば天あれども地なきときは。萬物成就せぬ也。他は推して可知。されば兩方調うて其れにて萬物成就するは。皆谷神の妙用にして。自然の道理也。此勢を

以て萬物成就なましめたもの也。○是以とは。萬物皆谷神の德澤を蒙つて生ずることなれば。此れを貴ばぬものは。天下に一物もないと也。○道之貴とは。道德の貴尊なるはどうしたことなれば。此方より角せよと云付けねども。自然とさうある所で貴き也。春花夏緑皆云付けることはなくして然る也。四時運行して萬物を成就する。皆命ずることはなき也。是を以て貴しとする也。なれば無爲自然の貴きを云ふ故。道とは如此無爲自然にして貴き故。能く萬物を生畜長育成熟養覆する也。覆とは。鶏卵をあたゝむる如く。谷神が萬物を覆うてそだつる也。即ち仁の德也。○生畜とは。皆覆ふと云ふもの也。生而とは。每章此意出たり故略之。長として而とは。谷神は萬物の長なれども。主宰となる所の心はなく無心也。是謂とは。如此谷神の德は。無爲自然にして貴きものなれば。心詞筆にも名付け云ふべきやうはなき也。故に此を玄微妙の德と云ふぞと也。

天下有始章第五十二

天下有^レ始。以^テ爲^ニ天下ノ母。既^ニ得^ニ其母。以^テ知^ニ其子。既^ニ知^ニ其子。復^ニ守^ニ其母。沒^レ身不^レ殆。塞^ニ其兌。閉^ニ其門。終^レ身不^レ勤。開^ニ其兌。濟^ニ其事。終^レ身不^レ救。見^ニ小曰明。守^ニ柔曰強。用^ニ其光。復^ニ歸。其明。無^レ遺。身殃。是^ニ謂^ニ襲常。

○天下とは。始の字至て重き也。谷神を指して云ふ也。なぜ始と云ふなれば、道と斗り云うては。谷神は何物ぞと云ふことを人が知らざる故。知らせん爲也。谷神と云ふものは。天地萬物の根となるものなり。萬物皆谷神より始まる故。谷神を始と云ふ也。天下と云ふは。極めた詞にして。一切物をのこさぬ詞也。母は。由つて出る處也。天下の萬物は。天地を始めて此谷神より生せぬと云ふことなきなり。なれば谷神は一大母と云ふもの也。天地も此より生ずる也。○既得とは。悟つて知ること也。人皆此谷神こそ萬物の母ぢやと云ふことを知つたときは。天地萬物は皆子ぢやと云ふことを知る也。○既知とは。谷神が一大母たるゆゑんを知り。萬物が皆子たる所以を知つたならば。其一大母たる谷神身を離れずして不失。能く我身に守り有つときは。言行皆道にあたらぬと云ふことは無し。言行皆道理に不逆。則此身に於て何んでも禍を取ることなき也。一生安穩にして居るぞとなり。○塞とは。只六根の中の一也。口をあげて六根を該ねて云ふ也。門と云ふは。耳目は人の門のやうなもの也。其の耳目には聰明の邪知がある也。勤は。勞也。言ふは六根の六欲を塞いで邪欲を制して不入。耳目の聰明の邪知を閉ぢて不用。無知無欲になる故。なんでも心を勤勞することはなき也。心氣を遣はぬときは。自ら長生也。即ち齋の受用也。知欲ほど心氣を遣ふものはなき也。每章に此意あり。故に略之。開其兌とは。上の塞一の一句を受けて云ふ。可見閉其と云ふ句は韻に不叶。故に略す。二句ともに入れて可見。言ふは塞いだ處の六根の欲を開いて欲心を動し。閉ぢた處の聰明の知を出して萬事をなせば。殊の外心氣を勤勞して身に禍を得る也。それはどうも不救と也。故に邪知邪欲を去つて身を有つやうに可爲と也。○見小とは。

譬へば常に大海を見る目で。淀河などの水ますを見たふんでは。少々なことと見る也。其の如く大道の目よりして見るときは。天下の物が小に見ゆる筈也。其天下の物を小に見るが。眞の明と云ふもの也。道に目の明いたものゝこと也。天下に道程大きなものはなき也。○守柔一とは。不爭の徳也。前に此意多く出でたり。故に略之。○用其光とは。和光同塵の姿也。光りは外へあらはれたるほの光り也。明は。内心の眞の徳光也。和らげ隠して眞の明に復歸して。谷神をきつと守つて不失ときは。一生身に禍をのこすことはなき也。故に亂世に其の光を見はず。故に身自ら殃を得るぞと也。是一とは。襲常とは。和光の姿也。襲は。光をかくしてあらはさぬこと也。常は。谷神也。谷神は千古不易のものなれば也。和光の姿と成つて光をあらはさず。常道を守つて居るときは。身に殃はない。是を襲常と云ふぞとなり。

使我介然章第五十三

使我介然有知。行於大道。唯施是畏。大道甚夷。而民好徑。朝甚除。田甚蕪。倉甚虛。服文采。帶利劍。厭飲食。資財有餘。是謂盜誇。非道哉。

○使我一とは。林氏の黠なれば。使我介然有知とよむ也。大に非也。言ふは我一は老子自ら云ふ也。介然は。大也。老子謙退の詞也。言ふは我は一文不通のものなるが。若し大にもの知ること有つて。大道を行はしめうならば。只無爲自然の道を以て行つて。世を治むべきぞ。今の仁義禮樂のやうな有爲の累

を施行ふことは。畏れ避けて行ふまいぞと也。○大道甚一とは。此大道は人の往來の街道のこと也。徑は。近路也。往還の大道は平夷にして。往來するに何のなんぎなこともなく。禍あることもなき也。而るを今の人此大道を捨て。いばらからたちの多き徑を好んであるく也。故に禍を取ることぞと也。言ふは無爲自然の大道を行ふときは。終身不殆也。然るをわづかな利をみて有爲の道を行ふ故に。禍終身不救と也。○朝甚除とは。朝廷の家形などを結構に立て金銀をちりばめて。上に奢る。此の如く上たる人誇る故。下民は人歩に使はれて。田地を耕すひまもなき也。故に田地甚だ蕪れる。田地が蕪れる故。下民より生り物を納むることもすくないこと也。故に公儀の倉廩が空しくなる也。君の倉廩は民の飢を爲す救也。それが虚倉なるときは。下民の飢えたとき可救様なき也。此皆上の人君の奢りから起つたこと也。其上君は不及言。公卿大夫に至るまで。身にはりようらきんしうの文采の衣服をきて奢り。一振にて千金もする利劍を帶し。口には七五三の様な結構なる飲食あきたるほど喰ひ。金銀の如き資財をば。我一人のものとして上へ取上げて餘る程ある也。是皆下民のあぶらをこそげてとる様なもの也。故に公の倉廩虚しき也。如此上に斗り奢りを究めて居るは。手のよい盗人と云ふもの也。總じて我こそ能く天下を治めるなど云ふは。十俵年貢を取る所より百俵も取りなどするは。盗人の盗を好くなして自ら誇る様なもの也。さりとは非道なことぞと歎じて云ふ也。戦國の諸侯皆此れ也。皆欲心より起つたことなれば。如此云ふて戒めたもの也。

善建不拔章第五十四

善建者不拔。善抱者不脫。子孫以祭祀不輟。修之身。其德乃真。修之家。其德乃餘。修之鄉。其德乃長。修之國。其德乃豐。修之天下。其德乃普。故以身觀身。以家觀家。以鄉觀鄉。以國觀國。以天下觀天下。吾何以知天下之然哉。以此。

○善建とは。此二句借喻也。人力を以て建てたものは。抜くことなる也。人力で抱いたものは。打落すことなる也。彼の谷神の徳を建て抱くをば。何としても拔落すことはならぬ也。其れにて長久也。○子孫とは。長久の喻也。子孫の家有るものは。何代も先祖の祭をなして不輟長久也。此谷神の徳有るもの。長久長生するなり。○修之とは。此谷神の徳を我れ修すれば。其徳真物也。○修之家とは。皆一意なり。餘とは。あまんの目出度きこと也。易經曰。積善の家には有餘慶と同じこと也。長とは。谷神の徳有る人は一郷の長となる也。前に此意あり。豊とは。恩澤及ぶ故也。普とは。のこさぬこと也。堯の徳を稱して其光蒙四表と云ふ是也。○故以身とは。すなはちわが身をもつて我身を見れば。谷神の徳を修する故。其徳真也。此の谷神を修めた處で。其の天下を見れば。普く四表に及んで其徳を蒙る也。○我何以

天下如此なると云ふことを知つたなれば。此谷神の徳を以てのことぞと也。天下とは。上の身と云ふより天下はと云ふまでを合せて云ふ也。天下は。究めた詞也。天下皆此谷神にあらずと云ふことは無きなり。

含徳之厚章第五十五

含徳之厚。比於赤子。毒蟲不螫。猛獸不據。擢鳥不搏。骨弱筋柔。而握固。未知牝牡之合。而峻作。精之至也。終日號而嗷不噉。和之至也。知和曰常。知常曰明。益生曰祥。心使氣曰強。物壯則老。是謂不道。不道早已。

○此章。道家齋の受用にして肝要の章也。含は。含養と云ふこと也。此谷神の徳を含み。養之至極と云ふ義也。赤子は六根有りて六根の欲なき也。此谷神の徳を厚く養ふものは。無心にして赤子の如き故。能く長生する也。無知無欲で無我なるときは。然るはず也。○毒とは。此方の無心に化せられて。物無心に成る故に。害することなきを云ふ也。無心なれば禍を得ることなく。能く全う身を有つと云ふ義也。○骨弱とは。赤子の如此ことは元氣厚き也。此れが本かと云ふもの也。谷神の徳を修するものは。無知欲故元氣全く。何日までもわか／＼として居る也。無知欲心氣を不遣ときは。元氣の全くするを云

ふ。元氣全ければ長生する也。人の死するは元氣衰ふる故也。○未知—とは。鯨は。いのち延びること也。即玉莖のことなり。男女の交のわけをも知らずして。久しく赤子の玉莖のをへるは。精氣至極なる故也。弱き者は作ることなき也。谷神を修する人の。赤子の如く無心にして元氣の盛なるを云ふ。○終日—嘔とは。聲のかれてわかるゝこと也。人丹田の火がたかぶりて。水氣を枯らすときは。聲自ら枯るゝもの也。赤子は淫欲なく。丹田の火伏して陰陽の氣中和して。うるほひ不枯故。終日啼いても聲のかれの咎也。谷神を修する人如此也。老子養生の方故。如此の論ある也。○知和—とは。上を受けて云ふ。此和氣の道理を知りたるときは。藐姑射の神人の如く。數千歳経ても處女の如くにして千古不易也。此を常と云ふ。此の千古不易の常の理を知りたるが。本の道に眼の明たる人と云ふ。故に明と云ふ也。○益生—とは。祥は吉凶に通じて云ふ。此は禍のこと也。言ふは五十章の生生之厚と云ふ是也。故に略之。○心使氣。此一句尤重く。老子一部に掛かる也。心とは。知欲を該ねて云ふ也。強は。木などの枯れ強りたること也。知欲を以て氣を使ふときは。氣が散じて死する也。赤子の如きは。無知欲故元氣全き也。故に骨柔くて握り指が固い也。柳の枝しなへる故。折るゝ所の禍はなき如し。心氣を使うて元氣衰散するときは。木の枝の枯れて強るが如くにして折れやすき也。此を強と云ふ。養生學家なれば。心使氣を強と云ふものぢやと云うて。戒め示したるもの也。此強字。上の弱柔の字に對して可見と也。○物壯—とは。月盈つれば必缺けると云ふ意也。道家は盈つることを嫌ふ也。前に度々此意あり。是の字。○按に益生と云ふより以下の三句のことなるべし。

知者不言章第五十六

知者不言。言者不知。塞其兌。閉其門。挫其銳。解其紛。和其光。同其塵。是謂玄同。不可得而親。不可得而疏。不可得而利。不可得而害。不可得而貴。不可得而賤。故爲天下貴。

○知者とは。道と言ふときは第二義に落ちる也。不二法門と云ふ是也。此意前に出でたり。○塞其—同其塵と云ふまでは。上巻に出でたる句也。亂世有身之法也。○玄同とは。今の徳は四分五裂して。彼此のへだてあり。眞の徳は平等一枚にして。彼此の間はなき也。此境界に成得た人は。一切の相を離れたる故。外より手を指すこと不成もの也。そこを不可賤と云ふ。○故爲天下貴とは。一切の相を離れたる有徳の人なれば。天下に双ぶものはないと也。釋氏の天上天下唯我獨尊と云ふ是也。

以正治國章第五十七

以正治國。以奇用兵。以無事取天下。吾何以知其然哉。以此。夫天下多忌諱。而民彌貧。人多利器。國家滋昏。民多技巧。奇物滋起。法令滋彰。盜賊多有。故聖人云。我無

爲^レ而民自化^レ。我好^レ靜^ヲ而民自正^シ。我無^レ事^ヲ而民自富^シ。我無^レ欲^{スル}而民自樸^{ナリ}。

○以正—とは。此二句は善と惡とをならべて云ふ。教の法也。以正の句は善也。以奇の句は惡也。正とは。老莊は自然の法を云ふ。此の自然の法を以て治むるときは。國治まる。兵を用ふるには。奇術のおそろしき謀略を以て用ふるぞ。是は惡事也。如此謀略を以て兵を用ふることなどは。皆自然の法でなき故。天下を治むることは不成ぞと也。○以無事とは。知欲を去り萬事無事なるときは。天下の人多く我に歸すること也。天下の主たらんことを不欲して。自ら天下を取るはずなり。此意前に出でたり。どうしてさうなるぞと云ふことを知れば。これ谷神の徳なり。谷神の徳といふものは。無爲自然なもの也。此無爲自然の徳を以て施すときは。自ら天下を得る筈也。○夫天下—忌諱とは。今の法度也。上一人奢りを究める故。或は山河に札を立て。此山河の物を不可取。君の殺生なさるゝ處ぢやなど、云ふは。上一人の奢りと云ふもの也。故に下民は。禁札多ければいよゝ貧になる也。小人窮すれば盜をなす也。盜をなせば刑罪して。國中さわがしく治まるゝことはなし。皆上一人よりなさるゝことぞと也。○多—とは。利使器之水車の類なり。人力を不用して用を達するは。利使と云ふもの也。此利器の多いと云ふは。皆知より出づる也。そこで老子のきらふ也。かやうに人の知のかしこくなるときは。心知真知がいよいよ昏く成ると也。○民多とは。技巧は。おそろしき巧の知也。奇物は。今かふる屏風の類なり。人形四

つを作つて。其れに扇を持たせて茶の火などをあふがする也。如此民か技巧多き時は。さまざま奇物出で。後は禍を生ずる者也。皆知をばおさへて老子如此云ふ。○法令—とは。上の多忌諱と云ふ義也。法度號令多く。民貧しく。そこで盜をなす。本と民は盜をすることは欲せぬなり。父母妻子を可養様なき故也。これによつて見れば。皆人君の咎と云ふもの也。○故聖人—我とは。皆人君に掛かる也。無爲は。無知無欲也。而も亦無不爲也。四時の行はるゝが如き也。此無爲の徳に化して。民も無知無欲也。○好靜とは。動と云ふもの。本知欲よりして心動く也。知欲を去つて靜を好ませらるゝときは。民其れに化して自ら正しうなる也。○無事—は。人君無知欲而無事なるときは。放禁なき也。そこで民が富むとは。金銀を多く持つことではなき也。耕して食ひ織つて衣て。飢えず寒えぬことなり。文王の園は方七十里。民せましと云ふ意。合せて可見也。宣王の園は方四十里。民廣しと云ふ。此れ人君の無欲有欲にあづかること也。人君知欲なければ。民自ら化して其模様かうとうにして。内心は混然たる徳を全うすること也。此れ樸は外見分けて云へども。無欲無知を以て解けば。内心元氣厚く養生にも掛かること也。欲と云へば。知を兼ねて云ふ也。

其政悶悶章第五十八

其政悶悶^{タラハ}。其民醇醇^カ。其政察察^{タラハ}。其民缺缺^{タラハ}。禍兮福所倚^ル。福兮禍所伏^ル。孰知^ニ其極^ヲ。其無^レ正^ナ邪^ナ。正復爲^レ奇^ト。善復爲^レ妖^ト。民之

迷。其日固已久矣。是以聖人方而不割。廉而不刺。直而不肆。光而不耀。

○其政悶々とは。無知の貌也。醇々とは。酒のこい如く。風俗厚き也。上に民自樸と云ふ義也。なれば無爲の政を云ふ。其缺々とは。上の民彌貧と云ふと同じこと也。有爲の政を云ふ也。民缺々たるときは。自ら盜をなすぞと也。○禍兮福とは。老子の此意は。人禍福の爲に心を動す。そこを戒めた也。○孰知とは。禍福互に相倚つて。千古極りなき者也。如此禍福さだまらぬことなるに。其禍福のたびごとに心を動ずると云ふは。有ることできなきとなり。正善なことは乍ち奇妖となる。奇妖は又正善となる世の中なれば。毎度心を動すは方々しいことぞと也。兎角禍福のわぬけをすれば。自ら長生するぞと也。○民迷とは。如是定めなき禍福に迷うて居ることは。今始めてのことではなし。天地開けてより民が迷うて。禍福に心を動すと也。○是以とは。谷神の徳は方正なるものなれども。其徳をあらはさぬ故。禍を不取也。そこをけづらずと云ふ也。以下も皆和光の姿なり。廉も直も。谷神の徳を稱して云ふ。○不肆とは。直徳を述あらはさぬこと也。○光と云ふも。和光同塵の意也。亂世に身を有つ法を教ふる也。

治人事天章第五十九

治人事天。莫如嗇。夫惟嗇。是以早復。早復謂之重積。

德重積。德則無不克。無不克。則莫知其極。莫知其極。可以有國。有國之母。可以長久。是謂深根固柢。長生久視之道。

○治人とは。治人は政を以てする也。○事天とは。天より己に受得た道を不失して守るは。即ち事天と云ふもの也。なれば政を以て民を治め天に事ふるには。此嗇ほどのものはなき也。嗇は。無知無欲にして心氣を不遣が嗇也。此嗇を以てするときは。上無欲故民富んで治まり。天より受けた處の道も不失也。毎々嗇の受用と云ふ。此章の文字也。○夫惟とは。此嗇を以て無知無欲になる故。早々谷神の混然たる處へ歸る也。此本然の谷神へ立復り得た處を。重積徳と云ふ。重積徳とは。いよ／＼つひ谷神の徳と云ふ義也。此積徳の境界に成つてからは。有徳の君子也。なれば何でも手に餘るものはなき也。廣く萬事に應ずる也。故に無不克と云ふ也。此無不克の境界からは。其の應極まることはなき也。此までと云ふことはなき也。其極を不知處に至つてからは。有徳の君子と云ふはおろかなことなり。そこでは萬民歸する故。國を有つ筈也。母は谷神也。如此國を有つほどの谷神の徳なれば。無知無欲にして心不遣氣故。自ら長生する筈也。○是謂とは。樹木は根を深く土かふときは久しく有ちて。花は蒂が堅ければ久しく花を有つもの也。其ごとく此の嗇の受用を以て。谷神の根蒂へ深固に土かふときは。自ら長生する也。如此するが長生久視の道ちやと也。久視とは。長生の效を云ふ。赤子の物を見るは。久しく見

て目たゝきなきは。元氣全うして目の性強き故也。畜を受用する人は。元氣全き故久視するぞと也。長生の人の效を云うた者也。柢の字。蕃の字の誤りならん。

治大國章第六十

治大國。若烹小鮮。以道蒞天下。其鬼不神。非其鬼不神。其神不傷人。非其神不傷人。聖人亦不傷人。夫兩不相傷。故德交歸焉。

○此一句は借喻也。以道と云ふより實意也。小鮮は。小魚也。氣のせはしきものに小魚を煮さすやうなもの也。なぜなれば毎々かきまはして。くだいて仕まふ也。○以道とは。蒞は。上に居て下をのぞむこと也。鬼とは。化氣ものゝこと也。神とは。神妙ふしぎをあらはして人などを化氣すること也。人君眞の道を以て天下を治むるときは。民皆道理を合點して。其心の明なること白晝の如しと也。然るときは狐狸の類も。様々の神妙を見はして人を化氣すことは不成なり。鬼の人を化氣すは。暗に依つたもの也。心が昏ければ化氣さるゝ者也。故に夜る斗り人を化氣すもの也。底意は人君道を行ひ給ふときは。小人上をあざむくこと不成に比す。堯舜の時終に君を僞つたものはなき也。○其神とは。不神は虛字也。其神は實字。神明のことなり。惡人多ければ。其惡人には神明は罪を與へて。人をやぶるもの也。人君道を行ひ給ふ故。下も化して無道なものは一人もなき也。皆善人故。神明人をやぶり給ふことなき也。○聖人

とは。聖人には五刑の罪をそなへて下を治め給ふ也。有道の御代なれば。惡人はなき也。故に五刑を以て人を傷り給ふことはない筈也。○夫兩とは。人々道を行ふ故。神明聖人兩ながら其人を傷り給ふこととはなき也。角仕たる我故。天下の徳皆交々道に歸るとなり。

大國者下流章第六十一

大國者下流。天下之交。天下之牝。牝常以靜勝牡。以靜爲下。故大國以下小國。則取小國。小國以下大國。則取大國。故或下以取。或下而取。大國不過欲兼畜人。小國不過欲入事人。夫兩者各得其所欲。故大者宜爲下。

○大國とは。澤は下流にあり。故に衆水の王になる也。其の如く大國の君は下流の場に居るときは。天下の人歸服する也。下流とは。人君の自稱して孤寡と云ふ類也。交は。多く人のつどひ集まる義也。牝は不爭勝の義を云ふ。不爭の徳を述べたる也。俗に云ふ不拔太刀の功名也。○按するに。交は。衆人の歸する處よりして云ひ。牝とは。不爭勝つ處よりして云ふか。○牝常とは。勝とは。力を以て勝つもの義ではなし。牝とは。めげだものにして。靜にして柔弱なもの也。牡は。をげだもの。動いて剛強故や

ふれを取る也。言ふは柔弱にしてやぶれを取ば。強にして禍をとるには大にましたことぞと也。不爭の徳の上を云ふ。○以静とは。如此なれば全く身を有つ者也。是不爭の徳也。戰國の諸侯を戒め給ふ。○故大國とは。取るとは。奪つて取ることにはなきなり。小國の歸服する處で云ふ。大國の君ちやと云うて。小國に無禮をなすときは。小國やせがほ出して歸服せぬもの也。大蛇小蛇の争となりて。互にやぶれを取るものなり。○小國―とは。取らるとは。能く受入らるゝこと也。棄てるに對して取らると可見。小國が大國に無禮なれば。すてらるゝか又はうたるゝもの也。能く下るときは大國喜んで惠を施す。是れとらると云ふもの也。大國―小國とは。大國と小國の欲する處を云ふなり。○夫兩―とは互に下つて不爭ときは。小國も大國も本意を遂ぐるものぞと也。○故大―とは。小を兼ねて云ふ也。小國も下ることをすれば。欲し願ふ處を得るものぞと也。

道者萬物之奧章第六十二

道者。萬物之奧。善人之寶。不善人之所保。美言可以市。尊行可以加。人之不善。何棄之有。故立天子。置三公。雖有拱璧以先駟馬。不如坐進此道。古之所以貴此道者何也。不日求以得。有罪以免邪。故為天下貴。

○奧とは。屋の西南の隅をくらうして貴き處也。言ふは道は萬物の中で貴き至りのものちやと也。善人とは。不善人は悪人を言ふにあらず。愚不肖なものゝこと也。此道を善人たる人は至寶として貴ぶ也。又愚者ちやと云うても。我身に天より受得て保つて居るぞと也。○美言―とは。此句は張本。尊行―の句は實意也。商人物を賣るときは。其賣物を稱美して人に賣つてやるなり。其の如く一郷に於て有道にして尊行有る人をば。郷人は是を推貴んで。かりそめにも下座などにはおかず。人の上座に置く也。其尊行ある人を推貴ぶ處より見れば。人の善は善と知つて居る也。是れ人の性は本善なるもの故也。なれば愚不肖な人ちやと云うて。捨て置くはずではなし。教を施して善を可進ぞと也。其故に上古より上には天子と云ふを立て。三公などゝ云ふを立てるは。下民に教をなさん爲に立て置いたものぞと也。なれば人々善を具へたと云ふことはなき也。道は己に具つてをるぞと也。○雖有―とは。拱璧は。諸侯の互の使者杯のとき用ふる玉也。わたり一尺斗りにして圓なものちやと也。日本の太刀折紙と同じこと也。駟馬は。賢者を迎へるの四馬也。先とは迎をやらぬさきに内證を聞きに遣ること也。言ふは賢者を招いて我師範として。其賢者より道を聞かん爲に。太刀折紙などで駟馬に先だつて。何と私の國へ御出被成て道をも説いて聞かせて下されと云ふよりは。坐ら我に有道を求めて進むにはをとりちやと也。言ふは道は外に求めるものでなし。我に固有のものなれば。己れに求めよと也。○古之とは自問自答也。此句は問也。○不日―とは答也。道の貴きわけは。道は求めさへすれば得るものなれば。これによるときは。無量の罪ありとも免ると云うてあいたではないか。すればこそ貴いと也。求めても不得。又善心起つても。其

罪まぬかれぬものならば。道は貴いと云ふものとは云はれぬぞと也。右の子細故天下に貴いと成つて有るぞと也。釋氏彌陀の名號を唱ふるときは。無量の罪業を滅すと云へり。文勢同事也。

爲無爲章第六十二

爲無爲。事無事。味無味。大小多少。報怨以德。圖難於其易。爲大於其細。天下難事。必作於易。天下大事。必作於細。是以聖人終不爲大。故能成其大。夫輕諾必寡信。多易必多難。是以聖人猶難之。故終無難。

○此の章。畢竟は齎の受用に落つる也。爲無爲事無事とは。此意每章出る也。味無味とは。色相を離れて無味なもの也。其を味ふ處が本の味ふと云ふもの也。○大小多少とは。聖人は大道を見て居る故。天下の物を小少と見る也。道ほど大多なものはない故也。○報怨とは。此語は聖門で尤嫌ふことなり。日本俗語に怨は恩で報するがよいと云ふは。此より出でたり。道家の私言なり。老子は身をかばふ方故に如此云ふ也。○圖難とは。修養に掛かる也。聖人は爲事を。先づ易事細事からくはだて。難大の事も成就すること也。如此則不勞功成也。首めから難大な事に掛れば。勞して功なきもの也。其勞甚しきときは短命す。○天下とは。難事と大事とは。上の難大の字義と異也。難事は。災難のこと也。大事

も。洛中洛外までも動す大事をし出かすこと也。易は輕易と云うて。あなどりたやすく思ふこと也。災難と云ふものは。事をあなどり何んのと云うてたやすく思ふ故。大災難出るぞと也。其時心をくらしむることしるべし。是短命の端也。○大事とは。其意上と同事なり。草戦の後は石戦。其後眞劍を以て戦ふ類也。是皆慎みないからのこと也。○是以とは。不爲大とは。聖人は量廣きなり。故に何を見ても大となされぬぞと也。故に此氣量なれば天下の大事を成就なされうぞと也。○夫輕とは。我がなることも又ならぬことも。義に於てせまじきことも。人に頼まれてなるほど云ふ類は。其場に臨んで行ふこと不成もの也。是れ信が少なき人なり。其場で行うてみても。我任に勝へたことなれば。不成ときは其心苦勞可知也。短命の基なり。○多易とは。難事作易義也。あまり事をたやすく思ふてあなどれば。なんぎに及ぶこと多い者ぞと也。如此我故聖人はそうと仕たことでも。難んじて之を慎み給ふ也。其故終に難義に及ぶことはいざと也。

其安易持章第六十四

其安易持。其未兆易謀。其脆易破。其微易散。爲之於未。有治之於未。亂合抱之木。生於毫末。九層之臺。起於累土。千里之行。始於足下。爲者敗之。執者失之。聖人無爲。故無敗。無執。故無失。民之從事。常於幾成而敗之。慎

終如始。則無敗事。是以聖人欲不欲。不貴難得之貨。學不學。復衆人之所過。以輔萬物之自然。而不致爲。

○總じて平安無事なるときは。事が持ち易きもの也。其事の兆のないときには。談今として治めやすい也。已に事少なりとも。兆してからはどうもならぬなり。とかくことのない内を能く慎めと也。○其脆とは。譬へば腫物の類もあまり大きに不成中に。脆くやはらかなとき膏藥など付ければ。破れて早くいゆる也。又は少しくむくみなどの内は。引藥など付ければ。其むくみ散つてなほるものも。已にかうしてからは療治不叶ことあるぞと也。○爲之とは。無事の時に其事をなし。不亂のときに治むれば。心勞せずして治まるぞと也。此までが借喻也。膏の受用を云ふ也。今の人は大事になりてから何角とする故。心を勞して無功短命を致すぞと也。○合抱とは。兩手を以て廻すほどの大木も。毫末ほどの苗の時からそだつ也。大木と成つてから。田畠などの害に成ると云うても。切りすてられぬものなり。又は畠などがいたむ故也。なれば其始に於て可慎ことぞと也。皆借喻なり。下の句一意也。○爲者とは。此より實事を云ふ也。欲心にして爲にするものは必敗をとり。欲心有つてとるものをば。天も惡み給ふ處なれば失ふこと也。なれば有爲と云ふものはあしきは是なり。聖人は無心にして無爲也。故に敗失の患はないなり。民萬事をなすに。事のきざしを見れば成就する勢なり。しかるを敗れて仕損ずるは。欲心からなり。○慎終とは。終りあること難しと云ふ是なり。始の如くにさへ慎むときは。敗をとることはないぞ

となり。○是以とは。欲を不學を不學。復衆人之所過の無爲自然の道を指して云ふ。常人は皆此道をやば捨て不取也。聖人は其無爲の道に立歸りて。萬物の自然の性をとげるやうになさるゝこと也。不教爲とは無爲なり。有爲の累などはせぬぞとなり。

古之善爲道章第六十五

古之善爲道者。非以明之。民之難治。以其智多。故以智治國。國之賊。不以智治國。國之福。此兩者。亦楷式。常知楷式。是謂玄德。玄德深矣遠矣。與物反矣。乃至於大順。

○道とは。天下國家を治むる道也。非以明民とは。かしこい知を付けること也。上の察々の政也。愚々とは。上の悶々の政なり。民が治め難きは。聰明の知が多くなる故也。故に愚之ぞとなり。○以知一とは察々の政也。是では缺々つひえ出る也。賊也とは。害に成ること也。○不以とは。悶々の政なり。是は民醇々たる也。即ち福なり。知の去るべきと不知の可用とを知つて治むるときは。天下の法式と成るぞと也。楷式は。法なり。下の句略之。○與物反とは。萬物ともくゝに自然の道にかへるぞと也。大順は。道に反つた效を云ふ。自然の道にかへつたときは。萬物も生をとげ。天地位し萬物育す。是大順

に至ると云ふものなり。

江海爲百谷王章第六十六

江海所以能爲百谷王者。以其善下之。故能爲百谷王。是以聖人欲上民。必以言下之。欲先民。必以身後之。是以聖人處上而民不重。處前而民不害。是以天下樂推而不厭。以其不爭。故天下莫能與之爭。

○此章。専ら不爭徳也。此れ借喻なり。言ふは江海若し高き處に在らば。百谷の水歸することなき也。○是以とは。以言下るとは。孤と云ひ寡人と云ひ。又不穀抔と云ふ類也。○以身後とは。我身を捨て民を大切になさるゝ也。必先立たんと思へば。衆人不免もの也。皆不爭の徳也。○是以とは。不重とは。上に立たせらるれども。威勢を以て下を押へらるゝことはないなり。下民うつとしからぬなり。處前とは。見物の上でも知るべし。自らへたりたるものをば。人が前に居ると云うて。害ぢやと思ふものなり。○樂推とは。其人を推尊ぶことを樂むなり。歸服の至りなり。皆不爭徳なり。

天下皆謂章第六十七

天下皆爲我道大似不肖。夫唯大故似不肖。若肖久矣。其

細。我有三寶。持而寶之。一曰慈。二曰儉。三曰不敢爲。天下先慈。故能勇。儉。故能廣。不敢爲。天下先。故能成器長。今捨慈且勇。捨儉且廣。捨後且先。死矣。夫慈以戰則勝。以守則固。天將救之。以慈衛之。

○此章。老子一部第一の肝要の章也。我とは。老子自ら云ふなり。天下の人が我をば大に愚不肖な人ぢやと云ふなり。云ふも尤なり。我は大なる故なり。其故に不肖の姿有るぞとなり。和光の姿は大きなものなり。人我のへだてなく。能く物をうけ入るゝなり。故に外より見れば不肖な姿あり。○若肖とは。此肖は。世俗に似たことなり。世俗に似ること久しきならば。我は細人ぢやと也。○我有とは。此三寶は。人々受得て居れども。知欲の爲に失ふなり。我は寶として持つて居るぞと也。○一曰とは。慈は。釋氏道家同じこと也。儒者の仁也。慈の徳有るときは人歸す。儉は。嗇と同じこと也。儉嗇とつゝいたる也。○不敢とは。不爭の徳也。此三寶也。○慈故とは。此三句三寶の效を云ふ也。慈なるときは。衆人が歸して怨をなすものはない也。能勇と云ふもの也。仁者に無敵と云ふ是也。廣とは。廣く用に應ずることなり。譬へばぶげんしやなど金銀ををしんで置く故。此ぞと云ふとき廣く用に應じて手つかへない也。其の如く嗇の受用して精氣全ければ。何をなしても退屈する事はなく。廣く用に應じて能く任にたへること也。○成器とは。凡形有る物を云ふ也。なれば萬物也。不爭徳あれば。萬物の長と成り尊ぶる

とぞと也。此れ三寶の效也。○今一とは。上の段に反して云ふ。上に獨り奢を窮めて勇有ること也。後とは。不敢爲天下先と云ふ七字をつめて書いた也。伸縮文也。皆一意也。右の如くなるときは不能勇廣先。却つて死の禍を受くるぞと也。○夫慈一とは。重き一を上げて云ふ也。仁者に無敵の心也。○以守とは。慈の徳を身に守つて不失は。固くして禍はない也。其の上天よりも福を與へ給ふことなれば。慈の徳ほど結構なものはないほどに。人々身に守れと也。不爭の徳は次の章に述べたり。

善爲士章第六十八

善爲士者不武。善戰者不怒。善勝者不與。善用兵者爲之下。是謂不爭之徳。是謂用人之力。是謂配天古之極。

○専ら不爭徳也。士は。町奉行の類也。○武とは。目を出してしかる類也。又笑うても民おそれて惡をなさぬ也。是が能き奉行と云ふもの也。下の句一意也。○勝者とは。與とは相手を取ること也。○不與とは。相手のないこと也。敵するものゝ無い善勝と云ふもの也。皆不爭の徳也。○善用兵一とは。人君たる人より下る故。人君となる也。皆不爭の徳也。○用人之力とは。不爭して勝つは。己が刃を用ひたではない也。衆人服して勝つなり。○是一とは。不爭徳の大は。天に配する斗り也。古の至極の道は。此の不爭徳ちやとなり。

用兵有言章第六十九

用兵有言。吾不敢爲主。而爲客。不敢進寸。而退尺。是謂行無行。攘無臂。扔無敵。執無兵。禍莫大於輕敵。輕敵幾喪吾寶。故抗兵相加。哀者勝矣。

○主とは。軍の主となりて此方より一亂の起ること也。客とは。是非なく相手に成ることなり。此章も不爭の徳なり。兵を兵家に用ふるを言へることあり。敢て軍の主とは不成を善しとすれば。已むことを得ざればそこを相手に成るぞとなり。此れ不爭の處なり。○不敢一とは。進むことは一寸もせず。退くことは一尺も退くぞとなり。不爭の處なり。○是一とは。不主客のことを云ふなり。行は。軍をやること也。此方から心有つてやるではない。おしよすれば已むことを得ずして行るぞとなり。此方より仕掛けるではないぞとなり。上と一意なり。○扔一とは。此方より敵となる心有つて。名を引うけて戦ふではないぞとなり。兵も此方より執つて相手に成るではないぞとなり。皆不爭のことなれば略。推して可知。○禍一とは。輕敵とおごりたかぶることなり。吾寶は不爭の徳なり。○故一とは。慈の徳を以て結んだなり。哀とは。勝つて不美之なり。慈の徳なり。此慈徳あれば勝つぞとなり。

吾言甚易知章第七十

吾言甚易知。甚易行。天下莫能知。莫能行。言有宗。事有

君。夫惟無知。是以不我知。知我者希。則我者貴矣。是以聖人被褐懷玉。

○吾言一とは。老子自ら云ふなり。不及解。○有宗とは。吾言は一言でもあだなことではない。其の由つて来る所の源が有るぞとなり。○有君とは。主有ることなり。吾行ふ所は一事でも主とする所有るぞとなり。そこを世人は知らぬぞとなり。○知我者一とは。我れ和光の姿と成つて居れば。我を誰も知らぬなり。其の知らぬ處が我道と和光の貴き處なり。禍は下服なり。和光の姿のことを云ふ也。上むきはむさけれども。其徳正しき時は。被褐抱玉と云ふものなり。外よりは跡を昏す故。見えぬことなり。和光の姿を如此形とるなり。道元和尚の我の字の歌に。我と云我を知らざる我なれば。我知らずとも思はぬは我。○解曰。誰か此の我を知るや。若不知は是非我。若又不知は非我。雖然如此知不知の處をすて、直に無我我を可知なり。

知不知章第七十一

知不知。知上不知。知病。夫唯病病。是以不病。聖人不病。以其病病。是以不病。

○道を知つても。自ら知つたと云ふことを不知が。真知ちやと也。譬へば水の自ら冷を不知ごとくなら

り。○病とは。學者の心病なり。○夫唯とは。聖人知ると思ふが病ちやと云ふことを知つて。其を病へ給ふなり。故に其の心病がないぞとなり。聖人は自ら知つたと思召さぬ故。病はないなり。なせなれば其知ると云ふが病ちやと思召して。そのみをうれへたまふ故。病はないぞとなり。衆人は反之して。知らずして居りながら知つたふりをする故。此心病を免れぬぞとなり。上とは。上々吉の知者ちやと也。又維摩の淨名疏に。問疾品並に不二法門品あり。

民不畏威章第七十二

民不畏威。大威至矣。無狹其所居。無厭其所生。夫惟不厭。是以不厭。是以聖人自知不自見。自愛不自貴。故去彼取此。

○此章は。嗇の修養を云ふ。威は。天威なり。即天命なり。惡事を成さば。天より罪を與へ給ふなり。幽には鬼神のたゞりあり。明には天のとがめ。人には五刑の罪あり。なれば人間は隨分事を疎末にせず天命の到る處を恐れて。惡事をせぬが善い也。若不畏則は。天威至る處のがれがたきなり。大威は。天威なり。○無狹一とは。居るは谷神の場なり。衆人は知欲以て我安宅たる谷神をせばめるなり。○所生は。谷神を以て人は生きて居るなり。其谷神を厭ひ捨つるは。知欲からのこと也。○夫唯一とは。狹一一句も入れてみるべし。知欲を去つて不狹不厭則は。長久にして安いなり。安泰長久るときは厭ふこ

とはない筈なり。○是以聖人—とは。道を知つても自ら知つたと不思議ことなり。自愛とは。釋氏の云ふ法身を愛することを云ふ。自不貴とは。血肉の身は六根の欲あり。故に不貴なり。法身とは谷神なり。彼とは血肉の身。此とは谷神なり。

勇於敢章第七十三

勇^ニ於^テ敢^ニ則^チ殺^ス。勇^ニ於^テ不^レ敢^ニ則^チ活^ク。此^レ兩^ツ者^ハ。或^ハ利^ハ或^ハ害^ハ。天^ノ之^レ所^レ惡^ム。孰^レ知^ラ其^ノ故^ヲ。是^レ以^テ聖^人猶^レ難^シ之^ヲ。天^ノ之^レ道^ハ。不^レ爭^ハ而^{シテ}善^ク勝^チ。不^レ言^ハ而^{シテ}善^ク應^ジ。不^レ召^シ而^{シテ}自^ラ來^リ。坦^{トシテ}然^{トシテ}而^{シテ}善^ク謀^ル。天^ノ網^ハ恢^恢。踈^{ニシテ}而^{シテ}不^レ失^ハ。

○敢は。剛強なこと。不^レ敢は。柔弱の上で云ふ。此意前に出でたり。故に略す。此兩とは。柔弱を守れば活く。利と云ふものなり。剛強なれば殺さる。是れ害なり。なれば柔にして利に付き。強にして害の場をさくべきぞとなり。剛強の場は。天も甚だ惡み給ふ處ぞとなり。今の世俗。此の強は天も惡み給ふ處ぢやと云ふことを不知ぞとなり。○是^レ以^テとは。難^シ之^ヲとは。此強の場は聖人もいみはゞかり。恐れをなし給ふ處ぞとなり。天之道とは。譬へば火の性は乾けるに付て上るものなり。山の下などに火を付くれば。上へもえあがる。それを山上に居て數十人仕てあふぐとは。火は不^レ爭して下るものなり。なれど

も山上の人久しく扇ぎて居がたし。そこでは又火上へもえあがるなり。是不^レ爭勝と云ふものなり。人は火に負けたと云ふものなり。天道不言萬物成は。不言して應ずる也。○不^レ召とは。四時は此方より呼ばねども。來て其節をなすなり。○坦然—とは。天地の物を成した跡を見れば。大きなことなれども。無心にして爲す故勞することはなく。坦然とやすくとして造作なきなり。何んでも一つ勞することはないぞとなり。實は自然無爲に従へば。勞することなく畜の受用に掛かるなり。○天網とは。天はあみの如くにして。恢々と大いに。疎濶と目あらいけれども。吉凶禍福皆天のあみにもれたことはないぞとなり。○不^レ失と云ふは是なり。不言而應とは。善人に福を下し惡人に禍を下す類なり。

民不畏死章第七十四

民^ハ不^レ畏^レ死^ヲ。奈^ニ何^ヲ以^テ死^ヲ懼^レ之^ヲ。若^シ使^ニ民^ヲ常^ニ畏^レ死^ヲ而^{シテ}爲^ス奇^者。吾^レ得^ニ執^{ヘテ}而^{シテ}殺^ス之^ヲ。孰^カ敢^テ常^ニ有^リ司^レ殺^フ者^ニ殺^ス。夫^レ代^ニ司^レ殺^フ者^ニ殺^ス。是^レ謂^フ代^ニ大^ニ匠^ト斷^ス。夫^レ代^ニ大^ニ匠^ト斷^ス者^ハ。希^レ有^リ不^レ傷^ク其^ノ手^ヲ矣。

○民不畏死は。上人君の咎なり。政道正しくして民に凍餓の患なければ。盜をなし屋燒人殺をすれば。刑罪に遇ふと云ふことを何んとも不思議して。左様なことを成すは。上人君の政が辛くして民とぼしき故なり。○使民—とは。此一句重なり。民畏死とは。仁政なれば民死罪に行はるゝことを恐るゝなり。奇邪をなすものあれば。此れをとらへて殺すときは。天下に誰か法をかすやうなことをせうぞとなり。

仁政なれば。民上を敬し法をやぶらず。仁政の上で奇邪をなす者有れば。其れを罪するときは。天下の民尤なことと同心するなり。生木に釘打つ如く利くなり。○常有―とは。司殺者とは天道なり。天自ら手を下して殺すではなけれども。悪人なれば。死罪に遇ふ類は。天から成さるゝと云ふものなり。此なれば刑法もよしと云ふもの也。○夫代―とは。今戦國無道の代なれば。天道を他へやりて。其罪すまじきものを罪する様なことなり。無罪を殺すときは。人怨怒を含む故。後に人必我身に禍を來すものなり。譬へば上手の大工に下手大工がかはりて細工すれば。必手を切らぬと云ふことはない和同事ぞと也。

民之飢章七十五

民之飢。以其上食稅之多。是以飢。民之難治。以其上之有爲。是以難治。民之輕死。以其求生之厚。是以輕死。夫唯無以生爲者。是賢於貴生。

○此章。政と養生の上で云ふ。食稅多とは。年貢を多くとることなり。如此則大盜の起る下地なり。○上有爲とは。有爲の政なり。智以て治むることなり。察々の政ごとなり。如此則民かしこい智出て。治めがたきはすなり。此まで政の上へなり。○民之とは。養生の道なり。民生きたく思うて。養生喰などして却て仕損ずるは。生を厚うするではなうて。死を輕んずると云ふものなり。餘り養生過ぎて。死を輕んじて何んとも不思に當るぞとなり。前の章に出でたり。求生厚と云ふが。本さもしき欲心より起つ

たものなり。眞の養生と云ふものではないぞとなり。無知無欲にして。生を以て何れともすることないときは。長生するなり。欲心なくして柔をまもり。以無爲生と云ふものなり。これなれば長生するなり。養生喰などして欲心を恣にするは。生をそこなふと云ふものなり。此れは却て生きたるの道ではなくして。死を何んとも不思と云ふものなり。故におとれり。死を重しと思ふならば。欲心有つて厚く生生とするはずではないぞとなり。

人之生章第七十六

人之生也柔弱。其死也堅強。萬物草木之生也柔脆。其死也枯槁。故堅強者。死之徒。柔弱者。生之徒。是以兵強則不勝。木強則共。強大處下。柔弱處上。

○此章。意多く前に出でたり。略之。○萬物とは。此より借喻なり。萬物の中で草木の上で云ふ。柔脆とは。柳の枝しなへる如くなり。枯槁とは。かれ木と成ることなり。柳の枝に雪折はなし。松の枝は雪折有り。皆意前に出でたり。○是以とは。兵の勢におごり高ぶるものは。必まけるなり。○木強とは。木のしやごはく成ることなり。○共とは。一尺まはりほどの木に成れば。しやごはく成つて折れ易きなり。○強大とは。根のことなり。柔弱は。枝葉也。言ふは強大は賤しくして下に在り。柔弱の徳は貴くして上に在ると云ふことなり。

天之道章第七十七

天之道。其猶張弓乎。高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。天之道。損有餘而補不足。人之道則不然。損不足以奉有餘。孰能有餘以奉天下。唯有道者。是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢邪。

○天之道と云ふものは。弓をあつかふやうなものとなり。張と云へば。弛の義含めり。常張なれば弓がよわるものなり。四時の上で云へば。春夏は陽にして張つたときなり。秋冬は陰にして弛んだときなり。一張一弛の故。萬物生生して不盡なり。○高とは。人のせだけでも二十歳までは成長す。それよりはそだぬなり。三四歳のときは長ず。下の句皆一意なり。月も三日月抔は。段々補うて十五日までは益し。夫より段々損するなり。天道は如此ものなり。○人道とは。人道の天に反したことを云ふなり。損不足とは。貧窮したる民の手前より。愈々上へ取上げ給ふことなり。○奉有とは。己は富んで財餘あれども。彌々取上げて己が身に奉ずるは。奉有餘と云ふものなり。○孰能とは。今戰國無道なれば。有餘己れが倉の財を天下萬民に奉じ施すものは。一人もないぞとなり。唯有道の者斗り施すなり。無道の代なれば。左様な人一人もないとなり。○是以とは。前に出でたり。不欲見賢となり。其なした跡を見れば賢なり。なれども跡をあらはさぬ也。

天下柔弱章第七十八

天下柔弱。莫過於水。而攻堅強者。莫之能勝。以易之。弱之勝強。柔之勝剛。天下莫不知。莫能行。故聖人云。受國之垢。是謂社稷主。受國之不祥。是謂天下王。正言若反。

○天下に柔弱なもの多けれども。水ほど柔弱なものはないとなり。○攻とは。水ほど柔弱なものはないけれども。しかも又水ほど堅強を能く攻めるものはないぞとなり。何の手間もなく易々と攻めて取るとなり。譬へば十丈の土をきづくこと云へども。少しの蟻穴有れば。それよりしてもれ出で。其堤をもくつがへすもの也。下の句略之。○聖人云とは。曰の字と意少異なり。聖人抔も云うておかれたてはないかと云ふ義也。曰は。意がきびしきなり。○國垢とは。自ら下つて居ることなり。孤と云ひ寡人と云ふ類なり。柔の強に勝つことを云ふなり。かやうに自ら下つて居るものは。國の主となるなり。○國の不祥とは。此れは垢と云ふよりは又悪きことなり。彌々下つて居ることを云ふ。かやうに彌々下つて賤しき場に自ら居させらるるときは。天子となるぞとなり。○正言とは。此の言の如きは正言なり。なれども世俗の

語とはうらおもてと聞ゆる也。なれども實は正言ちやとなり。

和大怨章第七十九

和シテ大怨ヲ必有ニ餘怨一。安シテ可ク以テ爲ス善ト。是以テ聖人ハ執ニ左契ヲ而不レ責ミ於人ニ。有德ハ司リ契ヲ。無德ハ司レ徹ヲ。天道ハ無シ親ヲ。常ニ與ニ善人ニ。

○此章は。無心に成りにくいものぢやと云ふことを解く也。故に忘れがたき怨を上て云ふ。互に大怨有つて。他人入りて中直りをするなり。然れども怨と云ふものは。うはべはよくても。底意には。餘怨有るものなり。然るときは中直り仕たとはいはれざるごととなり。此れ無心には成りにくいものぢやと云ふことを云うて。聖人は眞の無心ぢやと云ふことを下て云ふなり。此一句は張本と云ふものなり。○聖人とは。此れが眞の無心なり。左契は。わり判のことなり。扶持米などわたすわり判形をする也。左契は財寶を司るものゝ方にあり。右契は財寶を受取るものゝ方にある也。財寶を受取るときは。右契を持つてゆいて。役人の左契に合せて受取ることなり。言ふは左契のわりふを以て。人に財寶を渡すときは。遣すは残念ぢやとも又はもどさぬ程にと云うて。責めはたりもせぬものなり。何とも不思議に渡す也。是れ無心なり。扶持米杯を公儀の倉奉行へ云うてやるに。何んの心もなくわりふに合せて渡すなり。聖人の無心を云ふときは。左契を執る者の左契に合せて財寶を渡す如く。無心ぢやとなり。○有徳とは。聖人をさす。聖人は今云ふ如く左契を司る者の如く無心なり。無徳とは。小人を指す。徹とは。物をサ

ツバリとさんようして取遣することなり。必小人と云ふものは。量が狭き故容るゝ處がない也。故に徹を司るものなり。聖人の寛容にして無心なると大に異なり。小人はきうくつなり。○天道とは。天道は私に親み給ふことはないなり。誰であらうとも其の善有る人に福を與へ給ふことなり。昭々察々たる小人などには與へなされぬなり。有徳人の聖人なれば與へ給ふと也。善人は。聖人なり。

小國寡民章第八十

小國寡民ニ。使レ有ニ什伯人之器一。而不レ用シ。使レ民ニ重シ死ヲ。而不レ遠シ徙ヲ。雖有ニ舟輿一。無レ所乘之ニ。雖有ニ甲兵一。無レ所陳之ニ。使レ民ニ復シ結ヲ繩ヲ而用之ヲ。甘シ其食ヲ。美シ其服ヲ。安シ其居ヲ。樂シ其俗ヲ。隣國相望シ。雞狗之聲相聞シ。民至ニ老死一。不相往來シ。

○此章は。古を慕うて今の不然ことを歎じて云ふ。老子謙退して云ふ。我大國大民を治むることは成るまいけれども。若し小國寡民を治めやうならば。先づ什伯を立てゝ下々のことはさばかせうぞとなり。什とは。十人與のことなり。今の五人組の類なり。伯は百人與なり。一人にて五町も十町も支配する大興頭のことなり。なれば小組大組を立てば治めうぞとなり。○人器とは。萬器は手つかへのないやうに調へては置けども。無用のものは常に捨ておいて不用となり。○使民とは。上の使民畏死と同じこと

なり。○不遠徙とは。事少にして他國通ひを止めさする様に可爲となり。○雖有―とは。此二句器而不用と云ふ是也。用舟車は。事繁くして其處で事不足。故に甲冑兵器を陳ぬるは。其本は欲心から起つたことなり。かやうなことは止めにせうぞとなり。○使民―とは。古は事少ない故。結繩の政行はれたるなり。今は事しげき故。文字と云ふ物出たるなり。なれども老子が文字を捨て、結繩にかへんとはならず。唯今の事しげきを止めて。往昔の無爲にして事少なき時の様にせうぞとなり。以言勿害意となり。○甘―とは。あかざの汁も甘しとし。麻衣も美とし。はにふの小屋も安んじて。其無爲の風俗を樂んで居るは。心に奢りなく六根欲なき故なり。○隣國―とは。民の多くあることなり。國もひとつづきに。鷄狗の聲も村おくり聞ゆる類になり。如此往來することはないととなり。我如此治めたいとなり。上古は皆是なり。上古を慕うて云ふなり。

信言不美章第八十一

信言不美。美言不信。善者不辨。辨者不善。知者不博。博者不知。聖人不積。既以爲人。己愈有。既以與人。己愈多。天之道利而不害。聖人之道爲而不爭。

○此章。一部に散在して説いたことを上げて結んだと可知。信言と云ふものは。華美なものではないなり。美なる言は。信言と云ふものではないぞとなり。故に此一部章美辭に書いたことはないぞとなり。

○善者とは。知者不言と云ふ所を解きたるなり。○辨者―とは。言者不知と云ふことなり。道は言語で云はるゝものではないぞとなり。○知者―とは。眞の知者は博識に渡つたものではないなり。博識は眞の知と云ふものではない。博識多能は道家の所惡也。○聖人不積とは。虚なことなり。聖人はふいごの如く虚なり。其虚より事を生ずる故に。盡きると云ふことはなき也。○既以―とは。虚不盡政教の上で云うて。政教を施す上でも。聖人虚心より出させらるゝ故。人の爲にすれば彌、我にあり。人に與ふれば彌、我に多く有つて盡きることなし。ふいごの器を出して不盡。天の物を生じて盡きざる如し。凡そ盈積し有る物は。施せば盡きるものなり。譬へば財寶の類是也。○天之道は。天道は物を利益すること有れども。害することはなし。聖人の道も事を成さぬではない。爲せども無心にして。するに心なく争ふことなし。そこで萬事萬物各成就せずと云ふことなきなり。

老子經國字解大尾

舊刻 寶曆辛巳孟夏
再板 文化己巳夏五月

大阪書坊 文海堂發兌

老子國字解卷一

海保臯鶴 著

老子は何れの代の人と云ふことを知らず。史記の本傳には。どれが眞の老子やら知れぬと云へり。何れ孔子より後の人と見えたり。凡そ孔子の禮を老子に問ひ給へりと云ふことは。無きことと見えたり。先づ左氏内外傳に。此事を載せず。孟子などにも見えぬ也。古き名の書にては。孔子家語也。左れども家語の僞書なることは。先儒も往々に辨せり。いかさま王肅の作と見ゆ。王肅は馬融鄭玄の學問をうちこはしたるゆゑ。馬鄭の學問の眞の學で無きことを言はんとて。家語を補ひ成して。孔子の學は内の學にて。心の學にて。智慧を養ふ學にてと云ひならべて。鄭氏の學の。外の學。禮樂三昧を撃ちたるなるべし。左れば家語は證據にならぬ也。扱莊子には。まさしう老子の談多うあり。莊子の學は。儒者の孔子の道を取りぞこなひたるを撃つたる書なれば。莊子一部。皆虛誕也。莊子に寓言篇といふ篇あり。凡そ道を傳ふるには。道さへ傳ふればすむこと也。傳ふる時には。虛誕にても何にてもよし。道さへ呑み込ますればよきこと也。故にわしが書は七分ほどは寓言なりと云へり。或は風が雲とはなしをしたの。柳下惠が孔子と談つたのと云ふ。けしからぬうそばなしを言ひて。唯人々の道を會得するやうにと思ひたるものなれば。莊子は尤證據になる書にあらず。凡そ後の書に。孔子禮を老子に問

ふといふ話は。皆此莊子の虚誕説話を本源としたるもの也。禮記は戴聖といふ漢儒の編みたる書也。古書にてはなし。古書には孔子の禮を老子に問ひ給へる話はなし。史記の老子傳には。孔子周に行いて禮を老子に問へる話ありて。孔子の世家には。南宮敬叔周にゆける時に。孔子も行けり。此時にどうか老子に禮を問ひ給へりなどと云ふはさもありしなりと云へり。すれば司馬遷も。眞に孔子は老子に學ばれしとは思はぬ様子也。其上に老子の傳には。老萊子が老子か。太史儋が老儋か。時代も姓名も知れぬと云へり。扱老子の五千言をとくと味ひて見るに。老子は孔子より後の人也。其故は。孔子周の末に生れ給ひて。此天下を靜謐にせんと思ひて。人情に本づきて考ふれば。兩親の死ぬのを喜ぶ人なし。兄の他人に踐まるゝを喜ぶ人なし。此二つは人情の免るゝことならぬ所なれば。此を本源にして組み立つるより外なしと思ひて。仁義を立てられたり。親を愛するを仁といふゆゑに。人をよろこばするも仁也。人に物をとらすも仁也と説けり。兄をたふとむを義といふゆゑ。他人を尊ぶも義也。人の後より行くも義也と説けり。天下の人。皆父を愛し。皆君を尊べば。天下に親殺し主殺しはなし。亂のおこらうやうなし。皆人に物をとらせずき。皆人の後より行くことすきなれば。喧嘩起らうやうなしと云ひて。天下に仁義をすゝめ給へり。然れども此時天下攻伐はやりて。他人の國を取ることを日夜に工夫し。他人の上席に坐することを工夫する世の中なれば。孔子の道ネカラ行はれぬ也。當時の大名。孔子に學問をとへば。孔子必ず仁義を説き給ふ。人に物をとらすことと。人の後より行くこととを説き給ふゆゑ。當時の諸侯の腹中とはうらはら也。故に七十二君に説き給ひけれども。合

ふ人無かりし也。こゝに於て老子出でたるなるべし。老子は此うらにて。同じ仁義を説けり。當時の大名。學問を老子に問へば。老子は必ず人の物を取ることも也。人の上に坐すること也と説けり。人に物をとらすは人情にあらず。人の後より行くは人情にあらずと説けり。扱諸侯の問ふに。如何すれば人の物が取れますと云へば。老子の對へに。凡そ人の物を取らうと思ふ人は。先づ人に物をとらすがよし。人に物を取らせねば物が取れぬ也と云へり。如何すれば人の上座にすわられますと問へば。凡そ人の上に坐せんと思はゞ。先づ人の後より行くべしと説けり。是同じく人に物を取らすこと。人の後より行くことなれども。人情より推して仁義に及ぼすゆゑ。天下の人々。皆老子學問になりたり。左すれば老子は孔子より後に出て。仁義を世人に勧めたるに相違なし。仁義を惡しういふは。仁義の表向をあしういふのにて。内證は皆仁義也。故に鶴は老子は孔子の後の人なりと云ふ也。老子は孔子を助けたる人也と云へり。老子は眞の儒者なりと云へり。

上篇

古へより此五千餘言を道德經と名づけて。上下篇と分ちて。上篇は道をときたるもの。下篇は徳をときたるものと云へり。鶴案ずるに。決して〳〵左様なることなきこと也。其故は道德とは。事物と云ふやうなることにて。人の身に取ていへば。心は道の字の持まへ也。體は徳の字の持まへ也。劉向が説苑にも。三公は道の字。九卿は徳の字とあてたり。道の字は。目にみえぬ中のからくりと云ふ心

也。徳の字は。目にシツカリと見ゆるもの也。三公の役筋は。下民の眼には見えねども。六ヶしうて。九卿の役筋は。下民の見るところなれども。淺しと云ふ心也。人のからだは。耳目手足ありくとあるものなれども。格は卑きもの也。心はありくと見えねども。格式高きもの也。艸木に譬へば。だんく長ずるは道也。葉や枝は徳也。辛き甘きは道也。青い赤いは徳也。故に離れくくに説くべきものにあらず。心無ければ體なし。體なければ心なし。道徳は一つものを二つにわけて言ふ言葉也。心體も一人の身をわけて言ふ言葉也。故に上篇は道を説き。下篇は徳をとくことならぬこと也。道徳一所にとかねば。説かれぬ也。上下篇とわくること。あしき證據也。

一章

扱五千言を八十一章にわくること。又鶴は悪しと思ふ也。八十一章にあらず。唯一議論なり。ズツトつゞきたる一章もの也。古へよりいふは。九々八十一の數に合せて。八十一章にわけたるものなりと云へり。五千餘言は。大衍の數五十ゆゑに。五千言に述べたるものなりと云へり。此書甚妙論にて。人の智を養ひ。人の行を助くれば。九々の數に合はいてもよき也。大衍の數にあはいてもよき也。又人の智を養ひ。人の行を助くる用に立たいで。數に合ひたらば。よきこともあるまじ。數のことにかまはぬこと也。五千言八十一章。トンと無用の談也。且つらぬきたる論が。きれくになりて。甚惡し。唯一章となして見るべし。

王弼註

諸家の註多けれども。王弼註ばかり宜しき也。唯惜むらくは王が註したる時。年甚弱年にて。氣銳かりしゆゑ。左右前後を見はからはず。讀む人々の心を推さず。後世の人情をも汲み取らず。やたらに向ふへくと進みたる註の仕やう也。其故は論語は。古人の智慧を振ひたるありさまを。其儘書きたるもの也。是を有といふ也。老子は。智慧の出しやうなり。智慧の組みたてやうを書きたるもの也。是を無と云ふ也。有は外のこと。其かたちを述べたる也。無は内のこと。其こゝろを述べたるもの也。有の解をば。無でせねばわからぬ也。無の解をば。有でせねば分らぬ也。有と無とは。衣類の表と裏のやうなるものにて。兩方そろひて後に。一つの衣類となる也。人なれば體と心となり。兩方そろひて。一人の人也。王弼の注は。よき注なれども。無を解するに無を用ひたるもの也。譬へば水を解するに。水にて解すれば。水のわけ知れぬなり。水は水なりといへば。よき注にても。水を解するゆゑんにあらず。今水を湯にて解すれば。水のわけ知れる也。水は湯のつめたきものといへば。水の字の解也。湯は水のあたゝかきものといへば。湯の字の解也。無を有で解し。有を無で解すれば。わけもよく分かること云ふもの也。老子を論語で解し。論語を老子で解すべきはすのこと也。鶴は老子を論語にて注するつもり也。即ち本文を論語にて注して見すべし。

道可道非常道。名可名非常名。

一體老子の讀みがたきゆゑんは。本文入り亂れて。きれくになりてあるゆゑ也。是は道士ども書を讀むことを知らぬゆゑに。いろくになぶりものにして。入れかへくしたるものなるべし。此章は首章にあらず。其故は老子の心にては。天下の人。道といふことを知らず。儒者の道とおもひて居るは。古の道の字のことにあらず。此方の道といふが。眞の古への道といふものなりといひて。道の字を第一に説きたるものなれば。先づ道の字の解をして。扱己れが流義の道の字の解よう知れて。其後に道はいかゞといふべきはず也。くらやみより棒の出たるやうに。唐突に道の道とすべきと説き出すべきにあらず。第二十五章にくはしう道の字の解あり。この方の道といふは。世間の儒者の道といふとは違ふ也。先づ天は輕きゆゑに上へのぼる。地は重きゆゑに下へさがる。其輕きものは。上へあがらねばならぬ理ありてあがる。地も下へさがらねばならぬ理にて。下へさがると云ふ。理は左なければならぬと云ふこと也。理の左なければならぬものを指していはんに。此名なきゆゑに。此を道といふとあり。又天は理にて上にあり。地は理にて下にあれば。天と地とは理の支配下也。天地を支配するもの道なれば。天下の中は。此左なければならぬといふ理ほど。いやと云はれぬものなし。いやと云はれぬ理を。此方の胸にすゑておけば。天下の中のことにつきて。喜怒哀樂はなきはず也。喜怒哀樂なければ。心が動かぬゆゑに。智湧きいて。物事に惑ふことなしと云ふ證據に。天地に先だちて生ずるものが道なりと云へり。是れ道の字の解也。此解とくと濟みて後に。道の道とすべきと説出さねばならぬこと也。扱すちのチヨイと見ゆるすちは。眞のあひかはらぬ筋といふものではない

と云ふこと也。常はあひかはらぬと訓ず。王注にも。筋のチヨイと見ゆる筋は。眞の筋では無しと注せり。至極よき注なれども。其筋のチヨイと見ゆる筋は。眞の筋ではないと云ふは。何のことぢやといへば。其注はなし。是を無を無て注すると云ふ也。鶴。論語にて此二句の注をして見すべし。楚の大夫葉公といふ人。孔子にかたりしは。扱此方の村方に正直ものがござる。其鄰の羊其家へ入りたるとき。其父この羊をとらへ殺して食ひしゆゑに。其子即ち此方役所に訟へ。私の父鄰家の羊を攘みしなりと白狀せし也。何と正直ものではござらぬかと申せし時。孔子の對に。此方の村方の正直ものは。大にちがうて居ります。父が羊を攘めば。隠してうそをつきます。又其子をとらへて。考問しても。骨がひしげても。白狀はいたさぬ。どこまでもうそをつき。父へ悪名をつけませぬ。其うそをつくが。即正直でござると云はれし也。是正直の筋と云ふものは。見えにくきもの也。チヨイと見れば。うそをつかぬが正直のやうに見ゆれども。孔子の言葉には。うそをつくが正直ぢやとの給ひし也。孟子は嫂の手をにぎるは。禽獸の行なれども。嫂が川へはまりて死なんとする時には。手をにぎりてはすまぬというて。嫂を見殺しにするは。又豺狼ぢやと云ひし也。うそをつくが正直の時もあり。嫂を抱くのが仁の時もあるゆゑに。筋のチヨイと見ゆる筋は。眞の筋では無いといふ也。又凡そ筋は千變萬化するものなれば。帳面に書きつけて置かるゝものにあらず。人に傳授するゝものにあらず。其上へのチヨット見えるを。眞の筋とこゝろ得れば。皆ちがふ也。故に此理此筋を五千言に載せて。老子の骨を折りて説きたる也。名とは仁義より下。皆事の名也。仁義より下。皆帳面につけて覺えらるるもの

にあらす。人を殺すが仁の時もあり。人に撃たれて黙して居るが。義の時もある也。人を殺さぬを仁と名づくる。辱を受けぬを義と名づくと覺ゆるは。大に淺きこと也。凡そ心を死物にして。物にこびつきて居るやうにては。活動せぬ也。先心のこびつかぬやうに養ひて。其後に運用の法を説きたるもの也。心の守りどころは根源の理也。左なければならぬ筋也。其下の小わりは。仁義を始め。皆所々によりて變易するものなれば。きまりたるものにあらず。此方の心根源をシツカリと蹈んで居れば。うそをつくが正直ぢやの。嫂の手をにぎらぬは豺狼ぢやのと。よくよく見ゆる也。根源の蹈み所動けば。惑ふ也。うそをつきては悪しからう。嫂の手をにぎりては悪しからうと。うろたへまはるは心の迷ひ也。心の迷ふ人は。孔子も孟子も大にきらひなれば。先第一に心の取りやうから修行すれば。智の湧く法しれること也。

無名、天地之始。有名、萬物之母。

古への學問は。智さだまりて事物の是非善惡を辨するやうに修行すること也。後世の學問のやうに。書を澤山に讀み。博物になることにはあらず。先學問の始まりは。心を二つに分くること。始めの修行也。心を二つにわくるは。天地の理に従ふ也。天下の物は皆二つにて一つ也。晝夜表裏を始めて。皆二つよせて一つになるゆゑに。晝のない夜なし。表のない裏なし。晝といへば。夜はついてある。表といへば裏はついてある。是を二つよせたる一つと云ふ也。心をも。此理に従ひて二つにわくる。

無と有と二つにわくる。無といふものゝ名は。有があるゆゑにある名也。有といふ名も。無があるゆゑにある名也。凡そ天下の物を二つにわくれば。皆わかる也。分けて。扱其分けたる物名をつけねば。論が立たぬゆゑに。一を有とわけ。一を無とわくる也。無は有を生ずるものにて。事物の出來る以前を無と云ふ。既に出來たる後を有といふ也。故に無をば。天地のズットの始めの。今出來んとするまへに名ておく也。名の字をサダメルとよめと云ふては無けれども。空に位を置くゆゑに。位を先づさだめて。假りに立てゝおく也。扱有は萬物の母。名むるは母とは。物を生む名也。既に出來たる後ゆゑに。天下にあらゆる有のもの母とさだめて立てゝ置く也。心を二つに分くることを詳に載せたるは。書經には道心惟微人心惟危とあり。此れは道心は本心也。恥をかくこともいや。饑寒することもいやと思ふ心は本心也。左れども飲みたいの。食ひたいの。遊びたいのといふ心が。此本心の邪魔をするゆゑに。恥をかき。飢寒をもする也。故に先づ心を二つに分けて。其本心のよき心を。あきらかにリシとみぎきたてて置くがよけれども。此本心の心は。兎角にかすかになりやすきものぢや。故に道心惟微と云ふ也。飲みたい。食ひたい。遊びたいと思ふ心勝つもの故に。人心惟危と云也。これ心を二つにわくる傳授也。孔子は正心との給へり。心を正しうするといふは。心を二つに分けて。本心が人心をたがすといふこと也。正す心も心也。正さるゝ心も心也。正す心を本心と云也。正さるゝ心を人心と云ふ也。孟子に至りて甚詳也。志は氣の帥也。氣は體の充つる也。其志を持して。其氣を暴すること勿れと云へり。志は思ひこみ也。是本心也。何とぞ恥をかくまい。何とぞ飢寒をせまいと思

ひ込んだる心也。故に志は氣の帥也と云へり。帥は將帥のこと也。大將軍のこと也。志は大將也。氣は雜兵也。氣は數多きもの也。はしたごゝろ也。志は一つにて尊し。けれども大將も雜兵をむごうしては。又敗軍になる也。むごい目に合はさぬやうに。つかふがよき也。人の心をも一つを大將とわけ。一つを雜兵とわくれども。一向にはしたごゝろを苦むるやうにては悪し。氣儘は悪し。氣儘を十分にするは。本心の油斷といふもの也。左れどもあまりにせめることもあし。些しは飲ませ食はせ遊ばせねばならぬ也。左れども本心大將の命をうけて遊ばすれば。遊びすぎるることなし。故に暴すること勿れと云へり。如此古への智者の言は。皆よう天地の理に合うてをる也。先づ心を二つに分くことを覺えて。扱其二つの心の心得也。大將と雜兵とは。二つにて一つ也。軍一軍は大將と雜兵のこと也。大將のない雜兵なし。雜兵のない大將もなし。大將雜兵二つにて一軍也。大將は心をおもに操るもの。是れ無也。雜兵は手足をおもに働すもの。是れ有也。有と無とは。空に位をおきたる符牒也。

故常無欲以觀其妙 常有欲以觀其微

常無常有とは。道心と人心と。兩方共に同じやうにつねに生きて。兩方一しよに働くと云ふこと也。大將の働くうちは雜兵死に。雜兵の働くうちは大將が死んでは。敗軍也。氣の働くうちにも。志はリシと見てをる。志の働くときも。氣はやはり立ちまはりて。兩方共に生きてをるゆゑ。常無常有と云

ふ也。觀はトツクリと味うてみることも也。妙は晝の色也。玄は夜の色也。微は敵の字の誤也。色のいかにハツキリと分りて。自黒キツトわかりて見ゆること也。あきらかかと訓ず。十四章に。其上にして味からず。其下にして敵ならずと云ふ。同じこと也。王注にも終りに歸する也と注せり。終りに歸するとは。黒きものは青うならず。青きものは赤うならず。凡そ黒きも青きも赤きも。皆それざりにて。きまりたる色也。外の色には變せぬと云ふこと。ゆゑに終りに歸する也と注せり。色のもはやきまうてしまひたること也。故に青赤黒とハツキリときまうて。あきらかなりと云ふ處に。敵の字を用ふる也。常無は以て其妙を觀せんことを欲すとは。將帥心はいかにも大きうかまへて。小ざりもりをせぬことが。晝の色の色の邪魔をせぬやうに守ると云ふこと也。凡そ晝は物色ようわかりて。晝の色が邪魔をして白が黒に見ゆると云ふことなし。赤をば赤う見せ。青をば青う見せて。トシとありのまゝに見するもの也。そこが將帥心の心得也。一とうにおうやうに見るゆゑに。コセ〜小世話をやかぬ也。譬へば源の義經は。兄頼朝の意に違ひて。忍びて奥州へ北國を下られしに。所々に鎌倉より關所をすゑて。義經をからめ取りて鎌倉へ引くやうにと觸れある故に。義經と知れぬやうにこしらへて。北國を下ること也。扱加州安宅の關所へかゝる。義經も其外の郎従も。皆山伏士の姿にして。諸國修行の山伏士といふものにて。關所へかゝる。關守は義經の人相貴き相あれば。シロ〜と見て怪しむ也。是甚六ヶ敷場所也。扱辨慶は學者にて。文章も出来る學僧なれば。此様子を見て。大に苦しく思ひ。即ち心に一計を設けて。義經を金剛杖にて大にうち。扱足にて踏みて。大に叱る。家來のデツチを叱

るやうに叱りて。扱關所にて勸進帳を讀みて。いかにも眞の山伏士と見ゆるやうにせしほどに。關守も安堵して。義經ならば踏みはせまいに。山伏士踏みて叱れば。決して怪しきものにては有るまじと思ひし也。是は辨慶。將帥心と士卒心とをよう分けてつかうたる故に。虎口の危難を免れたり。主君をだいじと思ふ心は。將帥心也。今踏む心は士卒心也。主君をだいじと思へども。こゝにて君臣らしうすると。直にあらはるゝゆゑ。踏みたる也。踏むときには。いかにも剛力を踏むやうに踏まねば。又あらはるゝ也。眞に剛力を踏む氣にならねばならぬ也。此時に將帥心小さうて。小ざりもりをすれば。主君をいかゞして踏むことあるべきぞなどと。きりもりを小さうすれば。是主君をたすくる邪魔をすると云ふもの也。何にもせよ。主君危難を免れ給へばよしとすれば。主君を踏まうが撃たうが。トんと大事ないと大きう持つを。邪魔をせぬと云ふ也。晝の色の如く。何色にも邪魔をせずに。ズツト通してやると云ふやうに持て居ねば。將帥心でなき也。扱常有は以て其儼を觀せんことを欲すとは。眞の剛力を眞に踏むやうにすると云ふこと也。一生涯この人を家來にして。叱りまはしてつかはうといふ心にならねば。眞に剛力を踏むやうに見えぬ也。眞にシツカリと實に踏むゆゑに。儼といふ也。今商家の見世先へ。買手來りて腰をかける。其商家の主人たるものは。買手の金を取りてまうけて。商ひをするものなれば。見世へ腰をかける人があれば。此人の金を取るつもり也。是を將帥心といふ也。左れども始めから金を取るといふ顔をすれば。買手は物を買はぬゆゑ。主人はトんと金を取らぬ顔をせねばならぬ也。辭も金はいりませぬといふやうな辭也。此心を士卒心といふ也。一體は此腰を

かけたる人の金を取ることなれども。先づ寒暖をのべ。扱茶をのませ。扱多葉この火を入れさせ。扱じぶんをさゝ酒を出す。是茶を出すも損也。ひまをつぶすも損也。飯酒を出せば。猶損也。損なれども。此損をするが。徳を取る筋也。故に商ひは出來ても出來ぬでも。トんとかまひませぬ。唯人に酒食を與へるが。嬉しうござるといふやうな顔つき也。いづれ此人。酒にせい飯にせい茶多葉こにせい。其家の世話になれば。遂ものを買ふ也。故に將帥心は。其人の金を取らうといふ心也。士卒心は。唯振舞ずきといふやうな心でなければ。商上手に出來ぬ也。如し士卒心飯を出さんといふ時に。將帥心それは損ぢやと邪魔をすれば。此商ひ出來ぬこと。安宅の關の如し。故に將帥心は上に居りて。士卒心の邪魔をせぬやうにして。士卒心を支配して居ねばならぬ也。弓を射。鐵砲を打つは。士卒の役目也。將帥は其上に居て。配り方を支配する也。弓の射やう。鐵砲の打ちやうにはかまはぬ也。士卒の邪魔をすれば。士卒一パイに働けぬゆゑに。敗軍になる。此將帥も士卒も。勝ち軍にさへなればよいといふ處は同じことにて。爲るわざは大にちがふ也。主君をだいじにする所は同じことなれども。將帥心は主君をたつとぶ。士卒心は主君を踏む也。將帥心は先きの金を取らうといふ。士卒心は損をして振舞はんとする。本の處は同じことなれども。如此二つにわけねば。此智を働かすこと出來ぬゆゑ。心を二つに分けて。一は妙を觀じ。一は儼を觀ずる也。

此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄。衆妙之門。

兩とは。將帥心と士卒心也。本は一つ心也。主君はだいいじ。金をまうけやう。是れ一つ心也。左れども末では二色也。主を尊ぶ。主を踏む。金を徳をする。損をする。尊ぶゆゑに踏む也。徳をせんとして損をする也。左れば踏むと尊ぶとは同じことか。徳と損とは同じことかといへば。事はちがふ也。故に異名と云ふ也。この同じこと、云ふは。心の同じこと也。内の同じやうなる也。形はちがふ也。外はちがふ也。内は同じことにて。外はちがふといふは。如何やうなるあんばいぞといへば。玄也。玄はやみの夜の色也。やみの夜といふものは。真くらにて。何もかも黒う見ゆる也。然らばやみの夜には。赤いものも白いものも。黒うなるかと云へば。左様にてはなし。外から見れば。一とうに黒う見ゆれども。やはり赤きは赤く白きは白き也。徳をするも損をするも。外から見れば。同じやうに見ゆれども。やはりシツカリと別也。主を踏むが主を尊ぶのなれども。外から見れば別也。外は同じやうで。各もちまへあると云ふ氣味を玄といふ也。始めには外がちがうて。内が同じやうぢやといひ。又外が同じやうで。内がちがふといふは。凡そ内外と二つに分けて。必ず一つにならぬやうにせいといひたいうゆゑに。内外は必ずちがふとして色々に説きて。説きわけたるもの也。心に腹の立つとき。顔も腹立ちがほをするを。一つになると云ふ也。心に腹の立つ時には。顔をにこやかにする。顔を怒らねばならぬことあり。此時には顔を怒らす也。顔を怒らす時は。心はにこやかにする也。ケ様にすれば。怒り深からず。怒り深からぬゆゑに。心をやぶることなし。喜ぶときも同じこと也。いづれ内外をわくれば。甚しからず。故に心に疵がつかぬ也。是を内外を分くると云ふ也。買手に酒をのますは。どう

か損のやうに見ゆれども。徳也。主君を踏むは。どうか不忠のやうに見ゆれども。忠也。やみの夜に白きものを見る。どうか黒きやうに見ゆれども。白き也。怒る顔をする。どうか怒りたるやうに見ゆれども。怒らぬ也。是皆玄の徳也。扱玄の又玄といふは。其内外をふりかへるを。今一ペンふりかへるといふこと也。一體ふりかへること。甚智なることなるに。其上を又ふりかへると云ふは。智の上の智也。昔し大石内藏介。主君の仇を報せんとて。晝夜心を碎く。ときに上杉家よりかくし目付を出して。大石の心を計るゆゑ。大石も晝夜祇園町へ入りひたりて。決して〳〵仇を報ゆるやうには見せぬ也。是内と外とは大にちがふ也。左れども大石一ペン此ふりかへをしたるゆゑに。今又主君の仇を報いんと思ふ人。又祇園町へ入りひたれば。世の人ソリヤ又大石ぢやといふにちがひなし。故に今度はクルリとふりかへねばならぬ也。是ふりかへたるを。今一ペンふりかへると云ふもの也。大石は祇園町へ入りひたりたるゆゑ。今度の智者は内に刀を磨ぎて居る。人が問へば。主君のあだを報せんと存ずる也と云ふ。世の人これを聞て笑ふ也。何ぞや。眞に仇を報ずる人が。何しに刀を磨がうぞ。其一大事を何しに他言しやうぞと云うて。油断させて。仇を報いるは。是れふりかへを又ふりかへたる也。商人なれば。此方のしろものは。やすうござると云ふは。ふりかへ也。此方のものは高うござる。高いゆゑに損じませぬといふは。是れふりかへを今一ペンふりかへたる也。如此ふりかへを又ふりかへるほどに。心を自由につかふことが出来れば。心のつかへぬことなし。故に衆妙之門と云ふ也。門とは。出てくる所と云ふこと也。

第二章 天下皆知美之爲美。斯惡已。皆知善之爲善。斯不善已。

美とは。目で見たとるところのうつくしき也。善とは。耳で聞きたるところのよき也。主君の前で。手をつき首をさげるは。うつくしき也。左れども安宅の關のときにさしつかふる也。うそをつかぬはよきこと也。左れども父の羊を攘みたるときにさしつかふる也。故に天下の人が。主君の前では是非手をつくが美なりと思ふが。安宅の關てしほりあげらるゝ始め也。うそをつかぬがよきことなりと思ふが。孔子に叱らるゝ始め也。美が不美になることもあり。不善が善になることもある。これが美これが善といふさまりはない。出合ひがしらによると思ふべきはすのこと也。小袖がよいといふは。冬に出合ひたる時のこと也。縮がよいといふは。夏に出合ひたる時のこと也。小袖にも縮にも。善惡はなし。出合ひがしらで色々にかはる也。これを相手次第でかはると云ふ也。相手次第でかはる證據は。下に段々にあげてある也。扱老子は皆韻を押ししてある也。此ところは知の字と美の字と叶韻也。善の上の知の字は。善の字と叶はねばならぬ也。辨の字のあやまりなるべし。皆善の善たることを辨ず。是不善のみとあれば。韻叶ふ也。

故有無相生

これ文法にて經傳の法といふもの也。經は本文也。傳は注文也。人の平生話をするにも。入りくみたることをば。是非この經傳の法にて話をせねば。分らぬこと多し。譬へば大石が主君の仇をうつた。

扱其計はかやう／＼と話す也。是れ主君のあだをうつたは本文也。其計はかやう／＼は注文也。大すぢをズラリとはなしておきて。あとで小わりをばなさねば。通せぬ也。故に大すぢのことを本文と云ひ。小わりのことを注文と云ふ也。有無相生は本文也。此下は注文也。有は無を生ずと云ふは。有がなければ無はなし。晝がなければ夜はなし。天下夏ばかりなれば。夏といふ名はなし。冬があるゆゑ也。これ寒といふ名は。熱が出してやる也。熱といふ名は。寒がつけてやる也。二階といふ名は。下屋がつけてやる。下屋といふ名は。二階がつけてやる也。下屋のない二階はなし。二階のない下屋はなし。是れ有と無とは。互に名をつけてやり合ふ也。

難易相成

成は成就する出来上ると訓ず。

これはむづかしきこと。是はやすきことといふきはまりはなし。寒の中に小袖一つ着てゐるは難ぢやと云は。巨燧にあたりてをる人から云ふこと也。裸で居る人とくらぶれば。小袖一つて居るは易也。裸は難ぢやといふは。衣類を着て居る人より見たる名也。水をあびる人から見れば。裸は易也。是れ相手次第で難にも易にもなる也。茶漬はむまうないといふは。鯛の味噌漬で食ふ人からいふ言葉也。物を食ふことならぬ男から見れば。茶漬は甚むまき也。凡そ平生苦しきことなどあるときに。其苦しきことより。又大にくるしきことゝくらぶると。苦しみ少しはゆるうなる也。風雨の時に。傘下駄で歩行するは苦しといふは。駕籠にのりてあるく男を目當にしたる辭也。傘下駄なしに。ぶぶぬれの男

から見れば。大にらくなること也。是れ天下に難易のきまりなし。相手によりて名きまる也。

長短相較

較一本作形是生成形傾叶詢也。

箸を一本出して。是れは長さか短きかと問ても。長しとも短しともいはれぬ也。針とくらぶれば長し。杖とくらぶれば短し。相手によりてかはるなれば。長しといはせんも。短しといはせうとも。自由なる也。衣類食物より萬事のこと。凡そ大名などくらぶれば。いつでも不足だらけ也。山奥の百姓離れ島の獵師などくらぶれば。いつでも此方は奢侈也。相手を取る時に。心を用ひて。己れを養ふべきこと也。形はあらはるゝと訓す。

高下相傾

傾は。たかびくあること也。かたゝがひの出来ること也。家の屋根を指して。高きか下きかと問ても。高しとも下しともいはれぬ也。門の屋根とくらぶれば。高し。堂の屋根とくらぶれば。ひきゝ也。天下にきまりたる樂もなければ。きまりたる苦しみもなし。くらべもの次第なりと思ふべし。

音聲相和

音は。立派なこゑ也。聲はザツトしたるこゑ也。今淨瑠璃をかたるこゑは。立派なこゑぢやと云ふは。話をする聲とくらべたる口上也。三味線のねいろとくらぶれば。淨瑠璃を語るこゑは。ザツトしたるこゑで。三味線は立派なこゑ也。三絃胡弓琴と合せたるこゑより見れば。三絃ばかりのこゑは。ザツトしたるこゑ也。是皆くらべもの相手次第にて。何となりといはせらるゝ也。和は。人の聲につゞきていふことゆゑ。返事をする事になる。何と返事をさせやうとも。自由ぢやといふこと也。三絃を淨瑠璃とくらべて。立派かといへば。誰にてもハイと返事をする也。三絃胡弓琴合せたるこゑとくらべて。ザツトしたる聲であらうかといへば。誰にてもハイと返事をするなりといふこと也。

前後相隨

今只一人ありきて。扱わしは先へゆく男か。後からゆく男かと問ても。只一人ゆくゆゑに。先とも後ともいはれぬ也。其人の先きへ行く人あれば。其人は後からゆく人也。其人の後から行く人あれば。其人は先きへ行く人也。後から行く人といはせんと思はゞ。先きへ人を一人立たするがよし。先きへ行く人といはせんと思はゞ。後から人を一人あるかせるがよき也。先とも後とも。いはせんと思ふやうにいはずこと出来るは。相手を取るゆゑならずや。今人の善を譽めんと思はゞ。昔の人の惡とならぶれば。今的人格別の善なうても。どうか善人のやうに聞ゆるは。相手に惡人を取りてならぶるゆゑ也。今人の惡を毀らんとならば。昔の人の善とならべて論ずるに如くはなし。今的人格別の惡なうても。どうか惡人のやうに聞ゆるは。相手に善人を取りてならぶるゆゑ也。隨は。あとにつきてゆくこと也。相隨は。或は先へ行き。或はあとから行く。隨ふもの次第なり。己れが人に隨ひ。人が己れに隨うて。名がちがふといふこと也。

是以^テ聖人^ハ處^リ無爲^ノ之事^ニ。

凡そ此書に聖人とあるは。堯舜禹湯文武周公などの類をさしていふにはあらず。天の理を得て身に行ふ人を云ふ也。智者といふ處へ。聖人と用ふる也。扱無爲とは。有爲に對する語にて。何もせず居るといふてはなし。自己流の無きといふこと也。天理に従ひて。己れを用ひぬといふこと也。有爲は理の外をすること也。こしらへごとく云ふこと也。故に無爲といふも。理といふも。天といふも。道といふも。神といふも。同じこと也。皆左なければならぬ理といふこと也。花でいへば。木咲は無爲也。室咲は有爲也。處は。おちつきて安堵して居る也。

行^フ不^レ言之^テ教^ヲ。

世界があかるうなれば。人々晝といふ。暗うなれば。人々夜といふ。是を不言の教へと云ふ也。此方より觸れをまはし。無理無體に人を直にするは。言うて教ふる也。自然に人々直にならねばならぬやうになりて。直にせいといはずに人を直にするを。不言の教といふ也。左様ならば弃ておくかといふに。弃てゝおきては。人々直にならぬ也。あかうなるゆゑに晝と人々いふ。暗うなるゆゑに人々夜といふ。觸れて叱りて而後にいふにはあらず。譬へば人を東の方へ歩ませんと思ふときに。東の方へゆかれよといふは。下手辨舌也。東の方へ其人の心でゆくやうに。此方にていひまはす也。或は西の方には強盜が出るといふ沙汰ちやとか。狼が出るといふ沙汰があるとかいふ也。其人左様ならば東へ行か

うというても。まだく、此方の辭について。東へ行くやうなるゆゑに。又是を消す也。イヤ／＼決してわしは東へゆかれよとはすゝめぬ。唯西の方にかやうのことある沙汰ゆゑに。フトはなしたる也。決してわしはどちらがよからうといふやうなことはいはぬといふ。時に其人も。イヤ／＼これはわしが心から東へゆかんと思ふなりと言はせて。己れが言を消してしまふが。不言の教へ也。民を御するも其通りにて。上よりケ様にせいといひつくれば。民はいやがるもの也。民の爲になるやうにと世話をやけども。民は不智なるものゆゑ。己れが氣儘にすれば面白がる。上のいひつけちやといへばいやること。古今一轍也。ゆゑに不言の教にて。民をやりたいと思ふ方へやると云ふこと也。

萬物^ヲ作^ラ焉^レ而不^レ辭^セ。

凡そ世の有様を流行といふ。日夜に流れて息むことなし。定りたるかたちなし。色々種々にかはりて流るゝ也。左れども其理にはちがひたることなし。理の變ずると云ふことはなきこと也。唯此方の受取りやう次第也。譬へば風の日夜かはりて定りなきが如し。唯此方の取扱ひやう次第にて。福にも禍にもなる也。風の方には禍福なし。此方の受けやう也。宮の驛より桑名までは。海上七里也。宮は東にて。桑名は西也。宮より桑名へ渡るに。東風を順風とす。梶をまともにする也。南風北風は横風也。梶をひらきにする也。ひらきとは。鱧を桑名へむけるゆゑ。帆は船と同じやうに。ま横にかゝるゆゑに。船はへさきの向ひたる方へ走る也。西風は逆風也。梶をまぎりにする也。まぎりとは。ひらきに

して少しづつ風上の方へ行くあやすぎに走る也。一たびは南。一たびは北。だんくんに風上の方へ走る也。桑名より宮へ渡るは。西風を順風まとも也。南北風はひらき也。東風はまぎり也。是にて西東北南にかまはず。風さへあれば。宮より桑名へも渡る。桑名より宮へも渡る也。是れ風を自由につかふ法也。風がなければ。仕方なし。風さへあれば。何風にてもつかはるゝ也。然れば天下國家を治め。己が身上をようせんと思ひさへすれば。年中何風か吹く也。天下の流行。一つにても此方の役にたぬことなし。唯此方でつかひやうを知らぬゆゑ。役にたぬせぬ也。諸國に火事ありても。早魃でも。水損でも。皆取り扱ひやうにて。此方の金まうけの用にたつこと也。今は世の中がわるいから。扱わしは運がわるいから。立身もできぬ。身上もようならぬと云ふは。順風ならてはのりえぬ男也。智者などは中々左様なことなし。何風にても。風さへあれば用に立つる也。其證據には。今時急に立身する人もあり。急に金持になる人もある也。皆世の罪運の罪にあらず。且船の覆るは。多くは順風の時也。人の世に居るも。此順風こそ畏るべきもの也。ひらきまざれに覆船なし。時節六ヶしう運つたなきものには。覆船なしと知るべし。是を萬物作りて辭せずといふ。作るとは。あそこでは早魃。こゝでは火事といふやうに。ドロくんと種々のことの出来る也。辭はことわりを云ふこと也。上手の水主は。風にことわりをいふ風なし。何風にても。風さへあれば。皆此方の用に立つると云ふこと也。

生而不有。爲而不恃。

江戸より十里西に河肥と云ふ城下あり。此城下に横田何某と云ふ金まうけの名人あり。今は八十餘の老人也。わかきとき江戸へ商に來り。兩國橋にて奈良茶飯をかうて食へり。此飯は。汁もあり平もあり。飯は一櫃にて三十六文也。此男右の飯をかうて食ひしに。平皿の中に椎茸甚澤山あり。此人思ふに。ケ様に椎茸を澤山につかうては。引合はぬはず也。是は決して此節椎茸の相場。甚下りたるものならんとて。其もどりがけに。乾物問屋へより。椎茸を金五兩だけかひて。金をわたし。封印をつけて。河肥へかへる。此は大身上の人ゆゑに。忘れて其後に江戸へ出で。右の乾物問屋の前を過ぐるにつけて思出し。椎茸はいかゞやと問ふ。問屋の主人。大に感心して譽めて申しけるは。あの椎茸を金八兩にもらひ申したし。扱々すさまじき眼力なりとて。金八兩にて買ひし也。此人の物語りには。是は極々小さき商なれども。まうけやうが面白きゆゑに覺えて居るなりと語りし也。是を生じて有せずといふ也。朝夕に人に逢ひ事に遇ふに。皆かくの如くに立身金まうけ。扱は藝の上る手だてにあへども。此方の油断多きゆゑに。とりにがす也。扱たましく取りにがさずに取り得れば。それを忘るゝことならず心中におきて。自慢ごゝろにて人にも語り。心の中にもその手がらをよろこびて。何べんも心中にてさらへて居ること人情也。されども大にひまつぶしのこと也。此河肥人も此手がらをわすれずば。其内にどのやうな金まうけありても。心ふさがりて心づくまじき也。手がらを生じては忘れ。生じては忘れするは。手がらは其事ばかりにあらず。至りて事多きことなれば也。手がらはしずつて。又外の手がらを取るやうにするを。生じて有せずと云ふ。有とは。己れが所持にすると云ふ

こと也。どのやうな手がらを取りても。すぐに忘れて。所持して居らぬと云ふこと也。爲して恃まずと云ふも。同じ心也。恃とは。心たのみにすること也。これほどくの手がらあれば。大方これほどく金のまうけあるであらうと。此をあてにすること悪しきことなりと云ふ也。

功成^ラ而弗^レ居^ラ。夫唯弗^レ居^ラ。是以弗^レ去^ラ。

人情は人に譽めらるゝことを好むものゆゑに。功があれば。それをいつまでも心にちきて。心で獨りじまんをして居る。扱又人に逢ても。唯己れが功をはなしたきもの也。是甚ひまつぶしのこと也。其自慢ばなし自慢ざらへをするひまに。又外の金まうけを考ふべきはずのこと也。大晦日になれば。元日の支度をする也。雑煮くひつみ。禮に出る衣服まで。チャント揃へてちきて寐る也。故に元日には手支なしに。雑煮も支度あり。くひつみ禮服までも。支度そろひてをる。此自慢を心てさらへ。人に逢うても自慢話をすれば。自慢で日がくれてしまふ。故に二日には大に手まはしあし。此自慢をするひまに。二日のことを取そろへておけば。二日にも又手をつかぬ也。此を功なりて居らず。それたゞをらず是を以て去らずと云ふ。去らずとは。いつまでも功はつきてをりて。己が身を去らぬと云ふこと也。年よりたる時のことは。若き時に支度をしておき。來年のことは今年。來月のことは今月。明日のことは今日。凡そ順ぐりく。よほどまへのことを支度するゆゑ。智慧者は自慢するひまなきはず也。自慢するひまなきゆゑ。自慢すべき功をば。いつも身にあるなりといふこと也。

三章 不^レ尚^レ賢^ニ。使^ニ民^ヲ不^レ爭^ハ。

尙は。くはふると訓ず。其上へおくこと也。故にたつとぶと讀む。賢者をば人の上席にすうると云ふこと也。賢は行ひのかしき也。智は心のかしき也。賢は此方でいふキョウといふ場にあたる。器用とは。身のとりまはしのかしき也。行ひのかしきものを。上席へぬきんでおくこと。甚あしきこと也。如此にかしきことをたつとむと。世人皆かしきことをつとむる。扱かしきといふには。程はなし。今までの上席の人は。天下の賢でありたれども。又大賢出づれば。其上におく也。又大賢出づれば。又其上におく。如此するときは。下々のものが。皆かしこうなる。下々皆かしこうなると。上の手には。トントあへぬ也。下は愚がよき也。上は智がよき也。凡そ人は皆同格也。上の人も人も。下の人も人も。人が人を自由にせんとすることは。元來六ヶ敷こと也。今指は腕より小さきもの也。故に腕の自由に指をつかふこと也。如し指の大きさ腕ほどあらば。何とて腕の自由にならうぞ。下は愚ゆゑに。上の自由になる也。如し下の人上の人と同じかしきならば。何とて上の自由にならうぞ。扱是は天下國家を治むるときの話にて。輕きものゝ役にたつ話にあらず。是を役に立つやうに説かんとらば。人の身にとりては。心は上也。目鼻口は下々の民也。目鼻口は随分愚なるがよき也。心は随分智なるがよき也。心は智に。目鼻は愚てなければ。心の自由にならぬ也。目鼻は智になりやすきものにて。心は智になりくきもの也。山家の民は。都へ出でぬうちは。山家の食を美

食と思ひて居れども。一度都へ出で、都の食を喰へば。山家の食はくへぬ也。是れ口の智になりて。心の自由にならぬ證據也。田舎人都へ出でぬうちには。田舎の女を美人と思ひてをれども。一度都へ出で、都の女を見れば。再び田舎の女はよろこばしからぬ也。是れ目の智になりて。心の自由にならぬ也。それを何ぞや。食物を喰ひ分るを自慢し。女的美醜を分るを自慢することぞ。皆わざ／＼心の自由にならぬやうに目鼻をそだて養ふといふもの也。争とは。我先きにと争ひすゝむ也。是れは海で死にたる魚。是は船で死にたる魚。是は魚屋まで生きて來たる魚とくひ分くるを。争ふといふ。如此争ひ進みて喰分くるやうになれば。後には俎の上で死にたる魚より外には旨うないといふもの也。魚に旨き魚少なければ。年中旨うないものばかり喰うて。不足タラ／＼の世の中なるべし。茶多葉粉の類も。一度よろしき品をのめば。再び下品へはかへられぬ也。是れ鼻口目の智になるは。身上破滅の基也。鼻口の智になるは。身の上榮え安樂になる基也。

不_レ貴_ニ難_レ得_ニ之_ヲ貨_ヲ。使_ニ民_ヲ不_レ爲_ニ盜_ヲ。

貴は。たつとき者をたつとむ也。故にたふとがると譯す。尊は。たつとからぬ者にても心にたつとむ也。故にありがたがると譯す。貨は。たからもの也。しろもの也。金銀珠玉は。天下の得がたき品也。故に盗人の罪に落つるは。金銀ゆゑ也。金銀たつとうなければ。誰も盗むものあるまじ。是れ罪人のあることなき世也。目が智になり。口が智になるゆゑ。得がたきものをほしがる也。皆鼻口目の智に

なるゆゑ也。目口鼻の智になるは。盗をする始まり也。田舎の女は見られぬ。山家の食はくはれぬ。是よりだん／＼智上達して。女は大夫でなければならぬ。魚は俎の上まで活きたのでなければならぬといふ。盗まいで何んぞ得られや。畏るべきの甚しき也。

不_レ見_ニ可_レ欲_ス。使_ニ心_ヲ不_レ亂_ス。

目は色をほしがるはずのもの也。鼻は香をほしがるはずのもの也。口は味をほしがるはずのもの也。知れたること也。故に始めより見せぬやうに用心するに如くはなし。一度見れば。もはや智になりて。心の自由にならぬゆゑ。見せぬほどのことなし。心の自由にならぬのみならず。心をひつぱり出して。心を自由自在につかふ也。是れ家來が旦那を自由自在につかふといふもの也。家の亂れ國の亂れ身の亂れ。皆君臣位をかへて。權威下へ移りたるゆゑ也。是れ下は愚で。上は智なるでなければならぬ證據也。心は智で。鼻口目は愚でなければならぬ證據也。

是_ヲ以_テ聖_ノ人_ノ之_ヲ治_ハ。虚_ニ其_ノ心_ヲ。實_ニ其_ノ腹_ヲ。

そこで智者の治め方は。天下にせい。國家身心にせい。必ず二つに分けて。一を君と定め。残りは臣と定めて。君は臣をつかふ職。臣は君の仰せを守りてつかはるゝを職とする也。心の中にも志を君とす。志は心の思ひ込むところ也。扱さむいあつい。飲みたい食ひたいと思ふ心を臣として。志の軍配を待ちて働く也。其心を虚にするとは。即妙を觀ずること也。大將は弓の世話をやくものとも。鐵砲

の世話をやくものもきはめずに。總體のきりもりをするものなれば。弓を知らいでも。鐵砲を知らいでもよし。總軍配をして。己れが藝に名をつけぬものゆゑ。虚にすと云ふ也。義經の命さへ助くれば。踏まうが蹴やうがかまはぬと云ふ心を。總大將の心とする也。其腹を實すとは。下働きをするものは。總きりもりをせずに。己れが一役をシツカリと勤むると云ふこと也。即ち其敵を觀する也。心とは將帥心のこと。腹とは士卒心のこと也。義經を今踏む心也。見世のかひものかひに。酒をのませ茶をのまする心也。是は當時さしあたりたる役目を。わき目もふらずに。シツカリと身に入れてすると云ふこと。ゆゑに實すと云ふ。實すとは。紙袋へ風を吹き込みたるやうに。瓜茄子にみの入りたるやうに。シツカリと張る心也。をしげも無く。グットちからを入れてする心也。

弱^ニ其志^ヲ。強^ニ其骨^ヲ。

志は將帥心也。骨は士卒心也。弱はもろき心也。物のさはりにならず。自由自在になる心也。木よりは水は弱也。水より風は弱也。風よりは烟は弱也。烟より晝の色は弱也。即ち其妙を觀する也。強は弓に従ひて。引つぱりづよきこと也。ねばりつよきこと也。即ち其敵を觀する也。

常^ニ使^ニ民^ヲ。無知無欲^{ナラ}。

天下か國ならば。民の愚で物すきのないやうに養ふが。經濟上手也。心ならば。下働きの心が愚で。物すきのないやうに養ふ也。即ち目口鼻の知にならぬやうにする也。民は心の鼻口目也。飲みたい食

ひたいといふ心は。志の民也。

使^ニ夫^ヲ智者^ヲ。不敢^テ爲^ス也。

天下か國ならば。下々の人々に智者できるは甚悪し。つかひにくき也。智者あれば智者まかり出で。きりもりをする。上のきりもりを受けぬゆゑ。上の邪魔な民也。心ならば。鼻口目がまかり出で。きりもりをする。今日食物でドラをうち身を亡す男は。即ち口がまかり出で。きりもりをしたる也。女でドラをうち身を亡す男は。是れ目がまかりで。きりもりをしたる也。敢は。果敢の意と解して。思ひきつてと云ふこと也。果斷決斷を下々の民がするは。政を亂す始め也。上のきりもりを受けて。上の決斷を守りて。是れで亂るゝことは無きこと也。

爲^ニ無爲^ヲ。則無^シ不^レ治^ス。

無爲とは。前にいひし如く。自己流のなきこと也。働きたての無きこと也。今まん丸まつ角といふは。無爲也。丸すぎたるは。いびつ也。角すぎたるは。ひづみ也。世話をやきすぎたるは。亂れ也。唯することながら。天の理の通りにゆくがよき也。ちか路は過ぎだる働き也。諺にいそがばまはれと云ふ。過ぎぬやうにせいといふこと也。天の理の通りにして。自己流を出さず。働きたてをせず。過ぎたる世話をやかねば。よう治まる也。おとなしすぎたる小兒は。虚弱天死の相也。おとなしすぎたる少年は。ゑては大ドラものとなる。兎角人情に過ぎぬやうに。是れ天の理也。天の理は過不及なし。まん

中也。まん中が此上もなき智也。過は不智也。不及にちがひたることなし。孔子の語に。過ぎたるは猶及ばざるが如しと。丸にすぎたるも。いびつ也。及ばぬのも。いびつ也。

道^四冲^{ニシテ}而用^フ之^ヲ。或不^レ盈^ク。

冲は。ンは天と地と也。天と地との中を冲と云ふこと也。故にひいと訓す。鶯などの。天と地との中に。ヂツとしてゐるやうに舞ふを。ひいと云ふ也。即ち天と地との間のこと也。冲にして之を用ふとは。左なければならぬ筋と云ふものは。萬物に皆あるものにて。草木禽獸土石までも。此左なければならぬ筋のなき者なし。捻花といふは。釋尊が阿難尊者に道を傳へ給ふ時に。花をひねりて見せたまふ。阿難即ち悟れり。是花一りんまでも。左なければならぬ筋はあるものなれども。其筋の動かさぬやう働かせやうは。悟らねば知れぬなりと云ふこと也。天地の間には。萬物多けれども。何にも此筋は具足してある也。天地の間は皆筋なれば。筋はヂキに知れるものかといへば。左様ではなし。此を探り搜して採出す人にあること也。故に之を用ふと云ふ也。筋は天地の間に一パイみちてあれども。之を用ひやうあること也。用ひねば。何一つ用いたぬ也。用ふればたらぬと云ふことなし。探り出さねば出てぬ也。故に或は盈たずと云ふ。或とは。似たりといふこと也。みたざるに似たりといふほどのこと也。盈はみつると訓すれども。滿の字とも充の字ともちがふ也。譬へば一升入りの器に。一升ものを入れたるを。みつるといふ。是れ盈の字の意也。一升入りの器に。九合入れたるも。みつると云ふ。是れ充の字の義也。一升入りの器に。一升一合もりあげたるも。みつると云ふ。是は滿の字の意也。天地の間に筋は盈ちてあれども。筋はどこにあると。心をもくだかず探りもせねば。知れぬ也。故に盈たざるに似たりと云ふ。此以下は筋を探り出す方也。

淵^{トシテ}兮^ニ似^ク萬物之宗^ニ。

淵は。水の湧出づる本源の名也。至りて小さき川にても。細き流れにても。だん／＼川上へ／＼とくりあげ／＼して。推して尋ね見れば。水の湧出づる本源へ行かねばならぬ也。事物の筋も。今の所で見れば。知れぬやうなれども。其まへはいかゞ。其まへはいかゞと。前へ／＼とさかのぼれば。是非に其本源の始めて出来る所へゆかねばならぬ也。扱本源にゆきつきて。其末をふりかへりて見れば。事物の筋見ゆる也。譬へば天下の政。グト／＼してもつれて。治まりかねる時に。治むる人。此後を見て世話をやく故に。亂れたるわけ合ひ知れかねる也。其むかし／＼とむかしの方へたぐりのぼりて。扱ふりかへりて見れば。其亂の湧出づる所知るゝ故に。亂をいやす仕方もしるゝ也。訟の判断喧嘩のとりさへにても。今のことよりだん／＼に其まへ／＼とおして。湧出づる源へつきて。今の處をふりかへりて見れば。曲直勝敗のわかること。淵源にゐて末流を察するとはり也。宗とは。本系圖の嫡々の筋のこと也。流れ或は小川は枝川也。小枝川よりさかさまに前の方へおして行くゆゑに。小枝川より枝川へ出で。枝川より本流へ出づる也。今の人其親父より祖父。祖父より祖々父と。だん／＼に上

へくとおせば。トントの先祖へ行きつく。先祖へゆきつきて。今をふりかへりて見れば。系圖クワ
ラリと分かる也。故に萬物之宗と云へり。

挫^キ其^ノ銳^ヲ

然れば天下の事物の筋と云ふものは。推せば推さるゝものにて。綿々とながりて。繩をたぐりて見
るやうなものかといへば。イヤくそんなことではない。其筋の通りたることは。曲げてもへしても。
五分も五釐もそのつかれぬ者なれば。針の尖のやうな微細のこぐちでも。筋はズットつらぬきて。
五釐もかたよらぬものぢや。銳は。針の尖のするどきやうな。トントのさきを云ふ。挫は。くじく也。
ズット遠慮も會釋もなうズット通りたる譬へ也。

解^キ其^ノ紛^ヲ

紛は。絲のこぐらがりたる也。あそこでは結ばれ。こゝでは亂れ。ときにくきものなれども。始めに
一すぢの絲のこぐれたるのなれば。丁寧に一々に其すぢを尋ねくして解けば。解けぬことはなきこ
と也。扱筋といふものは。針の尖りをさへも。遠慮會釋もなう貫くほどのものなれば。まつすぐにあ
りく見ゆるものかといへば。イヤくさうばかりではない。絲のこぐれたるやうに。入り組みた
る筋もあれども。是も入り組みたるに隨ひて尋ね求むれば知るゝなりと云ふこと也。譬へば今忠の字
の筋などは。是は忠は不忠と。ありく見ゆるやうなれども。是も時によること也。或は味方の

人。敵へ降參して敵の腹中をさぐる事。平生ともにあこと也。敵へ降參するは不忠のことなれど
も。敵の腹中を探り見んためなれば。やはり降參するが忠也。是れ絲のこぐれたる筋也。丁寧に解き
て見れば。やはり忠の字の筋也。

和^シ其^ノ光^ニ

然らば絲のこぐらがるをとくやうに。一筋リンと分るものかといへば。まだくそのやうなことは
ない。見えにくい筋もある也。光に和するやうなのがある也。光は日輪の光りも。蠟燭の光りも光也。
土用の中の日中に。蠟をつけてひなたへ出せば。蠟の光は見えぬ也。和は。禾に従ひ口に從うて。吸
物あんばいに。醤油と水をひとつにする事也。此吸物鹽梅といふもの。甚面白きもの也。醤油でも
なし。又水でもなし。一つになりて一とうに和したるが。吸物あんばい也。日輪の光と蠟の光と。一
とうに和して一つになりたるを。和光といふ也。譬へば敵へ降りても。真に降りたるのか。此方の腹
中を探り見んためか知れぬゆゑに。降りたる人を疑ふ也。降りたる人は。真に降りたる證據を見せね
ばならぬゆゑに。起請文もかく也。またく己れが味方の内證話をも敵へする也。左様なければ真か
虚か知れぬゆゑに。真に降りたるやうにする也。是れ蠟の光は。己れが忠の字也。日輪の光は敵の威
光也。敵の光に己れが忠の光を没入してうちこみて。トンと己れが忠の字は見えぬやうにして。忠を
する人あり。是を和光といふ也。今博奕をする人に異見をし。酒を飲む人に異見をするには。先づ己

れが博奕仲間に入りて博奕をなし。酒呑仲間に入りて酒を呑んで。それからそろ／＼異見をするは。和光也。

同_ス其_ノ塵_ニ。

和光は。ナルホド巧みなる見えにくき筋なれども。少し暗き所へ入れば。忽ちに蠟の光り別に見ゆれば。まだ／＼そのやうなことはない。人の目に見えぬ忠のこともあり。敵陣へ降参するのみならず。敵に内證ばなしをするのみならず。敵と一所に味方をせめて。味方の雑兵の首などを取りて。敵に口することなどあり。是を同塵と云ふ也。同塵とは。譬へば東の方にも西の方にも。ゴモクが積んである。誰が見ても。東西ともに積みたるゴモク也。東のゴモクの下には。玉をいけておき。西のゴモクの下には。土の丸をいけておけば。上べからはトンと知れぬ也。此ゴモクを起しかへして見て。玉を見る也。玉は忠の字也。如此に忠の字を心の根へいけおきて。上べにはトンと見せぬことあり。されどもゴモクの下に。現在に忠の字あれば。やはり忠の筋也。ケ様な筋もあり。これは筋のズツトとさがしにくきすぢあるを云ふ。

湛_{トシテ}兮_ニ 似_ニ 或_ハ 存_{スルニ}。

湛は。しづむ也。存は。ながらへると訓ず。亡の反對にて。無うなりてはしまはぬと云ふこと也。扱ゴモクの中へ玉をうづめておきたるやうな忠は。一向に人目に見えぬゆゑに。是が忠の筋の。至極こ

み入りたる巧なる筋なれども。ゴモクをさがしかへして見る男があれば。あらはるゝ也。故に又其上に一段高き巧を立つるを。湛として存することあるに似たりと云ふ。是は其玉を深きふちへうちこみてしまひたると云ふこと也。忠の字が胸にあれば。どうもあらはれてならぬゆゑに。其忠の字を真に深き淵へうちこみてしまひたるやうにする也。己れが心も。先づ真に敵の味方になりたるやうな心になると云ふこと也。左様ならば忠の字は。やめにしたるのかと云へば。左様ではない。リント忠の字はあるにちがひない。淵の底にある。誰が来て捜して見ても。決して／＼捜し出すことはならぬ。是れ極々の巧みなる筋也。如此筋と云ふものは。つかうて見れば。至つて巧みなるものにて。是も天の理。あれも天の理也。左れば天の理と云ふものは。中々ザツト見たる上で知れるものにあらず。極々面白きもの也。人の頭を無理に打てば。又己れが頭を無理に打たるゝはず也。五分も五厘も。理はかけねもまげもなきものなれども。如此からみこぐれてあるものゆゑに。あからさまには知れぬはずのこと也。あからさまに知れぬゆゑに。先づザツトしたるものと覺えて。無理なることをするは。大に損なることなりと知るべし。

吾_レ不_レ知_ニ誰_ガ之子_{ナラフ}。象_ニ 帝_ノ之_ノ先_ニ。

それはナルホド巧みなることぢや。左様に己れを自由にすると云ふは。知の至れることぢや。如何すれば。そのやうに己れを自由につかふことが出来ること云ふに。是れに傳授のあること也。己れが身に

己れが魂を入れおくゆゑに。己れを自由につかふことがならぬ也。今己れが頭を打たれば。忽ちにムツト腹が立つ。必ず腹を立つまいと。よくよく思案し。兼て用心してをりても。頭を打たれば。是非怒ること人情也。人情をひかへてをることならぬは。己れを己れぢやと思ふゆゑ也。己れを己れぢやと思つて。思ひかへることがならぬは。魂を腹に入れおくゆゑ也。故に智者は先づ己れが魂を天へあげて。己れを觀ることを修行する也。己れを知ることのならぬは。己れが腹にあるゆゑ也。韓非にも。智はよきものなれども。目のやうな智は悪しと云へり。目は他の物をばよう見れども。目を見ることならず。己れが心も。他の物をばよう考ふれども。己れが心を考ふることならぬは。あしきこと也。人のよしあしはよく考へ。扱よう見え。扱よう異見をもする也。己れがよしあしは。トント考へず。扱一向に見えず。扱一向に異見を加へぬゆゑに。人をば智にすることなれども。己れを智にすることはならぬ也。人を智にすることなるは。人を見ること出来るゆゑ也。己れを智にすることのならぬは。己れを見ること出来るゆゑ也。故にまづ己れを知ること第一也。己れが顔は。どのやうな顔ぢや。己れが聲は。どのやうな聲ぢや。己れが行きぶりは。どのやうなあるきぶりぢや。人と應對をするときは。どのやうな應對のしやうぢやと。これを知ること第一也。是を知らうとするゆゑに。いつか己れが心。己れが身の外へ出づることを修行する也。己れが心。己れが身の外へ出で。己れが身を見ること。他人を見るやうになるを。心を天へあげておくこと云ふ也。今人形の頭を他人が打てば。己れは怒らぬ也。己れを打てば怒る也。如し己れを見ることさへ出来れば。是れ己れを他人にす

ること出来る也。己れを他人にすること出来れば。是れ己れを他人の通りにすること出来る也。今他人の頭をうてば。己れは怒らぬなれば。是れ己れが頭を打たるゝ時に。怒らずにゐらるゝ也。如此に人情のたへられぬことをたへるやうに修行するは。己れをつかふため也。己れに勝つといふも此事也。己れに勝つといふは。己れを自由自在につかふこと也。孔子の克己と仰せらるる。即ち魂を天へあげて。己れを他人にして見る法也。己れが魂トクト天へあげて見れば。己れは他人也。又魂天にあれば。誰が魂といふことなし。魂は獨りばたらきをする事出来る也。此魂を八兵衛に入れば。八兵衛が己れ也。木に入れば。木が己れ也。草に入れば。草が己れ也。そこで智者は天下の萬物の情を知りて居る也。平生萬物に魂を入れて。萬物になりて見るゆゑ也。孟子に己れが性を知れば。他人の性を知る。他人の性を知れば。禽獸草木山水雲霧の性を知る。かくの如く知れば。天を知ると云へり。是皆魂を天へあげて。色々の物に己れが魂を入れて見て。色々の物になりて見る法也。孔子も孟子も。皆此法の外にはなきと見えて。皆己れが魂を出して。他人の通りに己れを見る法也。吾誰が子なることを知らずと云ふは。己れを他人と一しよにおくゆゑに。ドロ／＼と天下にならびゐる人は。唯他人ぢや。何といふ男か。一向知らぬといふやうに。己れを他人にせいと云ふこと也。故に吾誰が子なることを知らずと云ふ。扱帝の先に象れりと云ふは。心を天へあげておくべしと云へども。心の住居なければならぬもの也。然れば吾が吾れとするものは。何がよろしきや。何物を吾と定めて。魂をかりにおくべきやといへば。天帝の御先祖さまぢやと思つて。天帝の御先祖の身をかりて。これ

へ己れが魂を入れておくがよき也。左すれば平生極々高きところから。一と目に天下を見たらして。己れをもズツト見おろし。極々の微少の身也と。己れを見さげ見くだし見くびる也。己れを見くびることが出来れば。己れの悪しきことはよく見ゆる理也。己れの悪しきことが。よう見ゆるやうになれば。己れをつかふことが自由になる也。己れをかはゆがりたり。己れをたつとがりたりしては。トンと己れの悪しきこと見ゆる氣づかひなき也。他人の悪しきところを見出して。笑はうと思ふ心。是又人情也。他人の悪しきところを見出し。笑うて異見を加ふるは。是れ他人を愛する也。己れが悪しき事は。ストンと弄ておきて。異見を加へぬは。是れ己れを惡む也。他人を愛して己れをにくむは。さりとはアハウなること也。又人情にそむけてをると云ふもの也。故に人情をおさへるが人情にあふ也。人情を抑へずに。人情のとほりにするは。却て人情には合はぬ也。すれば心をすて、養はずにおけば。己れがいやぢやと思ふこと。身につき來るはず也。磔獄門死罪より追放ところばらひ遠慮あやまり證文赤面に至るまで。皆心を養はずに。人情のまゝに行ひたるゆゑに。人情の大きらひなこと出來れる也。此老子の心を十分一。百分一。萬分一得ても。不吉のことは來らぬはず也。不吉の來らぬは。即目出度きこと云ふべし。

老子國字解卷一終

老子國字解卷二

五章 天地不仁。以萬物爲芻狗。

學問の古とちがひ。埒もなきものになりたるは。字の義のまちがひたるより起れり。仁の字は。イに従ひ。二に従ふ字也。二は天と地となり。易の上三爻下三爻も。上の一は天也。下の一は地也。中の一は人也としたるもの也。仁の字は。天地の理に少しもちがはぬ人を。仁と云ふ也。天地の主意は。何ぞといへば。天地の間のもの。生育するやうにしたりるもの也。左れ共こぎてすて、ある木をば。いかすことならず。早魃も水損も。一向に無うすることはならぬ也。左れ共天地の間の萬物をにくみて。早水あるにあらず。愛するゆゑに早水ある也。親の善く子を愛するものは。必ず責むるやうにする也。愛するゆゑに責むる也。善く天下の人を愛するものは。刑罰を嚴にして。罪あるものを殺す也。愛するゆゑに殺す也。扱後世の人。仁の字の義を知らず。涙もろきを仁と云ふとおもへり。是れ子をあまやかす親也。子しまひには罪にかゝる。子を罪にかくるは。不慈の親也。罪人を殺さぬは。民をあまやかす。法を犯す民。澤山に出來て。國亂れ兵亂に及ぶ。是れ民をむごうする也。後世の仁の字は。子をも民をもむごうする事也。古の仁字は。天地にならうて立てたる法政の通りになること也。それゆゑに老子は。儒者の愚なることを憐んで。此篇を述べたり。先第一に。事物に大小あることを

知るべし。天の理は。かたかしぎなきことを知るべし。大仁はようて。小仁はあし。儒者のいはゆる仁は。小仁也。かたかしぎ也。無き道理也。天には晝夜寒暑と。必兩方あり。かたかしぎなるなし。人のうれしがることばかりにて。いやがることなしと云ふは。かたかしぎ也。うれしがること五つあれば。是非にいやがることも五つなければならぬは。天の理也。大仁は必ず不仁を兼ねたるもの也。其證據をいふべし。儒者は天地の仁なることばかりかぞへて。不仁なることをかぞへぬ也。理を知るこのならぬ筈也。天地の不仁なることを。かぞへて見すべし。先萬物は皆芻狗のしかけ也。芻は草也。狗は凡てけだもの、事也。才はいきもの也。句はまがりたること也。獸の形はかまがりたるものゆゑに。狗と云ふ也。扱天があたゝかになり。地より氣を通ずれば。草がはえる。儒者は是を見て。ヤレ／＼天地は仁なものぢや。草のはえよいやうに。雨露濕氣がありて。草を愛せらるゝといふ也。左れ共獸がその草をばムシヤ／＼と喰ふ也。獸にムシヤ／＼と喰はするは。不仁なることにてはなしや。儒者亦獸を見ると。又感じて。ヤレ／＼天地は仁なものぢや。やはらかい草をはやして獸にくはするといふは。獸を愛せらるゝと云ふ也。左れ共又民人はこの獸を打殺して喰ふ也。民人にうち殺させてくはせると云ふは。不仁なることにてはなしや。天地の萬物みなこのしかけ也。かた／＼に仁をすれば。かた／＼には不仁にあたる。仁ばかりにて不仁なしと云ふことは。決してなきこと也。仁あれば。不仁は是非／＼あること也。今谷風と小野川角力をとる。谷風勝てば。小野川まけ也。兩方勝ると云ふことなし。谷風へ仁なれば。小野川へは是非不仁也。不仁の方を數ふれば。かくの如し。

聖人、不仁、以百姓爲芻狗。

扱民人どもが獸をうちころして喰ふを見れば。又儒者は感ずる也。ヤレ／＼聖人は仁なものぢや。烹燒のことを教へて。むまい獸を民人にくはせらるゝ。是れ民人を愛せらるゝのぢやと云へども。うち殺さずるといふは。なんと獸へは不仁なことにてはなしや。今百姓でも暑中に田の草をとりては。暑氣にあたりて死す。寒中に耕しては。寒にあたりて死ぬ。これにて米が出来れば。米は民人の命也。民人を寒暑で殺して米にして。其米をムシヤ／＼喰へば。是れ民人をムシヤ／＼喰ふ也。民人に獸をくはせる方をかぞへれば。仁なれども。民人を聖人が喰ふ方をかぞへれば不仁也。仁と不仁と半分まぜなることは。天地の理也。かた／＼あげていふは。大たはけのこと也。故に大仁は仁五分不仁五分と。始めから算用してかゝる也。五分苦勞をせねば。五分樂はとれぬ也。苦勞なしに樂をせんと云ふは。盜をすゝむる也。不仁なしに仁を取らんと云ふは。亂をすゝむる也。谷風小野川兩方を勝たせんと云ふことは。喧嘩をすゝむる也。

天地之間、其猶橐籥乎。虛而不屈。動而愈出。

橐は。底のなき箱也。故に底のなきふくろをも橐と云ふ。ゆきぬけたるもの、名也。籥は。笛也。橐は。鍛冶屋のフイゴ也。此のふいごと籥は。中の空なるもの、扱風が出で聲の出るもの也。然らばふいごの中に風あり。籥の中に聲あるにちがひなし。左れどもふいごを取りくづして見ても。籥を取

くづして見ても。風も聲もなし。左れどもふいごの舌を動かせば。風出づる也。笛を息にて吹きこみ責むるやうにすれば。聲出づる也。ふいごも笛も。中は空なるものにて。動かし責むれば。風もつまず聲もつきぬ也。理と云ふものは。天地の間に一パイあるものなれども。此方で動かして責めて出さねば。出てぬ也。ふいごの中の風。笛の中い聲にちがふことなし。人の身は小天地也。心に智慧はあるにちがひなし。左様ならばというて。人の身をさいて見ても。これが智慧ちやといふものはなき也。動かし責むれば。智湧き出で、つくることなき也。唯心をよく掃除して。邪魔物なきがよき也。よく空でさへあれば湧く也。ふいごも笛も。中に邪魔物ありては。風も聲も出てぬ也。心の中の邪魔物は。喜怒哀懼愛惡欲の類也。凡そ心の中に思惟することあらんと思ふ時には。心の中いかに清く空でなければ。意迷ふ也。随分きれいに邪魔物を掃除して。扱ギチ／＼とふいごの風を取るやうに。動かし責むること。笛の聲を取るやうに推す也。理はすぐなるものなれば。邪魔物さへ無ければ。湧き出づる也。思惟することは理也。謀も理也。金まうけも理也。立身も理也。理のあることならば。何ごとにも湧く也。無理なることはならぬこと也。口に喰はずに腹の満つるやうにの。働かずにも功のあるやうにの。扱かせがずに金のまうけらるゝやうにのといふことは。ならぬこと也。理を心に取ること。甚ちかみち也。屈は。つまること也。行きつかへること也。よう掃除さへしてあれば。つまることなし。是を虚而不屈といふ也。動而愈出は。心を責めねば。智湧かぬ也。笛の中へ息を吹きこまねば。聲は出でぬ也。

多言 數窮 不如守中

數は術數也。てだてと云ふこと也。手段と云ふこと也。多言は。こしらへことば也。今使者は主人の口上を先方へ傳へる役目也。主人の意の通りに口上をいふゆゑ。是は使者のことばではなし。主人のことば也。天の理の通りにいへば。是れ己れがことばにあらず。天のことば也。天の理でなき。己れがこしらへことばをいへば。どこぞでか行きつかへねばならぬ理也。窮は。穴かむりに窮と云ふ字をかきて。ゆきどまりの所へゆくこと也。つかゆること也。てだても手段も。理のなきことなれば。是非にゆきつかへる筈也。故にくちさきて言ひくるめんとするは。大きにくるしむ道也。ゆきつかへるは。知れたこと也。やはり己れが心の中を掃除して。こしらへ心のなきこと。智慧也。中を守るは。心の中を油断せず。氣をつけいと云ふこと也。

六章 谷神不死

兩方に山のある其間を谷と云ふ也。山は實位にて。谷は虚位也。谷と云ふものゝあるてはなき也。山といふものゝあひだを指して谷といへば。山のおかげで出来たる谷也。山は實位ゆゑ。頼るゝこともあり。きすのつくこともある也。谷は虚位ゆゑに。物にやぶられきすつけらるゝことなし。即ち智慧の位也。智者の智のつきぬは。己れが才角を出しかけぬゆゑ也。人の才角てゆく也。然らば己れは才角をせぬかといふに。さうではなき也。己れが才角を他人の才角にして。己れは虚位に居て用事をた

す也。谷は山のあかげで出来たる谷なれども。谷といふ名ありて己れが位をもちてをる也。左すれば他物を待たずに。谷と云ふ名を得るかといへば。さうではなし。山を連れてきて兩方へおきて。己れは虚位にをる也。故に谷につくることなし。始より虚位なるゆゑ也。智者に智の窮することなし。始より他人の才角にて。己れが才角にせぬゆゑ也。是を不死と云。つきぬと云ふこと也。神はたましひ也。

是謂玄牝

智者は虚位に居て。實位をつかふゆゑに。己れに罪なき也。このあんばいは。チャウド牝といふべきもの也。牝は女の獸也。女のけだもの也。男の獸とは實位にて。そこへまかり出て。きりもりをするもの、譬へ也。牝はかげに居て。他人にきりもりをさせて。其おかげで己れが用事をたす譬へ也。玄は。やみの夜に白きものを出したるごとく。己がもちまへの色をリンともつてゐて。世の中と一しよにくろろなりてをることなれば。他人と混同してをりて。己れが守りを失はぬ譬へ也。鶴はこれを二人目の譬と譯す。譬大せい連れだちて行くときは。第一番目に立ちたる譬は。石がありてもつまづく也。川があれば落つる也。第二のめくらは。いつも無難也。案内者を立て、行くやうなるもの也。智者はいつも第二の位に居て。まかり出づることを禁ずる也。まかり出づるは山也。實位を他にゆづるは谷也。故に是を玄牝と云ふと云へり。

玄牝之門 是謂天地根

第二の譬と云ふ智は妙智也。此妙智の湧出づる心になれば。何のことにもつまることなし。サラリくと湧出づる故に。門と云ふ。門とは。より出づる所の名也。扱天地の天地たるゆゑんは。まかり出でずに。さきに働かす也。花の開くやうに。花がひらかねばならぬやうに。天地はする也。天地が花を開くにあらず。花の方から開く也。然らば他人に働かせて。己れが罪をとらぬことは。天地の理也。ゆるに是を天地の根と云ふ也。根も湧出づる所の名也。

綿々若存 用之不勤

綿々は。連りてたえぬこと也。天地の根源より。ズツト通りてある筋といふものは。すこしもたゆみなしに。天地開闢より天地の窮盡するまで。つらなりてあるものなれば。是を好みて搜り探すものあれば。必ず得ることなれども。唯ブラリと見て居りては。百年守りても得ぬ也。故に如しといふ。有るやうで無さやうゆゑに。探り出すこと六ヶ敷こと也。左れども此探ること心得あるべきこと也。人情は兎角己れが勝手をしたがるものゆゑに。筋を己れが勝手のよい方へひつぱりよすること多し。人は人と口論し。或は過ちをすまじきことをしても。筋を引よせて。口論せねばならぬ筋ぢやと云ひ。過ちをせねばならぬ筋で過つは。過ちではなきなりなどと云ふは。畢竟筋を己れが勝手のよき方へたぐりよせて。過をかざり非をかざる也。是れ甚おそろしきことなりと思ふべし。如此筋をひつぱりた

ぐりよせては。筋ゆるるに過をかさぬることあるゆるるに。用之不勤と云ふ也。これを用ふとは。筋の方へ此方からよりそふるやうにする也。動は刀を入れてつとむること也。力を入れて此方へひつばること。あしきことなりと云ふこと也。是は探り捜すときの心得也。

天長^七地久^七。天地所以能長^七且久^七者^ハ。以^テ其不^レ自^レ生^セ。故能長生^ス。

自から生ずるとは。己れが生きやうくと骨を折りて。生くる工夫をする也。凡そ餘り死ぬまいくとするものは。死ぬもの也。死にも生にも。餘りかまはぬ男は。ながいき也。腹へ物をくはねば餓する。體に衣をかけねば凍するとして。無理に體腹を養ふ男は。盗人也。己れが随分にかせぎて喰ひ。働きて衣れば。ナルホド旨きものは喰はれず。煖かきものは衣られず。左れども凍えず餓えぬ也。それを餘りと生きんくとするものは。働きかせぎでは足るまいと思ふゆる。他人の物を盗みて喰ひ。盗みて衣る也。是はどうか己れを養ふやうに見ゆれども。忽ちに捕られて殺さるゝ也。是れあまり生きやうくとするゆるるに死ぬ也。今。人をあざむきて金銀を得るものは。大小のちがひあれども。盗人の己れを養ふにちがふことなし。どうか養ふやうに見ゆれども。畢竟はそれが損になりて。饑寒身にせまる也。餘り己れを養ひすぎるゆるるに。自己流の養ひになる也。得べきだけのものを得て居れば。天のあたへ也。自己流にて得まじきものを得るは。天の與へたるにあらず。故にウトウト取り得ぬ也。天も長う地も久しう。いつまでもかはることのなきは。自己流のさいたら働きなきゆるる也。生きやうくとあせらぬゆるる也。死ぬまいくとあせりともちめかぬゆるる也。凡そあせりともちめき。うろたへさわぐは。皆世話をやくやうに見えて。却て不世話になること也。能は。できると訓ず。且は。そのうへにと訓ず。天地の長うて。そのうへに久しいことのできるわけは。あせりともちめきさいたら働きをせぬゆるなりと云ふこと也。能は。獸の名也。能と云ふ獸は。飛ぶこともできる。走ることもできる。遊ぶこともできれども。鳥のやうには飛べず。犬のやうには走れず。魚のやうには遊げぬ也。左れどもできる也。どうかかつかでできることを能と云ふ。故にたふるなども訓ず。

是以^テ聖人^ハ後^ニ其身^ヲ而身^{先^ニ}存^ス。外^ニ其身^ヲ而身^{存^ス}。非^レ以^テ其無^レ私^ヲ耶^ナ。故能成^ス其私^ヲ。

己れを養はんくと。とちめきさわぐは。人情也。養はぬやうに見えて。此もなう養ふしかけは。天理也。天理と人情とは。うらはら也。生の字を思ひこめば。却て死の字を取る。生の字をかまはぬはうが。長壽の方也。智者の至りは堯也。愚者の至りは桀也。堯も桀も。皆氣儘もの也。氣儘は天地也。よきこと也。左れども世の人は氣儘甚だ下手也。極々の下手は桀也。富貴壽を皆とるは氣儘也。桀も富貴壽をいやにおもひたるにあらず。下手にて取りえぬ也。堯は氣儘ゆる。氣儘を一向に出しかけぬ也。譬へば旨い物も先にくひたい。遊ぶことも先に遊びたきは。人情也。左れども是を出しかければ下手也。故に堯は。旨き物にても。先づ民にくはせて。後に喰はんと云ふ也。民か遊んだならば。心